

教会学校教案誌

2010.4.5.6月号



I am always aware of the
he is near, and nothing

LORD'S presence,
can shake me.

わたしは絶えず主に相対しています。
主は右にいまし
わたしは揺らぐことはありません。

詩編 16 編 8 節



No.37

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2010年4～6月カリキュラム（第37号）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月 日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
4月4日 進級式・復活祭	復活のキリスト	マタイ28:1-10	マタイ5:12
	主イエスはよみがえられた。罪と死に勝利された主イエス・キリストを仰ごう		
4月11日	創造主なる神	創世記1:1-5	創世記1:1
	天地の創造主である神は、ただお一人。創造主なる神をたたえて賛美しよう		
4月18日	被造物の祝福	創世記1:6-25	テモテ4:4
	神の創造のみわざを学び、神の愛がこめられた被造世界であることを知ろう		
4月25日	神の栄光の舞台	創世記1:31-2:3	詩編19:2
	七日目の安息によって世界は祝福されている。神の栄光の舞台で喜び生きよう		
5月2日	人間の創造と人生の目的	創世記1:26-31	詩編8:2前半
	神は人を創造し、生きる目的を与えられた。神の御心に応えて歩もう		
5月9日 母の日	男と女の創造	創世記2:18-25	創世記2:18
	男と女に創造された。人は共に生きる存在である。互いに愛し合って生きよう		
5月16日	罪と堕落	創世記3:1-13	ローマ6:23
	罪とは何か。神の御言葉にそむき、自分が神になってしまう罪を知ろう		
5月23日 聖霊降臨祭	聖霊降臨と教会	ヨハネ20:19-23	創世記2:7
	人はキリストの聖霊（神の息）によって生かされる。聖霊によって歩もう		
5月30日	救いの約束（原福音）	創世記3:14-24	ローマ5:8
	神は人の罪を裁き、また、憐れむお方である。裁きと救いの神を知ろう		
6月6日	カインとアベル	創世記4:1-16	詩編46:2
	神から離れて、人は罪に支配されてしまう。罪の悲惨と神の憐れみを知ろう		
6月13日 花の日	ノアの箱舟	創世記6-7章	創世記6:9
	神は人の罪に心を痛めておられる。罪に心を痛め、人を憐れむ神を知ろう		
6月20日 父の日	ノアの契約	創世記8:1-9:17	創世記8:21
	神はノアを通して、あらためて人を祝福してくださった。神をほめたたえよう		
6月27日	バベルの塔	創世記11:1-9	コリント10:31
	自らを神とする人の罪の悲惨と、それを裁き、人の罪を抑制される神を知ろう		

も く じ

2010年4・5・6月カリキュラム	
まえがき	小野静雄 4
巻頭説教	二宮 創 5
日曜学校・教会学校訪問	
千里山教会教会学校の紹介	弓矢健児 9
2009年度中部中会教会学校教師研修会講演	渡辺信夫 13
ここからはじまった—改革派教会の教会教育の源流を訪ねて—	
2009年度中部中会教会学校教師研修会講演への応答	
ここからはじめよう	伊藤治郎 20
本誌の基本方針	
教会（日曜）学校像について	相馬伸郎 24
救済史カリキュラムについて	相馬伸郎 27
改革派信仰をそだてるための「救済史カリキュラム」	
コラム	相馬伸郎 28
「ぼくたちわたしたち」—説教者の立ち位置—	
副読本のご案内	29
自由募金のお願い	30
聖書研究・説教展開例・分級展開例	31
4月 4日	32
4月11日	39
4月18日	46
4月25日	53
5月 2日	60
5月 9日	67
5月16日	74
5月23日	81
5月30日	88
6月 6日	95
6月13日	102
6月20日	109
6月27日	116
2010年7・8・9月カリキュラム	123
2010年度年間カリキュラム	124
執筆者よりひとこと・あとがき	126

まえがき

小野静雄（多治見教会牧師）

日曜学校での説教は、今なお私にとって大きな緊張を強いられる働きです。もちろん、普段の礼拝説教が緊張しない、というわけではありません。私にとって、人前で語ることは、いつどのような時にも、緊張の連続です。うまく最後まで語りきれるか？ そういう不安を、伝道者になる前から、常に抱き続けてきました。

そもそも、人前で語ることにこれほど臆している人間が、伝道者になろうとすること自体、無理があるのではないか。そんな自問自答を、繰り返してきました。答えはまだ見つからないままです。

そうした一般的な、語ることへの不安とは別に、児童・生徒の前で語ることには、特別な緊張をいただきます。日曜学校での「お話」を始めたのは、洗礼を受けた直後、19歳の春だったと思います。そのころは、どの教会も日曜学校は恵まれた伝道の場でした。教会で生まれた子供たちより、一般家庭の子供の方が、数の上では遥かに多かったと思います。聖書に初めて接する子供に、主イエス・キリストの恵みと愛を語りかけることは、とても大きな喜びでした。しかし、その喜びを帳消しにするほどの緊張と不安を、いつも抱いてきたと思います。

記憶をたどれば、当時の日曜学校は、子供たちの家庭をよく訪問していました。それぞれの子らがどんな家庭で育っているか。親御さんたちは、どんな気持ちで子供を教会に送ってくださるのか。そして、何よりも欠席した子供たちの家庭を訪ねて、様子を知り、礼拝への招きを家族に伝えること。つまり、説教から牧会へ、という歩みが、ごく自然に行われていたのです。思えば、家庭を訪問することに、当方も先方もためらいがなく、教会と家庭の距離が、ほんとうに近かったと思います。

神学校の学生時代。私は神戸の神港教会に二年間出席させていただきました。神学校の校長先生が、「小野君はほっとくと心配だから、多くのそばにいて教会生活をしなさい」とおっしゃって、結局二年も神港教会でお世話になる羽目になりました。田舎の学生にとって、神港教会の雰囲気はなかなか馴染めず、本当に苦労した記憶が今も鮮やかです。

神港教会の日曜学校は、当時から「聖書学校」と呼ばれていました。全体礼拝では、会堂いっぱいの子供らが集っていました。その大勢の子供らの前で説教するときの緊張は、今思い返しても冷や汗ものです。100もの視線に負けぬよう、覚悟を決めて前に立ちました。

中学科の分級でも30名ほどの中学生が集っていました。そこでは少し気持ちが楽になって、覚えてのへブライ語で、創世記1章1節以下の言葉を黒板に書き、子どもたちを煙にまいて悦に入ったような、愚かしい記憶も鮮明です。

子供に語る。そこで味わう緊張は、その最も深い部分では、「お前は偽りのない確信と喜びをこめて、お前自身の言葉で福音を語っているか？」という問いかけに、自分の信仰を晒すところから生まれるのでしょうか。子供に、はったりや体裁は通じません。ひらたく言えば「ウソ」は通らないのです。

与えられた小さな信仰の、真実な深みを探りつつ、何とかして子供の魂に触れる言葉を探り求めながら準備し、そして、神の御霊によりすがって子供たちの前に自分を晒す。そうすることで、実は語り手である自らが、信仰の訓練を受けているのでしょうか。日曜学校教師として歩む恵みと「特権」がそこにあるように思います。

（大会教育委員会委員長）

「子を持つ親の憐れみ」

—マルコによる福音書10章13～16節による説教—

二宮 創（太田伝道所宣教教師）

イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

（マルコによる福音書 10章13～16節）

ひとりの人が、世に生まれ出る。そのためなら、どんな苦しみ痛みをも恐れない。わが子が、神から祝福された人に成る。そのためなら、どんな犠牲をも厭わない。そんな崇高な思いによって、子を持つ親の心によって、私たちは生まれ育ちました。それは決して、当たり前のことではなく、むしろ極めて、幸いなことです。この幸いに届かない現実が、世界のあちこちに、私たちの身近にも存在するからです。

その現実と向き合うため、今から50年前、国際的に大変重要な営みがなされました。1959年11月、第14回国連総会で「児童の権利に関する宣言」が採択されたのです。「児童（すなわち18歳未満のすべての者）は、あらゆる状況にあつて、最初に保護および救済を受けるべき者の中に、含められなければならない」。この崇高な精神は今日の社会に根を降ろしているだろうか。この社会の只中に遺わされているキリスト教会は、はたしてどうだろうか。そんな問いかけが聖書の中から聞こえてくるのです。

パレスチナの北、ガリラヤの湖の周辺地域で、イエスさまは安息日ごとに、ユダヤ教の会堂に入られました。聖書の学者としてではなく、権威ある者（神ご自身）としてお教えになったの

です。人々はその教えに非常に驚きました。町々村々を巡回して、神の国の訪れを宣べ伝え、そのしるしとして悪霊どもを追い出し、多くの病人が癒されたからです。癒された人々の中には、子供たちも少なからず、含まれていました。

会堂長ヤイロから「幼い娘が死にそうです、どうかおいでになり、手を置いてやってください」、そう頼まれたイエスさまは、行く道の途中で訃報を伝え聞きます。「お嬢さんは亡くなりました」。それでも、イエスさまは「恐れるな、ただ信ぜよ」とヤイロを励まし、彼の家に入って、すでに息のない子供の手を取って、「タリタ・クミ（少女よ、起きなさい）」と語られます。すると！少女はすぐに起き上がり、歩き出しました。

ガリラヤから西へ、地中海沿岸のフェニキアの町ティルスでも、ギリシア人女性から、「幼い娘にとりついた汚れた霊を追い出してください」、そう頼まれたイエスさまは、押し問答の末に「よろしい、家に帰りなさい、悪霊はあなたの娘からもう出てしまった」と語られます。その御言葉を信じ、家に帰ってみると、娘はいつもと違って静かに、床の上に寝ているではありませんか。死に至る病は！すっかり治っていました。

変貌の山の麓、イエスさまの元に、一人の父親が息子を連れて来ました。その子供は幼い頃から悪霊にとりつかれ、物が言えず、耳も聞こえず、所かまわず地面に引き倒され、口から泡を吹き、歯ぎしりし、体をこわばらせる。そして火の中、水の中へ何度も身投げする有り様でした。イエスさまは父親に「信じる者には何でもできる」と語られ、悪霊を追い出し、死んだようになった少年の手を取って起こされました。

我が子を死なせてなるものか。この子が生きるためなら何だってする。どんな犠牲を払っても構わない。自分のこの命を差し出しても惜しくない。そんな、子を思う親の思いを、イエスさまは受け留められました。親たちに、ご自分への信頼を求めた上で、息子・娘たちの「死に至る病」を癒されたのです。その噂は、ガリラヤ・フェニキア・トラコン・デカポリス・ペレア・サマリア・ユダヤへと、みるみる広まりました。

子を持つ親なら、そんな噂を耳にしたら、何を思うでしょうか、何をしようか。我が子をひと目、イエスという方に会わせたい、神の言葉を聞かせてやりたい、神の手に触れてもらいたい。悪霊にとりつかれることのないように、死に至る恐ろしい病にかかることのないように。そう思って、出で立つ親子が大勢いても、不思議ではありません。アーメン！本当にその通りです。今日の聖書は、その現実を伝えています。

「イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た」。幼い子供は、自分で身を守る術を知りません。それで、親の心がどちらを向いているのか、その相手に対して親はどんな思いを抱いているのか、それを敏感に察知します。親が警戒する相手には、近づこうとしません。親が信頼する相手には、飛びついて行きます。当然！イエスさまの身边は、まわり

ついてくる子供たちで溢れました。

イエスさまは、近づいてくる子供たち、一人ひとりに目を留められたことでしょう。まわりついてくる幼な子、一人ひとりを迎えられることでしょう。「よくきたね……おなまえは？……いまいくつ？……だれときたの？……どこから？……なにがすき？……こわいものは？……いまどうしてほしい？」。そんなふう一人ひとりに声をかけて、その小さな心の声に、耳を澄まされたことでしょう。

ところが！その近くで、親たちと弟子たちの、騒々しいやりとりが始まったのです。「弟子たちは、この人々（イエスの元に子供たちを連れて来た親たち）を叱った」。〈叱る〉と訳された言葉 *epitimaw*。マルコはこれを、これまでほとんどイエスさまを主語として使ってきました。「イエスが、『黙れ、この人から出て行け』とお叱りになると、汚れた霊は大声をあげて出て行った」。『汚れた霊どもはイエスを見ると『あなたは神の子だ』と叫んだ。イエスは『そのことを言いふらさないように』と霊どもを厳しく戒められた（お叱りになった）」。『イエスは起き上がって風を叱り、湖に『黙れ、静まれ』と言われた。すると風はやみ、すっかり凪になった』。「ペトロが答えた。『あなたは、メシア（キリスト）です』。するとイエスは、そのことを誰にも話さないようにと弟子たちを戒められた（お叱りになった）」。このように〈叱る〉という行為は、〈従わせる〉という目的でなされました。

ところで！「それからイエスは、人の子（と称するメシア、即ちこのわたし）は必ず多くの苦しみを受け、長老・祭司長・律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。しかもそのことをはっきりお話しになった。すると、ペトロはイエスを脇へお連れして、いさめ（叱り）始めた。イエスは振り返って、弟子

たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。『サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている』。イエスさまに従ったはずのペトロが、イエスさまを叱った（従わせようとした）のです。イエスこそイスラエルの王に即位すべきだ、我々は王の側近となるはずだ、メシアが殺されてなるものか。これが、彼の人間的な思いでした。このような主客逆転を企てるサタンの仕業を見て、イエスさまはペトロをお叱りになった（従わせようとした）のです。

さすがに！ 弟子が師匠をいさめる（しもべがあるじを叱る）所業はなりを潜めますが、弟子たちの側近意識はくすぶりつづけます。受難を予告なさるメシアの思いとは裏腹に、「誰が一番偉いか」、これがもっばらの関心事でした。自分たち十二使徒以外人間がイエスの名を使って癒しの業をしているのを見咎める。まず自分たちに従うようにと叱る。しかし、従わないので、やめさせようとする。自分たちはメシアの側近である。メシアに従う前に、まず側近に従うべきである。そんな特権階級意識がありました。

弟子たちは、あの人々（イエスの元に子供たちを連れて来た親たち）を叱りました。その行為は、彼らの側近意識と無関係ではないでしょう。イエスに近づきたいなら、まず弟子である我々に従え。我々を通さずに、子供たちを連れてきて、メシアの手を煩わすとは何事か。そんな特権階級意識「上から目線」が透けて見えるのです。

親たちは戸惑うばかり、途方に暮れるばかり、だったでしょう。我が子がイエスさまにせつかく会えたのに、それを見咎められる。イエスさまに拝謁する前に、十二弟子のご機嫌を伺わねばならんとは、思いも寄らなかった。そんな状況だったでしょう。「しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。『子供たちを

わたしのところに来させなさい（子供たちがわたしに来るままにさせなさい）。妨げてはならない』。イエスさまは、その状況に憤られた。弟子たちの所業にいらだたれた。彼らの側近意識に腹を立てられた。彼らの「上から目線」に憤慨なさった。そして嚴重に注意なさいます。子供たちがイエスのもとに来るのを妨害してはならない。児童たちが神の子に近づいてくるその道に障害物を置いてはならない。幼な子供たちがメシアにまどわりつくのを禁止してはならない。「上から目線」をやめなさい。特権階級意識を捨てなさい。人間に服従させ、神に反逆させる、サタンの所業から離れ去りなさい。

「はっきり言っておく。子供のように、神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」。この宣言は、幼児洗礼を間接的に基礎づける聖句として、キリスト教会の教理文書や洗礼式文に、しばしば取り上げられます。しかしマルコがここで強調したいのは、イエスさまの特徴的な態度なのです。大きな人ではなく小さな子（まだ公民権を持たない者）に目を留める。偉い人ではなく低い人（見下げられてしまう者）を迎え入れる。そして、神の子が目を留めた人を、メシアが迎え入れた者を、その聖なる現実を妨害する所業に対して、激しい憤りを示される。このイエスさまの姿勢・身構え・心構えこそ、神の国の王のなさりようなのです。

「そして（イエスは）、子供たちを抱き上げ、手を置いて、祝福された」。イエスさまは、羊飼いが小羊を抱き上げるように、一人ひとりの小さな手を取られたのです。この羊飼いは、医者が病人を癒すように、一つひとつの小さな命に手を当て、聖なる霊と新しい命を授けられたのです。この医者は、神の国の王キリストとして、ご自分の民ひとり一人の名を心に刻んで、その命を永遠に背負ってゆかれるのです。

我が子を死なせてなるものか。この子が生き

るためなら何だってする。どんな犠牲を払っても構わない。自分のこの命を差し出しても惜しくない。そんな「我が子を思う親の思い」を、聖書は「憐れみ」と表現します。イエスさまは、憐れみ深い神でありつつ人となられて、子を持つ親たちの憐れみを、ご自分の憐れみとなさるのです。

我が子をひと目、イエスさまに会わせたい。神の言葉を聞かせてやりたい。神の手に触れてもらいたい。悪霊にとりつかれることのないように、死に至るような恐ろしい病にかかることのないように。そう思って、出で立つ親と子を、メシアは待っていてくださいます。妨げる者たちを叱り、従わせて、子供たちを祝福して下さるのです。

児童はあらゆる状況にあつて、最初に保護および救済を受けるべき者の中に含められなければならない。この崇高な精神は、神の子イエス・キリストの御心そのものなのです。

「子供たちを、わたし（イエス）のところに来させなさい。妨げてはならない。神の国は、このような者たちのものである」。

(祈り)

愛しまつる主イエスよ、しもべの心は、おごっていません。はしための目は、高いところを見ていません。大きすぎることを、力の及ばぬ驚くべきことを、私たちは、追い求めることをいたしません。従いまつる神の御子よ、しもべは、魂を沈黙させます。はしための魂を、幼子のよ

うにします。母の胸に抱かれた乳飲み子のように、私たちは、あなたの恵みだけを慕い求めます。崇めまつるキリストよ、十字架に示された、あなたの「憐れみ」によって、自分の命を守る術を知らない「乳飲み子」を、約束の地へ伴ってください。まだ信仰をわきまえていない「幼子」に、天の御国を継がせてください。

称えまつる羊の大牧者よ、復活に証しされた、あなたの「慈しみ」によって、乳飲み子たちが皆、自分の名前と国籍を持つことができますように。幼子たちが皆、健康に発育し成長することができますように。少年少女たちが皆、必要な栄養と住居と遊びと医療とを与えられますように。若者たちが皆、それぞれに相応しい教育を受けることができますように。児童を養育する親たちが皆、社会保障の恩恵を十分受けることができますように。あらゆる状況にあつて、乳飲み子も幼子も、少年少女も若者も、最初に保護と救済を受けるべき者として、あなたのもとに、おらせてください。そのために私たちを、あなたのしもべ・はしためとして、奉仕させてください。

聖霊よ、この祈りが、御旨に適いますように。
父なる神よ、あなたの御国が来ますように。
御心が行なわれますように。

あなたの御子、私たちの主、イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

(中部中会日曜学校委員会委員)



千里山教会教会学校の紹介

弓矢健児（千里山教会牧師）

1. はじめに

千里山教会は大阪府吹田市の千里山の住宅地に位置します。電車なら大阪の阪急梅田駅から阪急千里線で約20分行った千里山駅より徒歩7分の場所にあります。1974年の伝道開始以来、今日まで千里山の地において福音を宣べ伝えてきました。また、主の日の礼拝（朝礼拝・夕礼拝）を、何よりも教会形成と信仰生活の基本として大切にしつつ教会形成に励んできました。

そんな千里山教会において、教会学校は大切な位置をしめています。現在、教会学校（幼稚科～中学生科）の礼拝に出席している子どもたちは平均11名で、ほぼ全員が契約の子どもたちです。そして、ほとんどの子どもたちが、教会学校だけでなく、その後の朝礼拝にも出席します。現在、教会の朝礼拝の平均出席人数は40名ですが、その内10名は教会学校の子もたちです。この数字からも、千里山教会の礼拝にとって教会学校の子もたちの存在の大きさが分かります。

子どもたちは教会学校の活動だけでなく、朝礼拝においても年に五回、「子供聖歌隊」として詩編歌讃美をしています。また、朝礼拝の礼拝献金奉仕においても、契約の子どもたちは親と一緒に奉仕してくれています。そういう意味で、千里山教会では教会学校＝子どもの礼拝、朝礼拝＝大人の礼拝、という分離をしていません。したがって毎週の朝礼拝の説教においても、一般信徒向けの説教の前に、必ず同じ聖書テキストから短く子ども向けの説教がなされます（5分～10分）。大人も子どもも一体となった礼拝共同体の形成こそが千里山教会の教会形成の基本となっています。

2. 教会学校活動の紹介

(1) 礼拝・分級

礼拝は主日の朝9時～9時30分です。礼拝プログラムや讃美歌、主の祈りをプロジェクターで映し出し、教会学校の教師が交代で司会をします。礼拝では中部中会教育委員会発行の「子どもカテキズム」を一年かけて学び、司会の教師がその日の箇所から短くお話しします。また、毎月、暗唱聖句を決め、礼拝の中で聖句を覚えていきます。年に三回、分級の時に暗唱聖句大会を行ないます。また、毎月の月初に、前月一度も休まなかった子どもに皆勤賞のカードを渡しています。

分級は現在、幼児クラス、小学生下級クラス（1～3年）、小学生上級クラス（4～6年）、中学生クラス（7～9年）の四クラスです。分級で何をするか、何を学ぶかは基本的に担当教師に任せられています。それぞれの担当教師がクラスの子もたちと向き合う中で計画を立て実行しています。学びだけでなく、音楽やゲームなども積極的に取り入れています。

(2) 教会学校行事

お楽しみ会

原則、毎月第二土曜の午後3時から教会で行ないます。ここ数年は、手塚治虫の「旧約聖書物語」のDVDを見た後、子どもたちとおやつを食べたり、ゲームをしたりしています。おやつのメニューは、その月の担当教師が考えますが、1月のお楽しみ会ではお餅、夏はかき氷などが出ます。また、たこ焼きも好評です。



お楽しみ会の様子



2009年春のピクニック



暗唱聖句大会（2月、6月、10月）

礼拝後の分級の時間を利用して、年三回、礼拝の中で覚えた御言葉の暗唱聖句大会を行っています。子どもたちは頑張って御言葉を覚えます。

進級式（4月）

教会学校礼拝の後に行ないます。分級のクラスごとに担当教師の紹介をします。また、年間の皆勤賞、精勤賞（欠席五回まで）、努力賞（欠席十回まで）を発表し、賞状を渡します。

春のピクニックと秋のピクニック

年に二回、子どもたちと一緒に野外にピクニックに出かけます。春のピクニックでは、2008年は服部緑地公園でバーベキュー、2009年は伊丹スカイパークに出かけました。秋のピクニックでは、2008年は万博記念公園に、2009年は服部緑地植物園に出かけました。

中会合同夏期学校（8月）

西部中会の合同夏期学校に教会学校として積極的に参加しています。2009年は9名の子どもたちが参加しました。また、教師2名もスタッフとして参加しました。

花火大会（8月）

8月下旬の日曜日の夜、服部緑地公園に行ってスイカを食べ、花火大会をします。

教会学校クリスマス礼拝（12月）

毎年クリスマス礼拝の日の夕礼拝は、教会学校クリスマス礼拝として子どもだけでなく、大人も一緒に献げています。礼拝は特別プログラムに基づいて行なわれ、中学生クラスのリコーダー演奏、小学生上級クラスのハンドベル、聖書朗読、小学生下級・幼児クラス合同の降誕劇、信徒の方々の独唱、合唱などもあります。また、最後には教会学校から子どもたちへのプレゼン

ト、子どもたちから大人たちへのプレゼントもあり、楽しいクリスマスの時を過ごします。礼拝での献金は、2009年はNPO法人「国境なき子どもたち」の活動のために献げました。



教会学校クリスマス
幼稚科・小学下級クラス降誕劇



案内トラクト

キャロリング (12月23日：休日)

子どもたちと一緒に、近隣の信徒の方々の家をまわり、讃美をします。寒い時期ですが、子どもたちも元気に歌ってくれます。

(3) 教会学校機関誌『ぶどうの枝』の発行

毎月、機関誌『ぶどうの枝』を発行しています。教会学校行事の報告やお知らせ、月間皆勤賞やお誕生日の子どもたちの紹介もしています。教会学校と子どもたちの家庭を結ぶ大切な機関誌です。2010年1月で218号になりました。

3. 今後の課題・展望

現在、千里山教会の教会学校は、ほぼ契約の子ども中心になっています。年に数回、教会学校行事に参加してくれる地域の子どもたちもいますが、毎週の教会学校礼拝と分級は契約の子どもたちだけになっています。もちろん、契約の子どもたちが多く与えられていることは豊かな恵みです。しかし、地域の子どもたちへの伝道ということを考えた時、まだまだ十分ではありません。確かに教会学校が契約の子ども中心であるということは、大人と一体となった礼拝共同体の形成という点では良い面があります。けれども、その反面、キリスト教に馴染みのない外からの子どもが参加しにくいという面があります。したがって、礼拝共同体の一員としての教会学校でありつつ、いかに地域の子どもたちに開かれた、参加しやすい教会学校を形成していくかが、今後の課題であると思っています。

また、その他に教会学校との関係で力を入れていることは、西部中会の合同夏期学校（小学生）や中高生会に子どもたちを積極的に参加させることです。各個教会の狭い枠に閉じこもるのではなく、子どもの時から各個教会を越えた中会的な交わりを経験することは、彼らの信仰の成長に大きな意味があります。今後も子どもたちの中会的な交わりと学びを積極的に支援していきたいと思っています。

ぶどうの枝

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。(ヨハネ15:5)

発行：日本キリスト改革派 千里山教会教会学校
(〒566-0851 吹田市千里山西3-8-25 TEL06-6330-5530)

◆1月の暗唱聖句◆

神がわたしたちを憐れみ、祝福し

御顔の輝きと

わたしたちに 向けてくださいますように。

— 詩編67編 2詩

キャロリング (12/23)

この日、めずらしく雨の心配をしながら、大人の人たちと
いっしょにまわりました。散歩中の犬とおじさんが立ち止ま
って、じっと聞いてくれて、うれしかったです。

教会に帰ってから、大人の人たちがもう二軒まわっている
間に、お好み焼きを食べました。

その後、ろうそくを一本立てて、クリスマス祈禱会をしま
した。聖書朗読に参加してくれた人もいましたね。お疲れさ
ま。(だれですか、夜遅くまで教会でさわいだのが楽しかつ
たと言ってる人は!)
久保典子先生

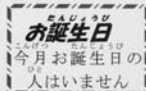
◆お知らせ◆

●お楽しみ会 (1月9日) ●

先日のことですが、いつものDVDにかわり、クリスマスのビデ
オを見ました。おやつは恒例のおもち。おいしかったかな?
みんなの感想などは、来月のぶどうの枝にのせます。

12月の月間皆勤賞

太田佳帆さん、杉山琉太くん、
弓矢麗さん、久保葉月さん



1月の行事◆

1月 9日 お楽しみ会



聖書劇での一コマ。
みんな、なかなか似合ってますね~
—クリスマス礼拝にて

ぶどうの枝 (4・1ページ)

教会学校ニュース

クリスマス礼拝 (12/20)

- 朝の礼拝では、子ども聖歌隊でマリアの賛歌を歌いました。去年最後の聖歌隊でしたが、元気に歌えました♪
- お昼の愛餐会では、大人の人たちが作ってくださったごちそうがたくさん並んでいました。おいしかったですね~
- ▲中学生クラスのリコーダー招花ちゃんが作ってくれたお菓子もありました。
- クリスマス礼拝では、はじめに中学生クラスのリコーダー演奏と、高学年クラスの朗読がありました。リコーダーの和音がきれいでしたね。
- 高学年クラスは、その後でハンドベル演奏も。練習の時よりも上手に演奏できました。



▲高学年クラスのハンドベル (練習の時) と、聖句朗読

- 喜志折君がろうそくを点火し、大人の人たちによる聖書の朗読と賛美が続きました。

- 最後の発表は、幼児クラスと低学年クラスの聖書劇です。練習の時とはうってかわって(?), いい劇になりましたね。



▲幼児・低学年クラスの聖書劇と、それを楽しむ大人の人たち

- 大人の人たちへのプレゼントは、マツボックリやドングリを使って作った飾りをみんなで配りました。今頃は玄妙な飾りに飾られているかな?
- 献金は、合計で18,000円献げられ、フィリピンで台風の被害にあった子どもたちのために送金しました。
- 先生からみんなへのプレゼントは、カレンダーとクッキーでした。カレンダーは野村愛希子先生の手作りで、聖書のいろんな場面が描いてありますよ。クッキーは教会の婦人会の方々焼いてくれました。



▲先生からのプレゼント。お友だちをつけてきてくれた人もいましたね。これからも、ぜひぜひさそってあげてください。

ぶどうの枝 (2・3ページ)

ここからはじまった

—改革派教会の教会教育の源流を訪ねて—

渡辺信夫（日本キリスト教会東京告白教会牧師）

1. 廃墟の中から

今回の講演の題を頂いて、背筋に緊張が走った。……このように言うては何のこともお分かりにならない方がおられるだろう。それは当然だと思ふ。私に課せられたこの課題を見て、これを自分が考えるようになった初めの時のことを思い起こしたからである。まさしく「ここからはじまった」という思いがある。

私が教会の教育という課題を考え始めたのは、敗戦直後である。私は打ちのめされていた。戦争の末期8カ月、前線にいたから、完膚なき敗北になることは容易に予想できた。だから軍隊の解体になって、意外という感はなかったが、敗戦を考うまいとして、思考を停止していた自分の不明を恥じないではおられなかった。

この時から、「教会の戦争責任」という生涯引きずって行かねばならない重い課題を担うことになったが、私の場合は、そこになお己れ自身の戦争責任が絡みついていた。というのは、私は教会の責任ある立場にいたのではないが、紛れもなく教会の一員であり、「教会を信ず」という告白を受け入れており、それでありながら、神に対して教会が罪を犯すのを差し止めることは何一つしなかったからである。さらに、教会の責任ある地位にあって、保身のために信仰的妥協をし職務の尊厳を汚した人たちがいるが、彼らは戦争を推進して行く働きはしていない。私は下級の将校ではあるが、軍の中で号令を掛ける立場にいたから、責任は大きい。

惨憺たる状態に破壊された社会に戻って、人々の生活の再建のために何かをしなければならぬという思いに駆られたのだが、最も緊急

な課題は、自分自身をまともなキリスト者として建て直すことである。それは学びを根本からやり直すことであった。だから、哲学とキリスト教神学を懸命に学んだ。それによって何か業績を上げようという抱負があった訳でもない。伝道者になるという考えは全然なかった。

ただ、まともなキリスト者になろう。つまり、自分が信仰者であろうとしつつ、そうでなかったことを痛いほど思い知らされていた。この思いについて分かって頂くためには、自分の精神的な歩みを詳しく語れば良いと思うが、それを話し始めると、今日語らねばならない本論に入れなくなってしまふ。だから、詳しく述べることは省略させて頂くが、私が何かにつけて自分の戦争責任の問題を繰り返して語っていることを思い起こして頂きたい。そういうことをまだ聞いていないという方があるなら、どなたかご存じの方に聞いて頂きたい。

自分を誤魔化すことのないキリスト者になろうという思いは前からあったが、まともであろうとしつつ、国家が戦争に突入して行く中で、おかしいなと感じることはあったにも拘わらず、歯止めを掛けることは何もしなかった。それでいて、この国の中で最も良心的な国民であろうとしていたつもりであった。そのことが根本的に間違っていたということに敗戦でやっと気がついたのである。

だから、キリスト教の根本的な学び直しが必要であった。牧師になるのではなく、一信徒として生きる。そして教会への奉仕は当然なすべきである。奉仕としては、特に理由はなかったが、求められて自分の属する教会で日曜学校の教師

をした。適性があるとは思わなかったし、子供が好きだということでもなかった。それでも嫌々ながらでなく、使命感を感じて手抜きせずにも励んだ。実は戦争に行く前も日曜学校を手伝っていた。しかし、戦争による空白期があるから、日曜学校の活動は消滅していた。子供に教える教案は発行されていない。自分でゼロから作って行くほかない。

その時の私の身分は学生であるが、戦争で全てがガタガタになっていた時であるから、大学の講義もゼミも整っていない。窓ガラスも割れたまま。多くの学生は生活に追われて講義に出られない状況であったが、私は生活よりも学びに打ち込んだ。本気で研究する者は風体を構わず研究に打ち込んでいた。私もその一人であった。書物だけは豊富にあったので、学ぶことは無制限に出来た。戦争の虚しさによって虚脱状態になっていた後であるから、神学の学びに大きい充実感を持った。その学びをしながら日曜学校の教師をし、それに生き甲斐を感じていた。

神学の勉強といっても牧師や神学の教師になるためではない。自分の信仰の建て直しと修練のためである。自分の信仰が間違っていたことは敗戦という結果を見れば分かるのだが、どこがどう間違っただけでこうなったかは良く掴めていないし、誰も教えてくれない。だから、自分でそれを突き止めるまで、神学の学びを深めねばならないと思った。

この時の学びが何十年かの後に形をなしたが、どういう勉強をしていたかには触れない。その学びと平行して日曜学校の務めに精力を注いだ。

そのような神学の勉強が、子供たちを教えるために必要だったとは言わない。しかしこのような状態で学びかつ教えることが出来たことは幸いであった。神学は私自身を偽ったり誤魔化したりさせないための有効な修業だと思った。子供たちに難しいことを教えはしなかったつもりであるが、自分が分からないことは教えない

ようにしようと思って、教える以上の多くの勉強をした。その子供たちが全て信仰の成長をしてくれたのではないが、その時の子供たちが今も教会を支えている。

こういう教育をしつつ、日曜学校の本質は何なのかを考え、歴史を調べ始めた。教会には、以前からやっていることだから当然しなければならないと思われて、考えなしに行なわれていることが沢山ある。私はそれを全部ブチ壊せとは言わなかったが、なぜこれをするのか、いちいち検討した。慣習的にそうなっているというだけで、なぜそうなのか、考えられていないことを問い直した。日本が一旦破壊されてしまった時期であるから、根本的に問い直すことは比較的容易であった。

その頃、何年何月であったか、記録が手許がないので正確には言えないのだが、敗戦の翌々年、当時発行されて間もないキリスト教月刊雑誌「福音と時代」が「日曜学校はいかにあるべきか」という主題で懸賞論文を募集した。私は考えていた問題でもあるから、迷うことなく一気に書き上げて応募した。

戦後、米軍は日本占領政の策としてキリスト教を優遇し、それに便乗する教会は多かったが、「福音と時代」はその風潮に逆らう雑誌であると私は評価していた。そのしばらく前に、赤岩栄という旧日基の牧師が、日曜学校廃止論を唱えて議論を巻き起こしていた。懸賞論文の企画はその議論の続きであろう。

応募論文の審査で私は第一席になって、雑誌に掲載され、大いに自分の励みとなった経験であるが、どんどん新しい知識獲得をしていた時期であるから、自分の書いた物は間もなく自分でも恥ずかしく感じられるようになった。だから、その論文を紹介することはない。ただし、間違った方向だとは思っていない。むしろ、初期に正しい方向付けを確認させて貰ったと感謝している。その方向付けにしたがって自分としては一貫した歩みをしたと思うが、私の方向付

けに他の人々が同調するというにはならなかった。

私自身その頃は日曜学校に専念できたが、やがて牧師として生きることになり、間もなく教団離脱、新日基の建設という大事業に参加することになったので、年少者の信仰教育という課題は、私自身の関心事の一部に縮小せざるを得なくなった。

くだらぬ思い出話を聞かせられたという感じ方が多いであろう。その感覚は正当なものである。何かの参考にはなるはずだ、と聞き直すつもりはない。ただ、戦いに敗れて、他の人の責任を問うよりも、自分自身の破綻からの立ち直りを模索していた私にとって、明りが見え始めた時である。それが改革派教会の教会改革の源流とどう結び付くかといえば、私自身には特に結び付けようとする意図はなかったけれども、普段考えていたことが、ここにマルマル出たのである。

もともとカルヴァンが分かるようになりたいという思いを抱いていたのであるから、あの混乱の時代の中で、カルヴァンが目指したような教会教育が求められなければならないと私が探り当てたことはお分かり頂けると思う。ここはここから始まったのである。

前置きはここで終わる。次に、改革派における教会教育の出発を見て行く。

2. 生涯が一つの単位

改革派の宗教改革において、初めから教会教育問題が把握されていたのか、という疑問を持っている方がいると思う。その疑問を解いて置きたい。

宗教改革は、当時の思想の最先端問題として、最も意識の高い人々の間で争われた案件であった、教会の子供たちが関係する余地はないではないかと考えている人は多い。今日においても、宗教改革の理解のためには、かなり深いところまで当時の人の意識を掘り下げなければならない

いと考えられている。それと比べて子供の信仰の教育はもっと単純なもの、深く考えるほどのものではないではないか。

こういう考えは今日も、教会のことをキッチリと神学的に論じているの間にもあって、子供の信仰教育の扱い方にそれが表れているのではないか。先程少しだけ触れた日曜学校廃止論、これを私は取り上げようともしなかったが、取るに足りぬ議論だと思っていた。今でもそう思っているが、日曜学校不要論を唱えた人はそれなりの理由付けを考え、その理由付けにはそれなりの筋が通っているが、方向がズレていた。

子供の信仰教育に関心がないという大人は今でも多い。だから、今でも日曜学校廃止論が出て来ておかしくない。ただ、このことで議論を起こそうとする人がいないだけだ。つまり、子供の教育に関心がないという人は多いのである。関心が他の方に向いているということだ。これは、たまたまそうであるだけで、ある機会にその関心がムクムクと高まって来る場合はよくある。

教会の外のことは今は無視して置くが、教会の中で子供の存在が関心を引かない状況は、どの時代にもつねにある。それでも、例えば我が子について考えると、また自分自身について思いめぐらす時、その幼少時、青年時、またやがて来るであろう老年時を考えさせられる機会は、誰にでも訪れる。したがって、他の人についても、その幼少時代から老境にいたるまでの、生き方や生活意識について思い及ぶのは当然である。たまたま、そのことに無関心である時があるとしても、無関心でおられない機会に出会うことは必ずある。

教会を一つの「体」として捉えるように聖書は我々に教えているのであるから、その体を構成する一つひとつの「肢」について、またその肢についても、生まれた時から死ぬ時までの全人生にわたって考えるのは当然である。生涯の一時期についてだけ関心が集中することはある

としても、それだけでは人間理解また教会理解としては偏り過ぎているということは容易に理解されるはずである。

話が広がり過ぎているかも知れぬが、今日、世間一般も、そして教会の中でも、乳幼児から高齢者までの一続きの人生行程を歩んでいる人間を、そのようなものとしては捉えないで、年齢層別に輪切りにして、別々に見てしまう捉え方に偏り勝ちではないか。これがどんなに大きい問題かということ論じつつもりはないが、今日の集いの中で一緒に考えようとしている問題が、全体として見渡せるように、視野を拡げて全年齢層を捉えるようにして置きたい。

宗教改革を殊更に取り上げるまでもなく、どの時代であれ、教会は、御言葉を与えられ、かつ受け入れるべき「人間」、その「魂」の辿る歩み全体に関心を向けている。その関心は宗教改革の時に特に深かった。だから、宗教改革以前の、教会の働きが形骸化したり、一時的な感情の高まりを重要視したりするのでなく、魂の救いのためには何が肝心の点であるかを考えたのである。そこでは、人々に働きかけて一時的成果を上げるようなことには関心が向かわなかったのである。人間は一生涯を一単位として捉えなければならないと宗教改革の教会は考えた。人が神の裁きの場に引き出される時、生涯の全ての部分にわたって検討されることは当然であるが、審判は初めから終わりまでの一つの生涯について下るのである。

一個の人間を一つの存在として捉えることが出来にくくなって、これをバラバラに解体して、年齢別に纏めるとか、機能別に纏めるという見方が今日では当然となっている。政府やマスコミがこのような捉え方をすることにそれなりの意味があることは認めるとしても、教会までがこういう捉え方に重点を置きすぎることの危険を我々は叫ばなければならない。

神を父とする信仰者にとって教会は母であると古代教会の時から言われている。カルヴァン

もその誓えに賛成であるが、幼児を育てるには母親がなければならないというだけの理解ではない。母親は人生の全段階をつうじて必要なものとして、神によって立てられた器であるとカルヴァンは見ている。だから、教会による育成は出生から死に至るまですべての年齢段階に必要である。

カテキズムの重要性が宗教改革の中で強調されたが、全生涯との繋がりの中でのカテキズムを理解しなければならない。これを信仰告白をするまでの教育と捉え、信仰告白以後は教育を終えた者と看做すのではない。信仰告白をするとは、むしろ聖晩餐の共同体の中に受け入れられることであって、そこから信仰者としての歩みは本格化するのである。つまり、聖晩餐の共同体の中に生き、かつ歩むことが神の子とされた者の終生の教育なのである。だから、カテキズム教育と同じだけ熱心に聖書を学ばせ、聖晩餐を守らせる。また、信仰告白以前の年少者にカテキズムへの出席を義務づけるほどではないが、信仰告白を済ませた年長者が、カテキズムのクラスに通ってカテキズムを復習することが奨励された。

これは後の時代に盛んになった生涯教育と似ている面はあるが、成長に応じて多様性を持つ教育に変わって行くものではない。基本を繰り返し学び学ばなければならないという根本理念に基づいたものである。この学びのために主の日の午後を宛てる場合が多い。

教会の教育に携わっている者としては、現在受け持っている世代に、関心が集中することは当然なのだが、そこにしか関心が及ばない、ということではいけない。日曜学校不要論は日曜学校に来るような年齢層に関心が向かず、ほかの年齢層に関心が行ってしまったというだけのことである。

3. 宗教改革における年少者の信仰教育

宗教改革においては、子供の信仰教育が第一

のこととして位置付けられていた。宗教改革の発端の時からそのように規定されたのではないが、確立した宗教改革態勢は「カテキズム」を基本の姿勢として定めている。リフォームドの教会に多くにおいては、カテキズムを信仰告白として扱う。

以前の時代には、子供の教育についての意識がなくて、子供は放置されていた。中世の教会で小児の信仰教育の意義を発見したのは、アルプスの山中に押し込められていたヴァルド一派の教会だけであって、後に異説を唱えて迫害されるチェッコのフス派がこれに倣った。このやり方が宗教改革によって採り入れられた。

教会の中には子供たちに分からないことばかりがあり、子供というものの存在に、大人たちは余り関心を向けていなかった。子供は人間になり切っていない、人間とは別のものとして扱われた。だから、場合によっては子供は切り捨てられた。

子供の切り捨てが行なわれた時、主イエスが怒りたもうたことを忘れてはならない。「このような者こそが神の国に相応しいのだ」と主は教えておられる。福音書のこの箇所は大事どころだとしばしば言われているが、実際には教会の中で子供は重要でない者、優先順位では後回しにされる者、場合によっては切り捨てられて良いものと考えられ易い。

その事を拠り所にして、子供こそが重要だというユートピア的子供中心主義が跋扈する危険も生じ易い。しかし、聖書からそういう主張が出たのではなく、別の根源から発した思想が聖書を利用しようとしただけである。子供が或る意味では未成熟で、特別な保護を必要とすることも忘れてはならない。

宗教改革以前の状態を何もかも否定すべきだと言うつもりはない。そのことは兎も角として、宗教改革以前の教会がローマ・カトリックの教皇主義によって歪められ、主の言葉によって規定されるべき道を踏み外したことは、厳しく批

判し、破棄すべきものは破棄しなければならない。

宗教改革以前の教会は、御言葉から離れて、人間の着想によって教会の規定を作り、その「教会法」にしたがうことによって救いが約束されると教えた。例えば、自分の罪を司祭の前で数え上げて告白し、その罪の償いに何をなすべきかの指示を司祭から受けて、その償いを果たす儀式に与ることが救いの道であると教えた。つまり、それ以前の年齢の者は、殆ど人間として扱っていなかった。

宗教改革の教会は、やや大まかな言い方になるが、聞き分けが出来るようになればなるべく早い時期から、子供に「信すべきこと」、「行なうべきこと」を先ず教えようとした。そのための教材として「カテキズム」が編纂された。このカテキズムというものの成立、その発展について、詳しく語るのは別の機会に譲るはかないと思う。

宗教改革の時代に、短期間のうちにカテキズム教育の形が整えられて行く過程を調べていて、私は深い感動を覚えた。それは先に言ったように、私が戦後、本格的に学び始めて間もない時のことであった。その学びを書物に纏めたのは、長い時代を経て後であるが、宗教改革を遂行する志がカテキズムという形に実ったという理解は、早い時期に捉えられた。そのお陰で大きい迷いを起こすことなく、一生涯神学研究的道をひたすら進むことが出来たのだと感謝している。

4. 教会の教育権

カテキズムは子供にも分かる平易なものである。これを教える人にとっても平易な課題である。ルターのカテキズムは最も初期のものの一例であるが、教えるのは家々の父親である。親が教えるとは最も基本的な教えだという意味であると思う。カテキズムを教師が教えるように代わって行ったが、これは親では不適切である

から訓練を積んだ教師に代えなければならないという意味ではないと思う。本来、神は人が規になった時、教える権威と義務をこれに授けたもう。だから、「汝の父母を敬え」という戒めが意味を持つのである。

教師が教えるのは親の務めの「代行」である。親はその務めを教師に「委託」した、というふうに理解しなければならない。ここで、もう一つ考えなければならないのは、教師の務めの根源はどこかということである。親の務めが一部教師に委託されると理解して良いと考えられ、したがって親の「教育権」が教育の根源だと考える思想があるが、これは人間社会に神が自然権として与えたもうた秩序だという考えであり、我々は一応それで納得しているが、もう少し踏み込んで考えたい。

イスラエルの中には親の教育権という原理はハッキリしていた。だから親は子を訓戒し、しつけをするだけでなく、命の根源である御言葉を親が子に伝え、これによって言葉と生命が伝えられる。その伝承の行なわれる場が礼拝である。ここでは、親は子に対して自然的な生命の根源を与えるだけでなく、祝福された生、靈的生命を与えるものとして理解されなければならない。それは教会に教育権があって、その教育によって祝福された生命が肉の親から肉の子へと伝えられるのみでなく、肉的な親子関係のないところにおいても御言葉を宣べ伝えるという営みによって生命と祝福が伝達される、というところまで立ち入って考えなければならなくなる。

宗教改革は古代教会の回復であると改革者たちは信じていた。彼らの確信は基本的には正しいのであるが、古代についての歴史研究が進んでいなかったため、宗教改革が立て上げたものは必ずしも古代の復原ではなかった。宗教改革が作ったようなカテキズムは古代にはなかったのである。

古代教会が作っていた洗礼準備の教育書は、

かなり厳格なものであるが、基本的教理ではなかった。これはむしろ、古代教会が教会訓練についてどのように考えたかを示す材料であって、教会の基礎とは別のものである。

もう一つ宗教改革の時代には、教育というものの、また教育を受ける者、年少者への関心が以前より進んでいたと思う。それ以前には教育という言葉また教育という概念は普及していなかったと私は理解している。教会の外でもそうであり、教会の中でもそうであった。教会の外で教育への関心が高まったのは、昔は王家や資産家などだけが子弟を教育していたのに、中世末期から近世初頭にかけて、子弟に教育を受けさせる階層が厚くなったという社会的変化があったからであろう。教会は子供たちに教育を施すことが出来る社会基盤をすでに持っていた。

この時代に教育する権力を取得しようとしているもう一つの力があつた。それは国家である。教会と国家が教育をめぐる対立的な位置に立つようとする気運があつた。この問題は今日、無視できないほどのものとなっている。

5. 教会と国家

戦争が終わるまでの旧日本帝国で、私がどこでどのようにして間違つたか。それは根本的な間違いだったと言つたが、何も知らないままに間違いをしたということではない。十分ではないが一通りは教えられたと言わねばならない。私は日本キリスト教会の信者の家庭で生まれ、父は当時の日基の信徒としては教理について熱心であつたと言える。それは戦後改革派教会に入られた杉山豊胤牧師の感化を戦前から受けていたからである。レーマンとしては同類が少ないが、改革派系統の神学書を勧められて読んでいた。そういう気風が私にも受け継がれていた。私自身はかなり意識的なクリスチャンであり、軍隊の中でもキリスト者であることは明言していた。しかし、そういう姿勢も含めて、根本的

に間違っていたと言っているのである。

その間違いは、要約して言うならば、神の御心を重んじることなく、それゆえ福音にも律法にも厳密に従うことなく、それをいい加減に解釈して、「良きキリスト者は良き日本国民である」という原理を立て、それに従って生きていたことである。端的に言えば天皇制に呑み込まれた。私自身がこの過ちを犯しただけでなく、日本のクリスチャンの殆ど全都が同じ過ちに陥っていた。要するに教会と国家のけじめである。

陥ったと言うよりも、そのように教えられた。しかし、そう教えられたことを示す公的な文書があるのか。教会が教会で教えるべき基準を一応ハッキリ教えたほどには、妥協的原理はなかったのではないが、いわば裏口から、正式の経路でない所を通して届けられている。それは風評というようなものでなく、確かな文書があって伝えられたことは戦後かなり長期に亘って調べた人が明らかにしてくれた。

私は戦後、その曖昧な原理を自分の内では徹底的に砕こうと努めた。したがって、古い原理を温存させる人とは衝突を繰り返して来た。その衝突の典型は靖国闘争である。しかし、戦後スグ靖国闘争を始めたわけではない。この闘争の先鞭をつけた人がおられることを知っていたが、それを妨げるのではなく、私は自分の担当する区域は少し別だと思っていた。靖国闘争に本格的に取り組んだのは1960年代後期以来である。

敗戦前に私の過ちに気付かせてくれる要素はなかったかという、あったと思う。あったのだから、勉強すれば見つかる筈だと思って、戦後勉強を始めて、それを見出した。あったからこそ見出せた。

逆に言えば、あったのに見えなかった実態に、気付こうとしなかったのである。見えなかったなら言い訳が立つが、見えていながら見なかった。見えないことにしていた。その誤魔化しに

ついては責任が問われる。私の罪責感はそういうものである。無知であった、あるいは知識が曖昧であったために、見えていたのに見えないと思ってしまった、と弁解出来る部分はあるのだが、全然見えなかったわけではない。

戦後、自らの過ちを悔いて、これを繰り返さないために学び始めたと言ったが、特に力を入れて学んだのは神学である。旧日本の天皇制の悪を知るためには、むしろ社会科学を学ぶべきではなかったか、と言う人があると思う。その意見を全面的に否定するわけではないが、私は私の失敗は社会科学の勉強不足ではなく、「神を知る認識」の不徹底であったと考えている。戦後になって、社会科学の学びが足りなかったから、教会は道を誤ったのだという意見がクリスチャンの間で圧倒的に強くなったが、私は自分の考えを変えなかった。

もともと、キリスト者の中に、神学は人一倍よく学んでいるけれども、神に従うということに関して必ずしも汚れなき良心に従っていない人がいることを私も認めているから、神学さえキチンと学んでおれば良いとは、簡単には言えない。大真面目なクリスチャンで天皇制の誤魔化しを見抜くことの出来ない人は今も少なくない。

結び

結びの段階に移ろう。先にも言ったように、教会に託されている教育は、初めから終わりまでを視野に入れた考察を必要としている。それは主が教会に委託したもうた務めである。このことの認識がなければならぬ。

この務めは個々の人間の最終段階まで貫徹されなければならない。したがって、最終目標がよく見えていなければならない。

※ 2009年11月23日(月)に開催された中部中教会学校教師研修会の講演原稿を掲載しました。快くお認めくださった渡辺信夫先生に心からの感謝を申し上げます。

ここからはじめよう

伊藤治郎（中部中会日曜学校委員）

昨年の教会学校教師研修会は、日本キリスト教会東京告白教会牧師・渡辺信夫先生を講師にお招きして行なわれました。この研修会で私が学び、そこから思いを巡らせたことをいくつかお話ししたいと思います。

1. 教会教育は人の一生にわたるもの

最初に教えられたのは、教会教育というのは、人が生まれてから死ぬまでの全体の時期を考慮に入れないと意味が無いということでした。なぜなら、キリストの体である教会を構成する多くの肢体である私たちは、教会で積極的な奉仕のできる時期だけが教会を構成する「肢体」なのではなく、生まれてから死ぬまでが成長する「ひとつの肢体」でありつづけるからです。

一生にわたる教育、ということを考える時、一つには聖霊の導きの中で「キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長する」（エフェソ4:13）ための積み重ねの教育というものがあると思いますが、また同時に、人生のひと時ひと時に「いつ天国に招かれても良いようにする教育」というものも考えるべきではないかと思いました。それは、教理の知識を豊富にするというようなものではなく、一人ひとりのその時その時にふさわしい自分の罪のゆるしと復活への確信です。もちろんそれは、礼拝式における説教と礼典を通して聖霊の働きによって与えられるもので、知識の伝達というような形での教育でなされるものではないかもしれませんが、御言葉を御心に従って読み解くための「道具」である教理を人生のその時その時にふさわしく持っていることが、御言葉の恵みをより豊かなものにし、確信をより喜ばしいものにするので

はないでしょうか。最近、礼拝後に説教でいただいた御言葉の恵みを分かち合う時間を持つようにしておられる教会が増えてきているのではないかと思います。そのような場でも、先達となる信仰者（年齢のことではなく）が自らの確信の喜びを伝えるという「教育」をすることで聴衆の恵みがより豊かなものになるのではないかと思います。

また、一生にわたる教育という時に、大人たちが学び続けようとしなないという問題もあるように思います。教理教育＝信仰告白準備教育、のように思われて、受洗・信仰告白してしばらくしたら教理教育は「卒業」してしまうかのような傾向です。本来「教会学校」の一部であるはずの家長会などでも「教理は難しいから」と敬遠されて交わり中心のものになってしまいがちなように思います。これには、教理は難しいものだと思わせてしまうような教理教育のあり方も問題としてあるのではないかと考えてしまいます。

渡辺先生は、教えっぱなしではなく教えられたことを具体化させていくための修練・エクササイズの必要性についても触れられました。教理も単に知識として持っているだけでは意味が無いので、日曜学校を含む教会学校でも、それを用いて御言葉を読み解いて恵みをいただくという修練をしていければ良いなと思いました。先ほども触れました、礼拝後の御言葉の恵みの分かち合いの時間などが、そのような時間として用いられるのではないのでしょうか。そのような修練の積み重ねが、もっと御言葉の恵みを喜ぶための教育になるのではないのでしょうか。

2. そのような中での子どもたちへの教育

教会教育が人が生まれてから死ぬまでの全体の時期を対象にする中で、子どもの時期における教育をどのように考えるかというのは、結局どのような子ども観を持つのか、ということになると思います。宗教改革以前は子どもを一人前の人間として見ていなかった、と教えられました。その頃は子ども達は教会の交わりから疎外されていたと言えるのでしょうか。しかし、そういう目で見ると、今の私たちも、礼拝中騒がしいからと子どもたちを公同の礼拝の場から排除しようとしているとしたら、同じようなことをしているのです。また、その逆に、子どもはイエス様にそのまま受け入れられるような素晴らしい存在なのだから、子どもたちの中にこそ私たちが学ばなければならない善い物がある、という子ども中心主義とでもいうべきものがあります。これは人間中心主義の子ども観であって、聖書の示すものとは違います。

聖書から教えられる子ども観というのは、結局、子どもというのは知識と経験が不足しているだけで、大人と変わるところは無い、ということなのではないかと思っています。子どもも主イエスによって救われなければならない罪人であり、恵みによって神様に従う道へと招かれなければならない存在である、ということです。ですから、子どもに対する時に必要なのは、知識と経験が不足していることに対する忍耐強い指導と、大人と同じように神様からの憐れみを受けている者に対する尊敬—人格の尊重であると思います。

子どもを半人前だと見る子ども観は根強く、日曜学校運動が教会の組織的な取り組みではなく信徒のボランティアとして始められたところにもその影を見ることができます。現在でも、日曜学校が教会の組織になっているとは言え、小会が積極的に関与せず、一部の会員の奉仕にまかせっぱなしになっているような面もあるのではないのでしょうか。日曜学校教師の方も、「忙

しい牧師先生に日曜学校まで見ていただくのは申し訳ない」と余計な遠慮をしているところもあるのではないのでしょうか。また、日曜学校で教えることも、体系的なカリキュラムを持たず、「イエス様に喜ばれる良い子になりましょう」というような善導的なものに流れがちだったのではないかと思います。「いつ天国に招かれても良いようにする教育」という見方で言えば、大人に対しても子どもに対しても、教えなければならないことに本質的な差は無いはずですが、それは、神様と自分の関係であり、自分が救いの必要な存在であることであり、救いに至る道についてでしょう。それはまさに「教理」です。

しかし、ここで、教理は難しいものだという意識がじゃまになります。そこで「教理は大きくなってから学ぶもの」というような意識も生じるのではないのでしょうか。私は思うのですが、小さい頃に聖書物語や善導的なお話ばかりを聞いてきたのが、青年になっていきなり「不可抗的恩恵」などの教理の「言葉」にぶつかるので難しいと思ってしまうのではないのでしょうか。小さい頃から、「私たちを天国に招いておられる神様の恵みはこちらから『いりません』とは言えないのだよ」というような教理の意味するところを噛み砕いて繰り返し教えていけば、大人になって教理の言葉を学んだ時に「ああ、これは昔聞いたあのことだな」と思えるのではないのでしょうか。また、それが教育の連続性ということでもありましょう。

「教会学校教案誌」は、教理的なカリキュラム編成になっています。現在のところ、カテキズム2年、救済史2年のサイクルになっていますので、小学校に入ってから中学を卒業するまでに少なくとも2回はカテキズムのお話を聞くことになります。教える方も、一度に自分の持っているものを全て教えようとして「これは君たちにはまだ難しいのだけれど」などというような言い方をせず、教理の意味するところを子どもたちの知識と経験の積み重ねに添って噛み砕

いて語ることが求められるのでしょう。

3. 子どもたちへの伝道

以上のお話は、契約の子どもたちへの信仰教育という面に重きを置いてきました。ここからは、未信者の子どもたちへの伝道としての教育という面から、お話させていただきます。

教育する権利は神様から親に与えられており、子どもは親の確信を見て神様に対する敬虔を学ぶのだと教えられました。子どもが親の確信を見て育つのであれば、未信者の家庭の子どもたちは神様以外に確信を持つ親に育てられるのですから、彼らを救いに導くためには非常に大きなエネルギーが必要なのではないのでしょうか。それは、日曜学校という教会の中の一部の力だけでは、とても難しいのではないかと感じます。

渡辺先生は、信仰の継承か子ども伝道か、子どもに対する教育の方向性をはっきりとさせないことに日本の教会の教勢がふるわなない一つの原因があると言われました。契約の子どもへの教育だけでもしっかりとしておけば少なくとも現状は維持できたのに、契約の子どもたちさえもが教会から出て行ってしまったのが現状なのです。しかし、異教社会の中にある日本の教会においては子どもたちへの伝道ということも考えずにはおられません。未信者の子どもたちに対する伝道と教会の信徒教育の中の子どもの教育（未陪餐会員への信仰教育）を別の枠組みで行なうことが理想なのでしょうが、現状では時間やスタッフの問題で困難が多いのではないかと思います。伝道に重きを置いた礼拝と教理教育に重きを置いた分級、という工夫も必要になってくるのかもしれませんが。

私は最近、日曜学校と教会の伝道委員会が協力して伝道していくことが、大変重要なのではないかと思うようになりました。全ての世代を教会の肢体とすることや、子どもに対する親の存在の大きさということを考えると、親と子の

両方を伝道の対象として連携してとらえることによって、伝道の実りがより豊かになるのではないかと考えるのです。「わたしとわたしの家は主につかえます」（ヨシュア24:15）という御言葉にあるように、本来、教会というところは家族で神様にお会いするところなのです。ですから、できることなら、求道者の方々も家族揃って教会に来ていただくことのできる機会を増やすことを考えたいと願うものなのです。

イースターやクリスマスなど、伝道の良い機会となる時期ですが、その時に日曜学校と教会とが別々の計画を立てていることが多いのではないのでしょうか。私も今までそのことを何とも思っていませんでしたが、考えてみるとなんともったいないことでしょう。地方の小さな教会では、働くことのできるスタッフの数も限られています。そのような中で、限られたエネルギーを二つの計画に分散させてしまうのは、決して良い伝道の方法ではないように思います。

4. 伝道的な教育

以上のようなことを考えると、教育と伝道ということは切り離せないことになってきます。特に、改革派教会の伝道は教育的伝道であるということがよく言われますので、伝道的な教育の方法ということについても注意が払われなければならないのだと思います。そして、そのことについても、大人に対するものと子どもに対するものと、具体的な方法は違ってくるでしょうが、その根本的な方向性については違うところは無いのだろうと考えています。

教育的な伝道ということについて、私は「求道者の心の中に『?』（なぜだろう）を生まれさせて、それを聖書的に『!』（そうか!）にすること」と考えています。ですから、教育的伝道であるからと言って、求道者に最初から教理的なことを教えこもうとすることは効果的ではなく、求道者の中にまず「?」を生み出すことを導くような教育がされなければならないの

だと考えます。では、具体的にどうすることが、まず「？」を生み出すことになるのか。それはまず、キリスト者の存在そのものなのではないかとも思います。キリスト者がこの世にある姿というのは、未信者の人々にとって本来「？」のかたまりなのではないでしょうか。「どうして、毎週毎週、休みの日曜日にわざわざ教会に行くのか？」「どうして『天地創造』などという非科学的なことが信じられるのか」等々。もちろん、神様の導きが無ければそのようなキリスト者の姿を見ても心の中に「？」が生まれることはないのですが、先達のキリスト者の姿が、未信者にとっての最初のキリスト教への扉であるということとは言えるのではないかと思います。そして、契約の子どもにとっても、最初に会う先達のキリスト者である親が、当然、最初のキリスト教への扉であるのです。

契約の子どもに対しても、最初に教えるのは親の姿から見る神様に対する敬虔であって、教理的に分からせることは後からでよいのだと、渡辺先生はおっしゃいました。親にならって神様の前で恭しく頭を垂れながら心に浮かぶ「？」を、教えられる教理によって「！」に変えていくのが、子どもにとっても自らの中にしっくりと来る（「腑に落ちる」）信仰教育なのかもしれません。もちろん、その方法論については、伝道と同じく、常に研究され続けなければならないと思います。

5. 筋の通ったキリスト者になること

今回の渡辺先生の講演をお聴きになった方々にとって、おそらく一番印象に残ったのは、「自分を誤魔化すことの無い、他者からも誤魔化されることの無い、まともなキリスト者になるために学び続ける」ということではなかったでしょうか。「まともなキリスト者になる」というのはキリスト者としての筋・論理を持つことだとも言われました。その筋、キリスト者とし

ての論理を持つために必要なものが教理です。キリスト者が天の御国というゴールに到達するまでの道のりというのは人それぞれであります。しかし、迷い迷ってグネグネとした迷路のような道をたどるよりは、御国へ向かって真っ直ぐ伸びる「筋」に沿った道のほうが、はるかに、安易という意味ではなく余計な苦しみを味わわなくても良いという意味で楽はずだと思っております。（また、先にお話ししました、未信者にとっての最初のキリスト教の扉であるキリスト者（あるいは、契約の子どもにとっての親）に筋が通っていないと、教育的な意味での「？」ではなく、その人に対する否定的な「？」（例えば、教会と家庭で言うことが違うようなキリスト者に対する「？」）が生じてしまい、伝道には結びつかないものになりかねません（反面教師、と言うことも有り得るのかも知れませんが……）。

私たち一人ひとりが、筋の通ったキリスト者となること、それが、私たち自身が余計な苦しみを味わうことなく御国を目指す道であり、子どもを含めた隣人に対して伝道的・教育的に御国への扉となり得るといことなのではないかと思いました。繰り返しますが、教理は決して難しいものではありません。子どもにも大人にも、学ぶことによってそれぞれの信仰に応じて恵みが示され、学びを続けることによってさらに深い喜びが与えられるものです。それに、私たちに与えられている改革派の教理というのは、人間的な哲学により頼むことなく、ただ聖書のみを基にしているので、ある意味シンプルであり力強い論理性を持っていると言えます。そのように、確かな論理を与えられていることを感謝し、しっかりとした御国への道筋を学ぶこと、そして、学び続けること、ここからはじめたいと切に願うものです。

（四日市教会長老、日曜学校校長、

中部中会日曜学校委員会・教育委員会委員）

教会（日曜）学校像について

相馬伸郎（本誌編集長）

1. 子どもの「礼拝共同体」としての日曜学校

教会をあらわす聖書の表現の一つに「祈りの家」（イザヤ第56章7節、マタイ第21章13節）があります。神の民の祈りの家である教会はまた、古来、「学びの家」と称されてまいりました。

教会は、神の御言葉によって立ちもし倒れもするので、教会が御言葉（教会の教え＝教理）を教える、つまり学びを施す場所として整えられ、考えられて来たことは当然であったと思います。学びは、必然的に、神の生ける言葉なるイエス・キリストへの礼拝を生み出します。むしろ礼拝においてこそ学びの対象となる生ける神との交わりが与えられ、深められてまいります。つまり、礼拝なしに、教会の学びは成立しないのです。

子どもは、「日曜学校」と称して自らの営みを致しておりますから、うっかりすると「学校」の真似事のような営みへと傾斜してしまうのではないかと思います。日曜学校を学校と称しますが、何よりも、教会自身が学びの家、学校です。そうであれば、日曜学校は、まさに教会独自の「学びの家＝学校」になります。

現住陪餐会員によって組織される言わば大人の教会は、礼拝共同体です。このすべての営みを通して、キリスト者が生み出され、その成長がなされます。また、教会が形成され、成長させられます。日曜学校の営みもまた、「子どもの礼拝共同体」の営みとして捉えること、これが本誌の基本的な日曜学校像です。

日曜学校のことを、外部向けに「子どもの教会」と呼ぶ教会もあるようです。もちろん教会は大人と子どもを含んだ契約の民の集いですから、大人の教会、子どもの教会という言い方は

神学的には疑問が投げかけられてしかるべきです。しかし、日曜学校を、子どもたちの礼拝共同体として捉えようとする意味であるなら、むしろすばらしいことであると思います。

日曜学校の礼拝式を、私どもはどれだけ真剣に礼拝式として理解し、捧げているか、これは常に問われて良いことと思います。「大人が中心の主日礼拝式は本物だけど、日曜学校の礼拝式はその真似事……」このように考える奉仕者は誰もいないと思います。礼拝の真似など不可能です。日曜学校の礼拝式にも、キリストの臨在が確保されています。神の御言葉を語る説教者は洗礼を施されたキリスト者なのですから。

未陪餐会員や地域の子どもたちを対象にした日曜学校とは、現住陪餐会員である日曜学校教師の交わり（教会）の中に子どもたちを迎え入れてなされます。聖餐における交わりの共同体の中に、子どもたちを招き入れ、彼らに届く言葉と式次第（プログラム）を整えて捧げられるのが子どもの礼拝式です。つまり、そこには鮮やかにキリストが臨在しておられるのです。日曜学校の礼拝式に出席して、その後の主日礼拝式（朝拝）に列席する契約の子は二回の礼拝式にあずかっていることになります。

2. 分級中心より、礼拝式中心

子どもの礼拝共同体の形成という視点から日曜学校の働きを位置づけるとき、必然的に、日曜学校の働きの比重は、分級に置くのではなく、礼拝式に置くこととなります。

正直に申しますと、おそらく平均的な日曜学校教師の奉仕の姿は、土曜日の午後になって、切羽詰ったように焦る……。もちろん、それは

良いことでないことは明らかです。そこでこそ、準備の手間を軽減させてくれるような教案誌やワークブックを求める……。本誌が、繰り返し申し述べて参りましたことは、「分級展開例をそのまますることが大切なのではありません。分級では、子どもと共に祈りを捧げることができればそれで良いのです。」準備したものの全部をやれたかどうかということが分級運営の良し悪しの基準にはならないと思います。礼拝式で、きちんと福音が届いていれば、分級は「オマケ」くらいに考えてくだされば良いと考えております。ただし、子どもたちがそのオマケに目がないことは、お互い良く知っていることでもあります。

3. 子ども礼拝式における説教の重要性

—日曜学校の目標予—

日曜学校の目標を、もし一言で言い表すなら、「祈りの生活へと導くこと」となります。「信じることは祈ること」であり、それゆえに日曜学校の目標は、自分の言葉で祈れる子ども、祈る生活を確立できるように導くことにこそあります。しかもそれは、まさに公同の、共同の祈りである子ども礼拝式の充実によってこそ、正しく担われます。個人的な祈りの生活の訓練だけに焦点をあてるようなアプローチを改革教会はとることはできません。主日礼拝式（公同の大きな祈り）に支えられ、あずかってこそ、個人の小さな祈りの生活は生み出され、健やかに立つことができます。

またそうであれば、当然、子ども礼拝式の中心が神の言葉の説教に求められることは、明らかとなると思います。何故なら、祈りとは信仰の業であり、それは御言葉を聴くことから始まるからです。外からの言葉つまり御言葉によって、信仰が与えられ、祈りの言葉は与えられ、生み出され、紡ぎ出されるのです。ですから、日曜学校の働きにおいても、あるいはそこでこそ説教の重要性が強調されることになるでしよ

う。そうなれば、牧師こそが日曜学校の奉仕、礼拝説教を担うことが求められるのではないのでしょうか。

本誌の説教展開例は、要旨、ポイントだけではなく、ほとんど完全原稿を掲載しています。それは、一つのモデルを提示する試みです。もちろん、大切なことは奉仕者自らが、これを参考にしつつ、御自分の言葉で説教の言葉を紡ぎ出していただくことです。そこでわかまえるべきことは、聖霊御自身が、聖書を読む自分の言葉、声を用いて子どもたちに届けてくださることを信じることです。主イエスへの愛と子どもたちへの愛があれば、必ず、子どもの心に主イエスを紹介することができます。届くことができます。

4. 説教の完成としての牧会—分級の目標—

さて、しかしながらまたここでこそ、分級の固有の意義、重大な意義も明らかになります。神の言葉の説教を通して子どもたち全体になされる御業は、また一人の子どもの固有の状況、心の奥底にも届きます。しかし、一人の子どもの魂の状況に、よりの確に触れ、届けるためには、「牧会」が求められます。私どもが、分級の目標を「共に祈る」こととしておりますのは、子どもへの牧会を指し示すあり方を指し示しているのです。この牧会に奉仕するのが分級なのです。この分級イメージは、「牧会」のイメージ、子どもと向き合う姿勢です。子どもの心、気持ちを聞き出すこと、聴き取ることが求められます。そこでこそ、教室において生徒全体に均一の知識を提供する「学校」のイメージは薄くなるはずで

説教（神の言葉の共同的伝達）と牧会（個人的伝達）が有効になされる時、日曜学校は正しく豊かな実りを結ぶことを確信致します。

5. 教会形成の一環としての日曜学校

—教師会と教師—

およそ教会的な奉仕の在り方は、いずれも共同的な奉仕の業です。とりわけ、日曜学校の働きは、共同の働きによってこそ正しく担われ、正しい実りが結ばれるのです。つまり、担任教師の力量に基く、それぞれの分級の力に期待するよりむしろ、教師会（全員）の奉仕と祈りを束にして子ども礼拝式の充実を求め、そのために努力するあり方こそ求められていると考えます。

例えば、礼拝説教を担うのは、担当日の奉仕者一人です。しかし、その時こそ、その背後の教師たちの祈りがどれだけ集められるかが問われます。教師たちの祈りに支えられてこそ説教や、その礼拝式は必ず聖霊の豊かな働きのなかで捧げられることを確信いたします。

教師会が、単に教師たちの実務的会議で終わるのではなく、日曜学校の働きを担う核としての「共同体」として形成されることが大切なのです。具体的には、充実した教案研究がなされ、全体の課題と一人ひとりの課題とを共有できる教師会を持つことです。本誌は、その一助となるために発刊されたものです。

さらに申しますと、教会全体の祈りに支えられなければ、日曜学校の業が、教会形成そのものとしての結実を求めることは難しくなくなります。日曜学校の働きとは、各個教会の形成と伝道の働きそのものと直に繋がっているものであり、そうでない働きは、少なくとも改革教会の教会形成の筋道とは異なる日曜学校となってしまいます。だからこそ、礼拝指針の第31条にある通り、小会の監督、配慮が定められているのです。日曜学校の営みとは教会形成そのものの営みなのです。いわゆる賜物のある牧師とか専門家の牧師だけが担うものではありません。

6. 伝道する日曜学校像

日曜学校は契約の子の信仰継承のためにもあります。しかしこれまで、宣教地である日本の教会は、日曜学校を地域の子どもたちを捉える伝道の場として考えてまいりましたし、今なお同じ状況にあると思います。

私どもは、今日の日本の荒廃は、教会の福音伝道の力の低下の責任であると考えております。社会から、教会の責任を問う問いはどこからもあがっておりません。しかし、神からは、問われています。

私どもの目に子どもたちは、どのように映っているでしょうか。彼らは、天地の創造者なる神、罪の赦しの福音に飢え渴いて、倒れています。真の教会で説かれる福音が届きさへすれば、子どもらこそはっきりと霊的な反応を示してくれるのです。現実の困難さを理由に、日曜学校を通して、地域の子らに伝道しようとする意欲と働きを減退させてはなりません。

私どもは、教案誌を作成し、出版すればそれで良いとはまったく考えておりません。日本キリスト改革派教会をはじめ日本の諸教会から子どもたちの讃美の声、祈りの声が溢れるようになることをこそ目指しています。

「子どもたちを私のところへ来させなさい」と命じられた主イエスの御前に、共に悔い改め、祈りの叫びをあげたいと思います。忍耐と労苦が求められます。けれどもその光景を夢見ながら、主と共に、皆様と共に、戦い続けてまいりたいと祈り願っています。

本誌へのご批判、ご意見をお寄せ下さい。改革派日曜学校像を確立するために神学的、実践的な広い論議を心から期待致しております。

Soli Deo Gloria! (ただ神の栄光の為に！)

(中部中会日曜学校委員会委員長、
名古屋岩の上伝道所宣教教師)

改革派信仰を育てるための 「救済史カリキュラム」

相馬伸郎（本誌編集長）

聖書教育の要としてのカテキズムカリキュラム

旧新約聖書は、たとえて言えばジャングルのように豊かな緑（いのち）の世界です。教会は、この森をさ迷うことなく旅をし、真の命を得るために「カテキズム」という地図を編みます。

9年の歩みを振り返りますと、カテキズムカリキュラムは、創刊の01～02年、04～05年、08～09年の三回、6年間行いました。教理を軸に聖書を語ろうとする方向が強いことは、一目瞭然です。一つには、刊行の背景に、カテキズム教育こそ、契約の子どもたちの信仰継承はもとより地域の子どものための伝道にも有効であるとの確信があったからです。何より、改革・長老教会の教会教育の伝統において生命的に重要な教材とその方法は「カテキズム」による教育にあることは、私たちの常識と言えるでしょう。（大会教育委員会では、12年を目標に「子どもカテキズム」を改訂して刊行する予定を立てています。）

改革派伝統の要としての救済史カリキュラム

旧新約聖書の内容は神の救いの歴史、その主題は神の国です。つまり、神の国のひな型であるイスラエルを場とした救いの歴史（旧約）と新しいイスラエルである教会を場とした救いの歴史（新約）です。教会は、この森に「救済史」という見取り図（枠組み・構造）を指し示します。旧新二つの歴史を貫くメシア、時の中心であり救いの主なるイエスの存在をいよいよ際立たせて救いに導き、神の国への旅路を整えます。さて、おそらく日本キリスト改革派教会に属する諸教会で捧げられている主日礼拝の説教のほ

とんどは、連続「講解説教」ではないでしょうか。実は、ローマ・カトリック教会を筆頭に、多くの教会は、教会の暦に合わせて、旧新約聖書からテキストを自由に選んで語ります。私どもは、聖書に記され、証された神のみ言葉のみが、啓示の唯一の源泉と確信して、「聖書のみ」を旗印にしてなお教会の改革を継続しています。この信仰は、必然的に「聖書全体」にこだわるあり方を求めます。なぜなら、聖書の各巻には、かけがえのないメッセージがあるからです。マタイによる福音書なら、マタイ独自のメッセージが込められています。それを理解するためには、マタイによる福音書全体を学ぶ必要があります。それが分かれば、聖書もまたその全体（文脈・流れ）を学ぶ必要があることも明らかです。そもそも、神のみ業（啓示）は、歴史において示されるものです。

今号より2年間にわたって始まる「救済史カリキュラム」とは、要するにこの聖書全体から学ぶ伝統に根ざすものに他なりません。

改革派信仰を生き生きと

救済史カリキュラムの学びは、たとい「もうダメだ!」と思わせられるようなときにもなお、生きる勇気を与えるものです。主を仰ぎ、神の勝利の中にしっかりと組み入れられている契約の民であることを確信させ、暗黒の罪の力に押さえつけられている歴史と世界を、なお明るく見抜く信仰の展望を開くのです。

「子どもカテキズム」は、ウェストミンスター信仰基準の神学の中核にある、神の永遠の主権のご計画を説く「聖定」の信仰を問11で扱

ます。それはまさに「救済史」（創造と摂理）の前提となるものです。つまり、二つのカリキュラムとも、神の主権を徹底して認めることによって、自分の人生の全ての領域で安心して、のびのびとその栄光を現せる、改革派信仰を豊かに養うことが目指されているのです。

共に祈り、励んでまいりましょう。子どもたちが、社会と歴史そして教会をつくり上げる主体として、希望にあふれて生きる神の民として育つように。

あえて蛇足を

青少年の信仰教育は、主イエスと出会わせることが決定的に大切です。二つのカリキュラムとも、まさに、生けるイエスさまへと導くためのものに他なりません。うっかりすると「教え」に傾斜し、イエスさまを不鮮明にする危険性があります。本末転倒となりませんように！

Soli Deo Gloria!

（中部中会日曜学校委員会委員長、
名古屋岩の上伝道所宣教師）

コラム 「ぼくたちわたしたち」—説教者の立ち位置—

教師として、子どもの礼拝説教の奉仕は、楽しいですが、相当の重荷でもあるでしょう。どのような説教を整えるのか……、そのとき、説教者の「立ち位置」を考えてみることは、とても大切です。

最初に、基本をおさえておきましょう。説教において語るのは、父と子と聖霊において一つにいましたもう神です。神ご自身がそこでお語りになられるのです。神を主語にして、その権威をもって、福音の事実を宣言するのが、説教の本質です。

しかし、実際にそこで語っているのは、言うまでもなく説教者じしんです。説教者は神に代わって、記された神の言葉（＝聖書）を解き明かし、目の前にいる神の民に適用して語るのです。その意味で、説教者とは神の代弁者と表現することができます。同時に、民の代表者でもあります。彼じしんもまた神の民の一員ですから、彼らの真ん中に立って語るのです。したがって「わたしは～」と、「一人称単数」では語らず、「わたしたちは～」「わたしたどもは～」一人称複数で語るのです。

わたしは、子どもたちの礼拝説教において、

しばしば、「ぼくたちわたしたち」と語ります。それは、子どもたちを契約の民、共に生きる信仰の仲間（幼き兄妹）として見るからです。彼らと共に、そこに信仰の共同体、礼拝共同体を建て上げること目指しているからです。

ちなみに、学校の先生であれば、子どもたちに自分の豊富な知識を上から語ることがその基本姿勢となるのだらうと思います。しかし、わたしたちの基本姿勢はそうであってはならないはず。もし、わたしたちが日曜「学校」のイメージに流されるなら、説教が、ひいては礼拝式そのものが、聖書からそれる危険性があります。もちろん、わたしたちも教師ですから、信仰を教え、諭す責任があり、その点では、いかなる先生よりも、権威を帯びた存在と言ってもよいでしょう。

「ぼくたちわたしたち」という「特異」な表現は、日本語になりえていないでしょう……。しかし、説教が、子どもの教会、契約の子の「礼拝共同体」に奉仕するものでありたいとの願いが込められているのです……。

（相馬伸郎）

副読本のご案内

『主は羊飼―中高生のための教理入門―』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

① 人生の目的―神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に連れ始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときたまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました。一わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのとでは、やはり生きかたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを禿にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあがめます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満9年となり、第37号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ60教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額 30万円／年

送金先 郵便振替 伊藤治郎

00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

〈背景と文脈〉

主イエスの復活は十字架の死とともに、聖書の最も中心的な使信である。復活は、主イエスの贖いのみわざが父なる神に完全なものとして受け入れられ、完成したことを示す。パウロが「キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、罪のなかにあることとなります」(コリント一15:17)と言っているゆえんである。

マタイ福音書は他の福音書と同様に、主イエスがいつ、またどのように復活されたかについては記していない。墓が空であったこと、よみがえられた主が数人の女たちに顕現されたことを通して復活の事実を証している。

マタイは特に、祭司長たちとファリサイ派の人々がピラトに願いで番兵たちに墓を守らせたこと(27:62～66)を記している。彼らは、主イエスの死体が弟子たちによって盗みだされないように、とできる限りの対策をとった。

〈天使の顕現と使信〉(28:1～7)

「週の初めの日の明け方」に「マグダラのマリアともう一人のマリアが墓を見に行った」(1)。ちなみに並行記事(マルコ16:1, ルカ24:1)を見ると、彼女たちの目的は主の御体に香料を塗るためであったことがわかる。もう一人のマリアはヤコブとヨセフの母マリアであり(27:56)、ヨハナ(ルカ24:10)、そのほか名を記されていない他の婦人たち(ルカ24:10)も一緒だったことがわかる。福音書の記事の間に矛盾があるのではなく、誰に焦点をあてているかによって異なっている。ちなみに、ヨハネ福音書はマグダラのマリアの名だけを記している。

2節の「すると」と訳されている語は「見よ!」という意味であり、読者の注意を喚起している。大きな地震が起こり、天使が天から降って来て、墓の入り口にあった大きな石(27:60, 66)を転がした。これは、婦人たちが墓の中に入り、空に

なっているのを確認するためであった。「座った」(2)は直訳すれば「座っていた」(原語では未完了過去が使われている)という意であり、これは婦人たちが墓に到着する前に起こった出来事と考えるのが自然である。

天使の顕現に接し、番兵たちは恐怖のあまり全身が麻痺し動けなくなった。彼らはピラトの命によって、主の遺体が弟子たちによって盗みだされないために番をしていた(27:65)。人間的な安全対策(封印された大きな石、番兵たち)は、神の御力の前には何の意味もなかった。

天使は婦人たちに、主イエスの復活とガリラヤで主に会えることを弟子たちに伝えるよう命じた。墓に行った彼女たちの目的は主の御体に香料を塗るためであったことから、主の復活をまったく予測していなかったことがわかる。婦人たちにとって復活のニュースはまさに喜びの訪れ(福音)であった。彼女たちは、恐れながらも大いに喜び、その使信を弟子たちに少しでも早く告げようと走って行った。

〈復活の主の顕現〉(28:8～10)

9節の「すると」も「見よ!」という意味である。まだ墓から遠くない所で、主イエスは婦人たちにご自身を現わされた。「おはよう」(9)は直訳すれば「喜びなさい」という挨拶の言葉である。婦人たちは主の前にひれ伏し礼拝した。主は、弟子たちへの伝言を婦人たちに託された(10)。主はその伝言のなかで「わたしの兄弟たち」と弟子たちを指して言われている。主が十字架にかかれたとき、ヨハネ以外の弟子は逃げた。しかしそうした彼らを赦され、弟子たちを「わたしの兄弟たち」と呼ばれたのである。マタイは、主が約束通りガリラヤで弟子たちにご自身を現わされ、そのような弱い弟子たちに、出て行ってすべての民をわたしの弟子にしなさい、という大宣教命令を与えられたことを記している(28:16～20)。

(後藤公子)

テキスト マタイによる福音書 28章1～10節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問24

〔単元のねらい〕

よみがえった主イエスの第一声は「カイレテ（おはよう、ごきげんよう）」という、日常的な挨拶の言葉だった。それはかつて「喜びなさい（カイレテ）」と仰せになった、懐かしい説教を想起させる言葉でもあった。これを聞いて主のご復活を信じたマグダラのマリア。重病を癒されて献身的な奉仕者へ、十字架の死と埋葬の目撃者から復活の証言者へと導かれた彼女を物語ることによって、キリストが罪と死に勝利された意味を、身近な喜びとして伝えたい。

「おはよう」

「おはよう」……その声に目を覚ます。鳥たちのさえずりが耳に届く。両手と両足をぐーっと伸ばして、布団の上に起き上がり、起こしてくれた人に、「お・は・よ・う」。こんな平和な朝がどんなに幸せなことか、思いもしないで立ち上がる。そそくさと身支度し、御飯もそこそこに出かけてゆく。気がつけばお祈りしていない。そんな毎日を送っていないでしょうか。

もしもある朝、起こしてくれるはずの人がいないとしたら。もしもある朝、目を開けても光を感じない、耳を澄ましても音を感じないとしたら。もしもある朝、手足がこわばって動かない、舌がからまって口も利けないとしたら。起き上がることも立ち上がることも、身支度することも御飯を食べることもできないとしたら。今朝は、そんな体験をした人のお話です。

イエスさまがイスラエルの町や村を巡って旅をしておられた頃のこと。ガリラヤの湖の西のほとりに、マグダラという大きな町がありました。湖の魚をとる漁師たち、水揚げされた魚をせりにかける仲買人たち、仕入れた魚を塩漬けにする職人たち、買いつけて売りさばく商人たち。町は活気に満ちていました。この町にマリアという女の人がいたのです。自分もいつか商人になって、大きな商いをしてみたい。それとも職人になって、大きな工場をきりもりしたい。いつか結婚して、家族と一緒に暮らしたい。そんな夢を描く女性だっ

たでしょう。ところが、その夢を打ち砕く出来事が、彼女の身に起こりました。見えていた目が見えない、聞こえていた耳も聞こえない。器用だった手が動かない、軽やかだった足も動かない。舌がもつれて声も出ない、水も喉を通らない。医者に診てもらっても治らない。すると心ない人たちは呟きます。「マリアは七つの悪霊にとりつかれている」と。しかし、優しい人たちは、言葉と癒しに力のあるイエスさまの所へマリアを連れて行くのです。

折りしも、大勢の人々が集まっていました。そこでマリアは、イエスさまに手を置いてもらったのです。するとどうでしょう。七つの悪霊が彼女から出て行ったのです。目に光が射し、イエスさまの顔が見えて来たのです。耳に音が届き、イエスさまの声が聞こえて来たのです。「貧しい人は幸い、天の国はその人のものだ。悲しむ人は幸い、その人は慰められる。飢え渴く人は幸い、その人は満たされる。迫害される人は幸い、天の国はその人のもの。カイレテ！喜びなさい！大いに喜びなさい！天には大きな報いがある」。するとどうでしょう。手足のこわばりが去って、彼女は起き上がり、立ち上がったのです。舌のもつれが解けて、語り始め、食べ始めたのです。暗闇と沈黙の中で祈っていたマリアを、イエスさまは知っておられ、地上に訪れた天の国へ招き入れてくださったのです。

その日から、マグダラのマリアは、元通りの女

の人になったというよりも、全く新しい人に生まれ変わりました。死んでも同然だった私を生きることができるようにしてくださった御方、イエスさまを、私の人生の主としよう。これからは、イエスさまのために生きてゆこう。そう心に決めたのです。十二人のお弟子と共に、イエスさまに従い、町や村を巡る旅人になりました。元々、工場をきりもりしたい、大きな商いをしたい、そんな夢を描くような才覚のある女性でしたから、イエスさまとお弟子の毎日の必要を賄うため、大いに知恵を働かせ、献身的にお仕えたのです。

彼女の毎日は、喜びに満ち溢れていました。一つの心配事を除いて。イエスさまの言葉と癒しは、神さまの御言葉と御業そのものでした。それが余りにも素晴らしいので、イスラエルの偉い人たちがイエスさまを殺そうと狙っている。それを知ったのです。しかもイエスさまのお言葉、「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老・祭司長・律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活する」、そう聞いたからです。

彼女の心配は、現実になってしまいました。逾越祭の金曜日、薄暗い明け方、イエスさまは逮捕されてしまいます。総督ピラトの裁判で、罪のない御方が、罪深い人々の手に引き渡されてしまったのです。散々痛めつけられ、十字架を担がされて、ゴルゴタの丘で釘付けにされたのが朝の九時。まるで夜のような闇に包まれたのが昼の十二時。そして息を引き取られたのが午後の三時でした。安息日の始まる日没まえ、遺体は布を巻かれただけで岩穴の墓に葬られ、すぐに大きな石の蓋が開められたのです。

長い長い一日、なすすべもないマグダラのマリアは、ただイエスさまを遠くから見守るしかありませんでした。人生の主と心に決めてお仕えてきた方が、目の前で殺され、葬られた。そのあまりにも惨い現実を、どうしてすぐに受け留めることができただしょう。金曜の夜から土曜の夜まで、重苦しい安息日を過ごす中で、彼女は悶々と考え

ます。最後に何かして差し上げることはないものか。せめて、ご遺体の傷口を洗って、香油を塗ることはできないものか。日曜の朝が明けるや否や、彼女は香油を持って墓へ走ります。するとどうでしょう。墓穴を塞いでいた大きな石が取り除けてあるではありませんか。恐る恐る中を覗いてみると、なんと！ イエスさまのご遺体がない！ 誰かが運び去ったに違いない！ 自分にできる最後の奉仕さえ叶わない！ 彼女は途方に暮れ、泣き崩れました。

するとそこに、白い衣を着た誰かが現れて、声をかけます。「恐れるな。あなたの捜している御方は、この墓にはおられない。復活なさったのだ。さあ、急いで、弟子たちに伝えるのだ」。彼女は思い出します。「人の子は殺され、三日目に復活する」。そう仰せになったイエスさまの御言葉が、彼女の心に響き渡ります。するとどうでしょう。悲しみの涙が、喜びの涙に変わったのです。彼女は立ち上がり、走り出しました。その行く手に今度は、見覚えのある方がまるで迎えてくださるように立っておられる。そして、こちらに声をかけてくださるではありませんか。「カイレテ！ おはよう！ 喜びなさい！」。その声はまさしく、あの方の声でした。ガリラヤの町や村を旅した毎日、エルサレムへと向かった毎朝、いつも聞いていたイエスさまの声でした。復活なさった主の足を抱きしめ、御前にひれ伏したマリアに、イエスさまは仰せになります。「恐れることはない。兄弟たちに、ガリラヤへ行くように伝えなさい。そこで会おう」。

マグダラのマリアは再び、喜びに満たされました。主は生きておられる！ 主の御用のためにお仕えすることができる！ この喜びを彼女から奪い去ることは、誰にもできません。死さえ、この喜びを消し去ることはできないのです。主イエスは、死を突き抜けて生きておられるからです。そして、この方にお仕えするマリアは、その命をいただいたのです。 (二宮 創)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 5章12節

喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。
あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。

〈ねらい〉

復活のイエスさまと出会った驚きと喜びを、子どもたち自身のこととして伝えたい。

〈さんび〉

いのちのこば社『プレイズワールド』、15「歩こうイエスの道を」

〈おはなし展開例〉

きょうは、イースターです。イースターは何の日かな？ イースターは、世界中の人がビックリすることが起こったことを記念する日です。

みんなは、どんなことでビックリするかな？ 先生は子どもの時、朝おきたら、家の門の上に大きなへびがいたので、とってもビックリしました。それから、みんなはマジックって見たことあるかな？ 箱の中に人が入って、その箱をクルクル回したら、中に入っていた人が消えてしまうマジック見たことある？ いなくなるとしたら、次にはまた箱の中から出てくるんだよね。あれは不思議だよ。

イエス様も、お弟子さんたちの前からいなくなっていました。十字架にかけられて、死んでしまったんです。大好きだったイエス様が亡くなってしまって悲しんでいた女の人たちに、びっくりすることが起きました。死んでしまったはずの、イエスさまが、なんと、目の前にいるんです。

うれしくて、うれしくて、女の人たちは、イエス様の足に抱きつきました。そして、イエス様の前でひざまずきました。死んだ人が生き返るなんて、うそじゃないの？ って思うよね。でも、イエス様は本当に死んで、本当に生き返ったんです。神さまのマジックです。

どうして神さまは、こんな驚くことをなさったんだろう？ それは、神さまがわたしたちのことを大切に思って、神さまとずっといっしょにいられるように考えてくださったからです。そのために、イエス様は、わたしたちの代わりに、十字架で死んでくださいました。そして恐ろしい死の力に勝ってくださったんです。イエスさまは強いお方だね。このイエス様が、わたしたちといっしょに歩いていてくださいます。だから、わたしたちがどんなに悲しいことがあっても、嫌なことがあっても、大丈夫なんです。

〈お祈り〉

天の父なるかみさま。イエス様がわたしたちのために、死んで、ふっかつしてくださいましたこと、ありがとうございます。力強いイエス様がいつもわたしたちといっしょにいてくださることを感謝します。今、悲しんでいる人がいたら、イエスさまの力で助けてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

マリアさんたちが、イエス様の復活に驚き、喜んだように、わたしたちもイエス様の復活を共に喜びましょう。そしてその喜びを伝える者になりましょう。

〈はじめに〉

新しい子どもが出席して、新しい空気のクラスになったことでしょうか。緊張している子どもはいないでしょうか。まず、先生からの自己紹介から始めて、一人ひとりの子どもを暖かく、主にあって、迎えることができる喜びを伝えましょう。そして、子ども一人ひとりの自己紹介をしませんか。その後、このクラスの1年間の歩み、みんなで神様の子どものとして、共に祈りあい、励ましあうことができるよう、祈りましょう。

〈御言葉を聴きましょう〉

- ①誰がイエス様のお墓に行きましたか？
- ②お墓の大きな石は転がっていて、その石の上に天使が座っていました。天使は女の人たちに何と言いましたか？
- ③それを聞いた女のひとたちはどう思いましたか？
- ④お弟子さんたちに伝えるために走っていた女の人たちは誰に会いましたか？

〈展開例〉

十字架にかけられ、死んだイエス様は、お墓に入れられました。そのイエス様の体に油を塗るために、マリアさんたちは、お墓にでかけました。この時のマリアさんたちの心はどんなだったで

しょう。きっと、悲しい、寂しい思いをしながら歩いていったことでしょうか。

お墓に着いたら、お墓の大きな石はごろごろと横に転がしてあり、その大きな石の上には天使が座っていたのです。びっくりですね。そして、ここにはイエス様はおられない。復活されたこと、そしてこのことを仲間の人たちに伝えるようにと言われました。お墓に入ってみると、本当にイエス様のお体はありませんでした。マリアさんたちの驚きはどんなだったでしょうか？ 急いで、仲間のいるところへと走って行きました。その途中、何と本当に生き返ったイエス様にお会いしたので

す。復活のイエス様に会った女の人たちの気持ちを考えてみましょう。自分だったら、どんな気持ちでしょうか。信じられないことが起きたら、わたしたちはどんな気持ちになるでしょうか。ドキドキするでしょうか。ブルブル震えてくるかもしれません。イエス様は「恐れることはない。仲間に復活のイエス様に会ったことを伝えなさい」と言われました。死んでしまった、もうイエス様には会えない、お話が出来ない、と悲しみにあったお弟子さんたちに、復活され、またお話出来る喜びをくださいました。

「恐れることはない」。この言葉はわたしたちを力づけます。励まされます。このイエス様が今もわたしたちと共におられます。わたしたちにも「恐れることはない」と言ってくださいます。そして、大きな喜びをくださいます。

〈祈りましょう〉

神様、イエス様の復活をみんなで喜ぶことができてありがとうございます。復活されたイエス様をわたしたちも伝えることができますように。



〈ねらい①〉

死のリアリティにとぼしい現代の子どもたちに、復活という出来事の驚きを伝える。

〈展開例①〉

みんなはイエス様が復活なさったと聞いて、すぐに信じられるかな。ある子どもたちは、すぐに「信じるよ」って言いました。なぜなら、ゲームでは死んでも復活してやりなおすことができるから。イエス様のお話もそれと同じだと思ったんだろうね。

でも、これはゲームとは違います。イエス様は実在の人物で、本当に十字架の上で血を流し、死んで葬られました。それは本当に悲しくて、絶望的なことでした。死んだ人の体というのは、もう冷たく固まって、動かないのです。そのイエス様が、神様の力によって甦らされたというのです。しかも、この世の誰も見たことがない栄光のお体に……。それは弟子たちも、婦人たちも、だれも信じることができなかつた、予想さえしていなかつた、驚くべき出来事でした。

〈ねらい②〉

子どもたちが復活の希望を、わが希望とし、生きる勇気を得ることができるように。

(そのために一番最適なテキストは、ハイデルベルク問45だと思います。「キリストの復活によって私たちは、①キリストの義に与ることができる、②罪から解き放たれた新しい命に生きることができる、③やがて同じように復活できる」という希望が教えられています。)

〈展開例②〉

復活を信じるというのは、ただその出来事があったと信じるということではありません。その

出来事の意味を理解して、イエス様が何のために復活してくださったのかを知ることが大切です。そしてイエス様が私たちに与えようとしてくださっている希望を受け取って、この復活の希望に生きること。それが、復活を「信じる」ということです。そうでなければ、イエス様の復活というのは、ただ恐ろしくて摩訶不思議な出来事にすぎません。

復活の希望とはどういうことでしょうか。例えばある牧師さんは、子どものころ、死んだらどうなるのだろうと考えると怖くて怖くてたまらなかつたそうです。どうせ死んだら無駄になると思うと、勉強も何もやる気が起きない。変にはしゃいでバカなことばかりして、怖さをごまかしていたそうです。でもある時、イエス様の復活の福音を聞いて、すべてが変わりました。イエス様が私たちに代わって死んでくださり、私たちのために甦ってくださったから、もう罪の裁きを受けて永遠の地獄の刑罰に苦しむことはない。神様の平安の中で、永遠の命が与えられ、そしてイエス様と同じように栄光の体に甦ることができる。死は、その希望の入り口であって、決してもう恐れることはない。それを知ること、生きる勇気がみなぎって、その日から猛烈に勉強を始めたんだって。イエス様の復活を「信じる」ことは、大きな力を生むのです。

〈祈り〉

神様、私たちの罪を赦し、永遠の命を与えるために、イエス様は死んで甦ってくださいました。そんな救い主を与えてくださって、本当にありがとうございます。イエス様を信じる私たちが、死の力を恐れず、命の希望をもって、強く雄々しく歩んでいくことができますように。



〈ねらい〉

二人の婦人の喜びを共有する。

〈展開例〉

はじめに、テキストを要約して伝える。イエス様のお墓へ行った二人の婦人が、そこで天使と出会ってお告げを聞き、復活のイエス様と再開するお話。その後で、テキストを通して読んでみる。

次に、場面ごとに聖書と自分を照らしてみる。

- ①二人のマリア、イエス様のお墓に行く（1節）。
イエス様を救い主と信じてきた二人。そのイエス様が死んでしまったという状況を想像する。
Q. みんなはどうか？「イエス様がいなくなってしまったんじゃないか？」とか「聖書はイエス様を救い主と言うけれど、本当かどうかわからなくなってしまった」。そんな風に思ったことはないか？二人のマリアのように、イエス様を昔に死んでしまった人のように感じたことはないか？（自分の経験があれば、それを話す）
- ②二人は、それでも自分が救い主と信じた方を探していた（5節）。しかし、イエス様との間には、大きな墓石が壁となっている。
Q. みんなは、どうか？イエス様と自分の間に障害と感ずる壁がないか？（自分の経験があれば、それを話す）
- ③二人のマリア、墓を開く主の使いと出会う（2～4節）。マリアとイエス様の間には番兵、巨大な墓石、死があったが、神様はそれらをことごとく取り除かれた。神様はみんなとイエス様の間にある障害をことごとく取り除いてくださる。それがなんであろうとも。
- ④二人のマリア、天使のお告げを聞く（5～7節）。神様は「イエス様は生きている」という約束の

言葉をくださる。二人のマリアは喜んだ（8節）。つまり、この言葉を信じた。神様は、イエス様を求める人が約束を信じられるようにして下さる。みんなにもイエス様との出会いが約束されている。イエス様に出会った二人のマリアは「救い主はしっかりと生きていて、みんなと会いたがっている」と、弟子たちに伝えるために喜び走る。

- ⑤よみがえったイエス様と出会う人たち（9～10節）。「イエス様は遠く離れてしまった」と悲しむ人に、イエス様は「おはよう」と優しく現われてくださる。また、イエス様は、自分からイエス様を裏切って逃げだした弟子たちにも、「わたしの兄弟たち」と親しく現われてくださる。

※注意

自分の経験を話すことの意義は、生徒の抱えている問題を代弁する点にある。自分の経験があまりにも生徒の実生活とかけ離れている場合は、「先生はああだけど、私は違う」という風に距離を産むことがあるので、話さないほうがよいときもある。聞き手が「先生も私と同じだったんだ」と感ずることが大切である。

〈祈り〉

十字架の死からよみがえって、今も生きておられるイエス様。あなたは御言葉の約束を信じさせてくださり、そして、信じる人と出会ってくださいますからありがとうございます。もし、わたしたちがあなたを見失うときには、あなたの約束を思い出させてください。そして、あなたのいることをわからせてください。もし、わたしたちが復活されたあなたと向かい合うことのできる時には、人に伝えたいほどの喜びで満たしてください。アーメン。

1. はじめに

キリスト教信仰は、イエス・キリストへの信仰を通しての救いを私たちに約束しています。人間は自分の力で救われるのではなく、私たちの罪のために十字架にかかり復活なさった御子イエス・キリストの故に救われるのです。それが福音の約束です。

実は、そのような福音の約束の前提となることがあります。それが創世記1章1節の御言葉が教えていること、すなわち「初めに、神は天地を創造された」という出来事です。「創造する」(バーラー)という言葉は、真の神による創造行為を表す特別な言葉です。また、「天地」はこの世界全体、宇宙全体を表しています。つまり、聖書が教える真の神は救済者であると同時に、天地万物の創造者であるということです。

2. 創造主である神の存在

神が天地万物の創造主であるということは、創造主である神だけが永遠から存在しておられる唯一の方であり、この世界、宇宙のすべての物は神の被造物であるということです(詩編8:4、104:24、エレミヤ10:12)。神はすべての物をご自分の言葉によって、無から創造なさったのです(詩編33:6、ヘブライ11:3)。このような考えを「キリスト教有神論」と言います。単に神がいると信じるのが「有神論」ではありません。

例えば、日本の神道では人間も死んだら神とされ、神社に祭られることがあります。また、「山の神」、「海の神」という信仰に表されているように、自然も神格化され、宗教的信仰の対象とされます。このような宗教観のことを「汎神論」と言います。そこではこの世界と神が混同され、神と世界の区別が曖昧になります。

もう一方で、天地万物を創造なさった神を否定し、この世界や万物は神と無関係に自然に存在しているという宗教観があります。それを「無神論」と言います。しかし、神の天地創造を否定すると、この世界は全く偶然に存在するようになったとい

うことになり、この世界の存在意味そのものが失われてしまいます。また、結果的に、神無きこの世界そのものが神のようになってしまいます。

聖書は「汎神論」も「無神論」も両方とも正しくないと教えています。この世界は被造物であり決して神ではありませんが、同時に神の創造と無関係に自分の力で存在しているのでもありません。神の無からの創造こそが、天地万物の存在の根拠です。したがって、神が天地万物を無から創造してくださったというキリスト教有神論こそ、私たちキリスト者の宗教的前提となる世界観です。

3. 神が創造主であることの意義

神が天地万物を無から創造なさった創造主であるということは、私たちの信仰に二つの点で大きな意義を与えます。

第一は、神の救いの目的は単に私たちの心を罪から救うことだけではなく、この世界全体の回復であるという点です。神が天地万物の創造主である以上、救いは造られた物すべてに及びます。そうである以上、私たちの救いは単に自分の救いということに留まりません。つまり、人間の救いはこの世界全体の救いと深く結びついているということです。パウロがローマ8章19～22節で語っているように、すべての被造物もまた、神の子たちの現れるのを待ち望んでいるのです。私たちは創造主なる神を信じる時、自分の救いの意味と目的を正しく知ることができるのです(創世記1:28)。

第二には、神が天地万物の創造者であるからこそ、私たちはどんな時にも救いを確信できるという点です。神が創造主であるということは、この世界の中には神の物でない領域はどこにもないということです。だからこそ神はご自分の創造なさった人間とこの世界を完全に救うことができます。私たちは創造主なる神を信じる時、自分と世界の完全な救いを確信することができるのです。

神は創造主であるからこそ、造られた物がすべて神をたたえ、賛美することを望んでおられるのです(詩編96:1、103:22、145:10)。(弓矢健児)

テキスト 創世記1章1～5節
カテキズム 子どもカテキズム 問11, 12

〔単元のねらい〕

いよいよ、救済史カリキュラムが始まります。今号、所収の「救済史カリキュラムのために」をぜひ、熟読してください。今朝は、聖書の1ページ、その第一声を共に聴き、学びます。創世記の著者は、自分たちが信じ崇め従っている神とは、天地を創造された力ある神、すべての「はじめ」、あらゆる存在の原因、いのちの根源でいらっしゃるのだと高らかに宣言します。本年は、創世記を軸に、カリキュラムを整えました。それは、ウェストミンスター信仰告白の「聖定」の教理と深く共鳴しています。永遠の愛の計画をもって、私たちに命を与え、お救いくださる神を信じ、誇りとし喜びとして生きる人の幸いを語り、讃美と礼拝をささげましょう。

「神さまがいなければ、世界はない」

今朝から、子どもの教会は新しくなります。これまででは説教や分級で、「子どもカテキズム」を一つひとつ取り上げて学んできました。ですから、聖書を開くのは、順序がバラバラでした。でも、今朝からは、順番に聖書を開いて行くこととなります。旧約聖書から始まって新約聖書へと読み進めて行きます。聖書を通して語られる神さまの声を、楽しみに聴いていきましょう。

聖書は66巻で一つの本になっています。この66冊は、順序だてて並べてありますね。聖書は、確かに、どこから読んでもかまいません。マタイによる福音書からでもいいわけです。でも、やっぱりいつか並んである順序に従って読むと、一番、神さまが僕たち私たちに伝えようとしていることが、すっきりとわかるようになりますと先生は思います。旧約聖書をざっと読んで、いよいよ新約聖書のマタイによる福音書を開くと、感動しますよ。それは、神さまがご自分のことを紹介してくださる方法は、いきなり神さまの全部をどーんと教えてくださるのではなくて、私たちに合わせて、一步一步、繰り返して繰り返して、丁寧に、よくわかるようにしてくださるのです。

今朝から二年間、そのようにコツコツと皆と一っしょに聖書を学んで、イエスさまを礼拝し、神さまのことを知って行きたいと思います。先生

も、とても楽しみです。

さて、今、聖書の最初のページを開いて、神さまのみことばを聴きました。今日の暗唱聖句ですから、もう一度、読みましょう。「初めに、神は天地を創造された。」

いきなりすごい言葉です。天地とは、天と地、つまり世界ということです。宇宙と言ってもよいです。僕たち私たち、すべての生き物が生きている場所は、神さまによって造られたのです。場所のことを空間と言ったりします。宇宙空間という言葉もあります。どこまでも果てしなく広がる宇宙、ある学者の先生は、今も広がり続けているとか言います。その宇宙は神さまの作品。そして、それは、いつ始まったのか、誰も分かりません。でも、その始まりは、神さま、始められたのは神さまです。つまり、時間も神さまが造られたわけですね。空間も時間も、僕たち私たちのように生きとし生けるもの、生きている物がここに生きていられるために、絶対に必要なありとあらゆるものは、神さまによって造られたのです。すべての始まり、それは、神さまというわけです。それは、つまり、すべて在るもの、命が有るものをざっとずっとさかのぼって行くことができるとすれば、神さまにたどりつくということでしょう。

先生がここにいる。皆さんがここにいる。それは、神さまがいらっしゃるからです。神さまが、深い愛のご計画をもって、僕たち私たちを生まれさせ、ここに置かれている……。もしも、神さまがいらっしゃるなければ、僕たち私たちも、天と地球も、いっさいがっさい何にもないということです。神さまがすべてのすべて、中心の中心……。なのです。皆さんにお話ししながら、先生は、感動します。

たとえば、地球や宇宙のお話をちょっとしてみます。神さまのおかげで、太陽は地球にとってちょうどよい位置に置かれているわけです。そして、太陽のまわりを、ちょうどよいように傾きながら、地球はぐるぐる回っているわけですね。そして、地球の上で生きているすべての生き物のために、一日一回転。ほんのちょっとでも、太陽に近づきすぎても、離れすぎても、傾きが傾きすぎても、生き物は生きられないのだそうですよ。もう、地球がいま、こうしてあることを知れば知るほど、それはもう奇跡！ としかおもえなくなるそうです。先生は、天体の専門家ではありませんが、ちょっとだけ教えてもらっても、なるほど奇跡だと思います。そして、ああ、やっぱり！ と思うのです。つまり、聖書に書いてある通りだなと思うのです。神さまが、お造りくださったのだから、完璧、狂いもなく、間違いもなく、スゴイことになっているのです。

ようするに、神さまは、一番偉いお方っていうことです。だったら、この宇宙や地球に住んでいる僕たち私たちが、この神さまのことを無視したら、そんなに愚かで、悪いことはないと思いませんか。

明治時代のとても優れた教育者に新島襄という人がいました。同志社大学をつくった人として有名です。この先生は、まだ鎖国をしていたときに、

アメリカで勉強したいと思って船に乗りました。その船の上で、「初めに、神は天地を創造された」という聖書の言葉を読んで、神さまを信じる決心をしたそうです。新島先生は、船に揺られながら、きっと怖かったと思うのです。江戸時代のことで、アメリカに行くことは法律を破ることで、死刑になるかもしれません。なによりも、まだキリスト教を信じる人は殺されてしまうような法律があった時代です。もう、日本に戻れないかもしれないのです。でも、聖書を読んで、この天地を造られた神さまがいらっしゃると思った時、信じられたとき、ものすごい勇気がわいたのだと思います。神さまが共にいてくだされば、こわいものはない。心配しないで、一生懸命、勉強しよう。神さまがなんとかしてくださるさ。こんな思いで、アメリカに渡ったのだと思います。

この新島先生がアメリカの大学で学んだのは、科学でした。先ほど、太陽と地球のお話をしました。天地を造られた神さまがいらっしゃるから、地球は完璧にすばらしい環境にあるわけです。きっと、新島先生は、神さまを信じたからこそ、もう迷信なんて信じない、占いなんてやらないし、たよらない。科学の勉強が楽しくなったのではないかと思うのです。神さまを信じたからこそ、そんな考え方ができるようになったのだと思うのです。

皆さんは今、この御言葉に感動していますか。先生は、この神さまがいらっしゃる事がどんなにすばらしいかと思います。安心して生きていけるからです。つらいことにも悲しいことにも負けないで生きていけるのは、この神さまが共にいらっしゃるからです。そして、この神さまだから、イエスさまをお墓の中から復活させることもできるわけです。 (相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] 創世記 1章1節

初めに、神は天地を創造された。

〈ねらい〉

神さまは、この世界のすべてを、無から、ご自分の言葉によって創造されたことを知り、神さまを賛美する。

〈さんび〉

いのちのこば社『ブレイズワールド』、3「このままの姿で」

〈すいせんとしよ〉

日本聖書協会・みんなの聖書絵本シリーズ1『せかいのはじまり』

※天候が許せば、屋外で分級をすると、実際の空や木や花を子どもたちと見ながら話しができてよいのではないのでしょうか。

〈おはなし展開例〉

カレライスは好きかな？ カレーって何があったら作れるの？ ジャがいも、たまねぎ、にんじん、お肉、カレールー、お水、油、他にもあるかもしれないね。それから、それを煮るお鍋もいるし、火がないとできないね。これだけの材料がそろったら、カレーが作れますね。何かを作るには、それを作るための材料がいるよね。

神さまは、この世界のぜんぶを造られました。神さまはどんな材料を使ってこの世界を造ったでしょう？ 実は、この世界を造られる前は、まっくらで、何もありませんでした。太陽も、空も、水もありませんでした。真っ暗闇の中、神さまが「光あれ」と言われただけで、光があらわれたんです。「大空あれ」と言われただけで、空ができたんです。神さまの言葉には、世界のすべてのものを造ってしまうほどの力があるんです。神さまってすごいねー。

この神さまが今もこの世界を、そしてわたしたちを守ってくださっています。すごい神さまが、うれしいときも悲しいときも、いつもわたしたちといっしょにいてくださるんだって思うと、うれしいね。だから、今週も神さまといっしょに元氣いっぱい歩いていきましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。この世界を造られた神さまはすごいですね。きれいなお花や緑色の葉っぱやおいしい海や川を造ってくださってありがとうございます。これからもこの世界を守ってください。わたしたちを守ってください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

この世界は神様が造られた。

⑤神様が創造された世界の始まりの第一日目には何と何ができましたか？

〈はじめに〉

今日から新しい聖書の学びが2年かけて始まります。みんなと一緒に聖書を知ることができる喜びを伝えましょう。そして、一人ひとりが神様にこのクラスに招かれ、神様ご自身が喜んでくださっていることを伝えましょう。学校では新しいクラスになったり、先生が変わったり、子どもたちも新しい環境に変わり疲れを覚えているかもしれません。十分に子どもたちの思いを配慮しましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

①聖書の一番初め、1ページの最初の言葉、創世記1章1節を読みましょう。

②誰がこの世界を造られましたか？

③神様は最初に何と言われましたか？

④神様は光を見て、どう思われましたか？

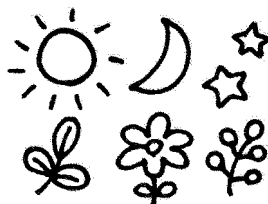
〈展開例〉

この世界は神様が造られました。これは疑うことのない聖書の真実です。この世界は神様がお造りくださったのですから、素晴らしいものです。だから、空を見ても造り主なる神様をわたしたちは賛美することができるのです。

この世界を、神様は「ことば」でお造りくださいました。想像できますか？ 何にもないところから造られました。しかも、簡単なことばで造られました。「光あれ」と神様が言葉を発すると、その通りになりました。わたしたちには絶対できないことです。神様は、素晴らしい力をもったお方なのです。この神様が今もわたしたち一人ひとりを受して、守っていてくださっています。

〈お祈りしましょう〉

神様、あなたは天と地、すべてのものをお造りくださった素晴らしいお方です。大きな力をもったあなたが、わたしたちを受してくださりありがとうございます。どうぞいます。



〈改革派信仰の確認のために〉

特に、救済者であり創造者であられる神の恵みの一元的理解のために、前もってハイデルベルク第26問を熟読されることをお勧めします。

〈関連聖句〉

※子どもたちと一緒に味わってください。

詩編8編

詩編146編

詩編148編

詩編121編

イザヤ書40章12～31節

使徒言行録17章22～31節

〈恵みを立体化するための視点の提示、例話〉

※子どもたちとの対話に用いてください。

アポロ15号で月面着陸したアメリカの宇宙飛行士ジム・アーウィンは、月の世界に立った時に、宇宙万物を創造した偉大なる神様の存在をひしひしと実感したといっています。そして帰還後に牧師になったそうです。同じように、宇宙から帰還後にキリスト教の牧師や宣教師になった宇宙飛行士は何人もいと言われます。

救世軍の山室軍平の「平民の福音」のくぐりを紹介します。明治32年に初版されてから何百回も増刷された名著。キリスト教の真髄が、かみくだかれた言葉で書かれている。そのくぐり。こんな味わい深い言葉を残しています。「私どもが一生涯懸命に信心してそれだけのかいのある神様は、どういう御方であろう。それは天地万物、山でも川でも草でも木でも、人間でも鳥で

も獣でも、あらゆる物をお造りなされた、目に見えないただひとりのまことの神様である。あなたのおとっさんの、そのおとっさんの、そのおとっさんの、段々もとにさかのぼって御覧なされ。一番初めの先祖はどこから生まれてきたのであろう。まさか木のまたから生まれはしまい。左様、人間の先祖を造り、しかのみならず引き続きそれに子ができ、孫ができ、これに飲まずべき乳があり、これを養うべき食物があるように仕向けて下された者はまことの神様である。にわとりは卵から生まれ、卵はにわとりから生まれる。一番初めに、にわとりが卵を生む様におつくりなされた者はこのまことの神様である。もちろん私どものたましいさえ、眼で見ることはいから、ましてまことの神様がこの両目で見えよう道理がない。さりながら人間にたましいのあることは、そのたましいがからだを動かす様子を見て分かるごとく、まことの神様のおいでなすることはまた、そのお造りなされた天地万物を見れば、たいい合点がまいるわけである。」

この生けるまことの神様の、大いなる手の中にだけ、人間の安息はあります。

〈祈り〉

神様、天と地と海と、その中にあるすべてのものを創造して下さった、あなたの大いなる御名をたたえます。はじめてであり終わりである方。あなたの前で、畏れを覚えます。あなたの大きな手が、この世界を支えていてくださいます。あなたにできないことは何一つありません。あなたを信頼していきますから、どんな時も支えてください。



〈ねらい〉

神様が創られた世界で生きることを喜ぶ。

〈展開例〉

聖書朗読。「初めに、神は天地を創造された（1章1節）」。

Q. 今日の聖書を読んでみんなはどう思うか？
「まったくその通り！」「いや、実際どうだろう？」
「学校で教わるのと違いすぎる！」

多分、信じられる人は神様がいることを信じている人。よくわからない人、信じられない人は神様がいないのか、どうかわからない人だと思ふ。

①聖書は、神様がいることが前提で話が始まる。

ここでつまずくと話が進まない。例)昔話で「昔、昔あるところにおじいさんとおばあさんがいました」、よくあるフレーズだが、ここで「いや、そんな人たちはいない！」って言うなら話はそこまでになってしまう。ただの昔話ならばそれでもよいが、聖書は「みんなの一生」と「みんなの死んだ後」を左右することが教えられている。もしも本当なら一大事。

②実際、みんなが信じようが信じまいが、この世界は「神様に創られた」か「神様に創られていない」か、のどっちか。もし神様がいないのなら、「世界がひとりで出来上がった」なんていうのは不自然なこと。例)知らない星でASIMOみたいなロボットやピラミッドみたいな建物が発見されたら、誰かが作ったって考えるのが自然。でも、ASIMOよりスゴイ人間が地球にいるのに、ピラミッドよりこの世界が複雑に出来ているのに、人間や世界は偶然に出来上がったと考える。おかしな話でしょ？

③もし、神様がいないのだとしたら、この世界で

生きていくってということは、たまたま生まれて、死んで無に帰っていただけの世界。死んでゼロになるために、苦勞して勉強して、受験する。バカバカしいでしょ。いつかは死んでしまうということを忘れるように、ゲームや楽しいことで時間を潰す。寂しすぎるでしょ。

神様は「君たちの生きる世界はそんなんじゃない！」と言われる。

④今日の御言葉は聖書の一番はじめの言葉。神様が、2000ページもある聖書を読むとき、一番に聞かせたいこと。それは「君たちのいるこの世界は、私が創ったのだ」ということ。この世界のすべてのことがらには意味があるということ。もし、神様がいないのだとすれば世界に意味なんてありはしない。みんなの喜び、みんなの苦しみに意味なんか無い。でも、確かにおられる神様は君たちにこう言われる「君たちの人生に無意味なことなんてひとつもないのだ」と。

⑤それだけじゃない。世界のすべてを「神様が創った世界」と信じられることは、神様は世界のすべてに力を発揮できると信じるのと同じ。生きることは希望と可能性に輝く。そして、この神様はみんなのことをどうでもいいと思っている御方ではない。神様は自分の愛するひとり子を十字架につけてでも、君を無意味な人生から救い出そうとされる御方。自分をそれほど愛している神様によって創られている世界をみんなは生きていく。恵みには感謝を、苦しみには希望をもって一週間を過ごしてほしい。

〈祈り〉

天地を創られたイエス様の父なる神様。疑いやすい私たちが、毎日あなたの力を信じ、その恵みに感謝し、すべての困難に祈れるように導いてください。アーメン。

1. はじめに

創世記1章には、神がどのように天地万物を創造なさったかということが具体的に記されています。しかし、間違えてはならないことは、創世記の物語は決して自然科学の本ではないということです。ここで言われている創造の御業の具体的描写は、決して自然科学的な真理を伝えようとしているものではありません。ここで教えられていることはもっと根源的なことです。つまり、この世界の一つひとつの秩序は決して神の意思と無関係に存在するのではないということです。本来この被造世界は、神の愛と祝福の下で秩序正しく創造された善い世界であるということです。

2. 神の愛による秩序ある世界

創造主である神はこの世界のすべてのものを六日間で創造されました。しかし、これは現代人の時間感覚である一日を24時間とした上で、神は六日間で、すなわち144時間で世界全体を創造なさったということではありません。ここで「第一の日」とか、「第二の日」という場合に使用されている「日」(ヨーム)という言葉は、「時」という意味を持つ言葉です。つまり、ここで大切なことは、創造主である神はこの世界を無から一瞬に造られたのではなく、時の区別の中で、慎重に時間的な順序を踏んで造られたということです。つまり、神は天地万物を十把ひとからげに扱われる方ではなく、一つひとつの順序をよく考え、一つひとつのものに心を配って創造なさったということです。

そのことは創世記1章に記されている創造の順序をよく見ると分かります。そこには被造物に対する深い配慮があります。というのも、神は第一日目に光を創造し、光と闇を分けることにより時間的順序を造られました。第二日目に天を創造し、天と地を分けることにより垂直的な空間を造り、第三日目に地上において水を一箇所を集めることによって海と陸を分け、水平的な空間を造られました。こうして神は第三日目までに被造世界の時間的・空間的基本秩序をしっかりとお定めになっ

たのです。そして、神はそのような秩序を創造なさった上で、植物を造り、水と空と地に住む動物を造り、最後に人間を造られました。つまり、神はすべての生き物が最も相応しい環境で増えて、満ちて行くことができるような順序で被造物を創造なさったということです。私たちは創世記にある神の創造の御業とその順序を見るとき、被造物に対する神の深い愛と配慮を教えられます。

なお、太陽、月、星などの天体の創造が植物と動物の間に記されていることは、何か科学と矛盾するかのよう感じるかもしれません。しかし、そもそも創世記は科学的真理を教えるために書かれてはいません。創世記が天体の創造をこの箇所記しているのは、天体を神々と考え礼拝していた古代社会の人々に対して、天体もまた神の被造物であるということを教えるためであると考えられます。

3. 善き創造の世界

神が深い愛と配慮を持って創造なさった世界は、当然ですが素晴らしい善き創造の世界です。そのことは、この創世記1章の記事の中に、「見て、良しとされた」という言葉が六回も使用されていることから分かります(1:4, 10, 12, 18, 21, 25)。つまり神は、創造なさったものをその都度よく見て、それが良い状態であることを確認しながら創造なさったのです。そして、創世記1章31節では、神が造られたものすべてをご覧になった時、「見よ、それは極めて良かった」とあります。

この世界の中に本来、良くないもの、悪いもの、必要のないものは何もありません。すべての被造物が神の善き創造の賜物として造られているのです。そうである以上、すべての被造物は創造主である神の栄光を表すものとして存在しています(民数記14:21、詩編72:19)。

確かに、今私たちの世界は人間が犯した罪によって墮落しています。しかし、本来この世界は神の愛による善き創造の世界として造られていることを忘れてはなりません。(弓矢健児)

テキスト 創世記 1章6～24節
カテキズム 子どもカテキズム 問11, 12

〔単元のねらい〕

創世記は、徹底して、御言葉の力を物語ります。神は、みことばによって、ご自身の御心を狂いなく実現させ、無から有をあらしめます。それゆえに、被造物をご覧になって自ら、「良し」と宣言されました。神ご自身が、満足し、「すばらしい！」と声を挙げられたのです。それほどまでに、被造物はすばらしい神の作品なのです。私たちもまた、神と共に、世界を、被造物のすべてを「すばらしい！」と感動できる信仰の感性を磨くことが大切です。また、創造物語は、進化論を教えられた子らにとって、躓きを与えるものとなります。(中学科以上は、分級などで進化論についてきちんと説明する必要があるでしょう。) 創世記は、科学の知を明らかにする教科書ではありません。神の英知、救いの真理は、物語(作り話ではありません)によって明らかにし得るのです。展開例には、メッセージがたくさん込められていますが、取捨選択してください。

「なんてすばらしい世界！」

世界ははじめ、混沌だったと書いています。コントンって、何でしょう。この礼拝堂は、コントンとしていません。先生がお話しする場所があるし、皆さんは、きちんと並べてある椅子に座っています。整理整頓され、お掃除も行き届いたきれいな礼拝堂ですね。コントンというのは、バラバラ、ぐちゃぐちゃっていうかんじです。もし先生もみんなも、あっちに座ったり、こっちに立ったり、しかもぐるぐる動き回ったりしていたら、そんな場所では、落ち着いてお話も聴けませんね。しかも、なんとそこは、真っ暗闇。もう、めちゃくちゃな場所です。

しかし、やがて神さまは、ついに、外に向かって、御言葉を発せられました。どんな言葉ですか? 「光あれ」です。「光あれ」いったい、どんな響き、どんな感じでおっしゃったのでしょうか。ともかく、そのとき、たちまち光が射したのです。

神さまが最初に造られたのは、光、暖かい光、命の光です。こうして、世界は明るくなりました。しかも、神さまは、この光をご覧になって、「良い」「すばらしい」とおっしゃって、ご満足なさいました。たった一回、一発で、完璧にすばらしい作

品がつくられました。さすが、神さまはすごいです。光、明るい世界、光のある世界は、生きるために、絶対に必要なものです。

先生は、ここで言われていることを、いったいどんな光景なのかと想像してみますが、ちょっとイメージがつかいません。誰か、映画監督とか、画家になって、目に見えるようにしてくれるとうれしいですが、とにかく、コントンではなくなったということなんだと思います。

こうして、世界は、その第一日目で、神さまが計画された通りに造られたわけです。さらに、第二目、第三日目、第四日目、第五日目、そして人間が造られた第六日目と、コントンではなく、順序よく、一つひとつを丁寧に、慎重に積み重ねるように造られたのです。そして、その目標、目的は何ですか。来週、学びますが、僕たち私たち人間を創造する、いわば準備のためでした。人間が生きるためのすばらしい楽園とするためでした。

それなら僕たち私たちもまた、神さまと一緒に、「なんて、すばらしい世界。なんて、きれいなんだろう。美しいだろう！」って、思えたら素敵ではないですか。名古屋の街の中は、ビルが多くて、「わぁー、きれいだなぁ！」って息を飲むよ

うな美しい自然はありません。でも、きれいな海を見たり、山に登って雲や空、そしてまわりの景色を見たりすると、「わあー、すごい！」って叫びたくなるようなことはありませんでしたか。先生は、そんなとき、神さまが造られた匂い、雰囲気が残っているような気がします。そして、そのような美しいものを見ると、心が感動し、自分の心まできれいになるように思います。神さまを知っている僕たち私たちですから、神さまの造られた世界を、美しい、素晴らしいと感じる心を、大切にしたいと思います。

さて、神さまが世界をお造りになられ、大空、地、海、草花、果物を実らせる木、太陽や月、魚、鳥、動物などを造って行かれました。さて、その方法は、なんでしょうか。先ほども言いましたね。第一の日である、第二の日である、第三の日である、第四の日である、第五の日である。第六……、ずっと繰り返されている、フレーズ、「決まり文句」があることに気付きませんか。

3節、「神は言われた」、「光あれ」、「こうして光があった」。次に、6節、「神は言われた」、「そのようになった」。次もまた、「神は言われた」、「そのようになった」。その次もまた同じですね。「神は言われた」、「そのようになった」。それが、31節、第六の日まで続くのです。

なんだか、創世記を書いた人は、これでもか、これでもかって、ちょっと、くどすぎない？と思ってしまうほどです。

でも、それは、これを読んでいる僕たち私たちに、絶対伝えたいことがあるんだなって思いませんか。絶対、忘れてはいけないよって、伝えたいだなんて思います。それは、なんでしょうか。それは、神さまのみことばには、力がある、必ず実現する、だから、御言葉をあなたも聴きなさい。御言葉を聴いて信じなさい。そのとき、あなたの

上にも、神さまの、ご計画、素晴らしい！ご計画、良いご計画、美しいご計画が実現するということです。

さて、今朝の暗唱聖句をもう一度、唱えましょう。パウロ先生の言葉です。「神がお造りになったものはすべて良いもの」、「感謝して食べるなら何一つ捨てるものはない」。人間が食べれるものは、神さまに感謝のお祈りをして食べるなら、すべて食べてよいし、良いものだよ、というのです。キリスト教には、あれを食べたらダメ、これをやったら罰があたる、こうしないとダメ、そんな掟は、ありません。神さまがお造りになられたものは、良いもの、素晴らしいものだ、言うのです。

そこで大切なのは、「感謝して」という御言葉です。感謝しないと、良いことなのに、良くなってしまうというわけです。感謝するということは、神さまが祝福してくださった食べ物だということ、忘れないということです。良いものは、神さまが良しとされたのですから、良いものの源、神さまを忘れたら、せつかくの良いものも良いものでなくなる場合があるというわけです。

つまり、神さまからの御言葉の素晴らしい祝福を受けるためには、感謝が必要だということです。感謝とは、お祈りのことです。犬や猫は、食べる時、お祈りしますか。しません。それは、悪くありません。でも、人間は、御言葉を理解し、信じていることができます。神さまのみことばによって、造られた人間は、なんと、自分も言葉をしゃべれる特別な生き物なのです。その言葉は、何のために与えられたのですか。神さまに感謝するため、お祈りするためです。それが、言葉の一番大切な使い道です。だから、今日の日曜日、僕たち私たちは、お祈り、礼拝をささげるのです。最後に、お祈りしましょう。（相馬伸郎）

[今週の暗唱聖句] テモテへの手紙一 4章4節

というのは、神がお造りになったものはすべて良いものであり、
感謝して受けるならば、何一つ捨てるものはないからです。

〈ねらい〉

神さまが造られたこの世界のすばらしさを発見し、み言葉によって世界を造られた神さまの力を賛美する。

〈さんび〉

いのちのこば社『ブレイズワールド』、3「このままの姿で」

〈すいせんとしよ〉

日本聖書協会・みんなの聖書絵本シリーズ1『せかいのはじまり』

※この日も、天候が許せば、屋外で分級をすると、実際の空や木や花を子どもたちと見ながら話しができてよいのではないのでしょうか。

〈おはなし展開例〉

教会の前にきれいなお花がたくさん咲いているよね。何色のお花があったか分かるかな？（キイロ、ピンク、むらさき……）。いろいろな色のお花があるね。このお花はどうやってできたかわかるかな？ 誰かが絵の具で色をぬって作ったんじゃないよね。これはみんな神様が造ったんです。

寒い冬には枝しかなかった木も、春になって暖かくなると、つぼみができて、きれいなお花が咲くでしょ。桜のお花がきれいに咲くと、お花見したりするよね。先生は、そうやってお花が咲くのをみると、うれしい気持ちになったり、元気になったり、やさしい気持ちにさせてもらえます。こん

なきれいなお花を造られた神さまってすごだね。お花だけじゃないよね。ひろーい空や、太陽や、夜になると光っている月や星、みんな神さまが造られたんだよね。今度、お空やお花や月や星を見るとき、神さまが造ってくださったことを思い出してみてね。

もう一つ、神さまのすごいのはね、神さまが「大空あれ」「草が芽生えよ」って言ったならその通りになったってことなんだよ。神さまの言葉には、それくらいすごい力があるんだよ。神さまの言葉は必ずその通りになるんだよ。「ぼくはダメな子かな」「わたしはお友だちにきらわれてるのかな」って思うことがあっても、神さまは「あなたは高価で尊い」「大切な子どもだよ」っていう言葉をわたしたちに言ってくださっているんだよ。世界を造ってしまうほど力のある神さまの言葉を信じて、今日からまた、元気いっぱい歩んで行きましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。きれいなお花や広い空や月や星もみんな神さまが造ってくださってありがとうございます。これから、きれいなものを見るときに、神さまのことを思い出させてください。どんなときも、わたしたちを大切に思ってくれる神さまのことが大好きです。これからも、神さまの言葉をたくさん聴いて、神さまといっしょにいられるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

この世界の被造物すべてを感謝して受けとめる。また神様と共に「すばらしい」と賛美する。

〈はじめに〉

クラスに入ってきた子どもたちを暖かく迎えましょう。あなたの優しいあいさつと一人ひとりを歓迎している態度は子どもたちに伝わります。また、お互いの子どもたちが、このクラスで共にいられることを喜び、お互いが受け入れられるように祈りましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

①神様は、一度にこの世界を造られたわけではなく、いくつかに分けて造られました、何回に分けたでしょう。

創造の第1日 光

創造の第2日 空、水

創造の第3日 地、海、草、木、花

創造の第4日 太陽、星

創造の第5日 魚、鳥、動物

創造の第6日 動物、人間

②神様は、どういう方法でこれらを造られましたか？

③造られたものを神様はご覧になって、どう思われましたか？

〈展開例〉

身の回りにある花や草、種や、木の実、果物などを机の上に置いて、神様の創造の素晴らしさを味わいましょう。動物図鑑などで、いろいろな種類の動物を紹介することも出来ます。

神様は、創造の六日間にかけて、一つひとつを順序良く、またすべて神様の言葉をもって創造されました。色々な形、色、いろんな香りもしたでしょう。一つひとつが光り輝いていたでしょう。神様の力はすごいですね。神様は一つひとつを創造されたとき、「良し」とされました。これは、十分神様が満足なさったということです。神様ご自身が喜ばれたんですね。これでいい、と思われたんですね。今のわたしたちには考えられないほどの美しさだったでしょう。この世界は神様が造られました。それは、神様ご自身がよくできたと思われるほど、美しい世界でした。そして、この世界を神様は祝福してくださったのです。神様はこの世界をととも大切に、愛して、心を込めて造ってくださいました。わたしたちは、この神様造られた世界に今生かされています。わたしたちが生きるために必要なお水もお空も光も全て神様をご用意くださったのです。わたしたちはこの世界を大切に使うなくてはいけませんね。神様が大切に造ってくださいましたのですから。わたしたちができることは何でしょう？

〈祈りましょう〉

神様、美しい世界をあなたが造ってくださいました。ありがとうございます。この世界をわたしたちも愛し、大切にすることが出来ますように。



〈改革派信仰の確認のために〉

ウ小教理第9問「万事ははなはだよく造られた」の解説に聞き、「善き創造」の信仰を深めましょう。「神の被造物は善きものであった。……我らは罪により悪が生じたことを認める。が物質また人体の要求そのものを悪と見ないで、神の御旨にしたがって、神の栄光と人間の幸福のために、正しく用いることが許され、また命ぜられていると信じている」（春名寿章）。

〈関連聖句〉

※子どもたちと一緒に味わってください。

詩編104編

マタイによる福音書7章7～12節

〈恵みを立体化するための視点の提示、例話〉

※子どもたちとの対話に用いてください。

今、目の前に広がっているこの世界は、「極めてよい」ものであるだろうか。海は汚れ、空は濁り、満天の星なんてなかなか見ることができない。人は憎み合い殺し合い、愚かな武器によって奇形の生物を生み出してしまう……。でも世界が醜いのは、私たち罪人が汚してしまったから。神様は悪いものを創造される悪い方ではない。この世界は、私たちが嫌悪すべきものではない。離れるべきものではない。

神様にとって「極めてよい」世界とは、人間にとって「極めてよい」世界でもある。天と地と海と、その中にあるすべてのものが、秩序正しく創

造され、すべてが整った上で人間が創造された。清浄な空気が用意され、水と食物が用意され、感性を刺激する素晴らしい景観が用意され、人間の生存にとって「極めてよい」世界を創造なさったことに、神は自ら満足された。世界とそこに生きる被造物のすべては、神様から私たちへの愛に満ちた、最高の賜物である。

神様は善いものしか、私たちにお与えにならない。それを悪いものとしてしまうのは、私たちの罪。例えば、お酒は悪いものではない。人の心を喜ばすために、神様が与えてくださったもの。悪いのは、お酒に酔っ払って乱行をしてしまう人間の弱さ。

神様が与えてくださる善いものに敏感であろう。感動しよう。この罪で濁った目にも、なお明らかなほどに、神の創造なさった世界は素晴らしい!! この世界を私たちに与えてくださった方が、善いものを与え続けてくださる。

〈祈り〉

神様、大いなる方。大いなる力をもって、この素晴らしい世界を創造してくださった方。善きものだけを創造される素晴らしい方。あなたは私たちにいつも善きものを与えてくださり、これからも善きものを与えて続けてくださいますから、感謝します。あなたに信頼して、心を高く上げて歩むことができますように。



〈ねらい〉

世界を「すばらしい」ものとして喜ぶ。

〈展開例〉

①今週も、神様が世界を創られたときのお話。そこには必ずではないが、おおまかなパターンがある。読み終わったらそのパターンを発表してもらう。聖書朗読(6節～25節)。大まかなパターンとは、神は言われた「○○○」⇒そのようになった

⇒神はこれを見て良しとされた、というパターン。世界のすべてが神様の言葉によって創られて、それを神様は「グッド!」「すばらしい!」と言われた。

②神様は世界のすべてを素晴らしいと言われる。

Q. みんなにとって、世界はどんなところがすばらしい?

⇒素晴らしいところを聞く。例)食べ物。風景。恋。運動。文化。

⇒みんなこの世界のすばらしさを知っている。でも、この世界にはすばらしいと思えないこともたくさんある。

⇒素晴らしく思えないところも聞く。例)戦争。貧困。自然破壊。病気や怪我。悪い文化。

⇒自分のことを考えれば、自分にも「すばらしいところ」と「すばらしいと言えないところ」が両方ある。

③神様は世界を「善い世界」として創られた。しかし、現実の世界は「善い」ことだけじゃない。すばらしくないことが起こるのも、現実の世界。なぜ、こんなことになっているんだろうか?

神様は戦争や自然破壊を見ても「すばらしい」と言われるんだろうか? そんなわけない。

④この後の話になるが、人間が神様の言葉を聞かなくなったときから、世界のすばらしい輝きは

歪んでしまった。でも、聖書は「もうあなたたちも、この世界もアウトです!」とは言わない。神様は、大失敗をして、すばらしくなくなってしまった世界のすべてに対し、再び「世界はすばらしい!それを創られた神様もすばらしい!」と言えるような「救い」を用意された。

⑤神様と言葉を交わし、神様との新しい関係が創りだされるところで、「すべてがすばらしい世界」は再び創られている。世界は言葉で創られた。皆のことを創る言葉がある。世界を創る言葉がここにある。

⑥受け入れたくない、戦争、貧困、汚染、病気、友人や家族とこじれてしまう人間関係、そうした世界の歪みが私たちの目の前にはある。しかし、私たちは世界を拒絶しなくてよい。神様はこのような世界でも「すばらしい!」と言えるほどに毎日に恵みを与えてくださる。また、怒りや恐れ、卑屈や傲慢、歪んだ世界をつくってしまう自分が現実にいる。しかし、私たちは自分自身を拒絶しなくてよい。イエス様が身を投げ打ってくださったからこそ、神様は世界の歪みごと君を受け入れてくださる。

⑦そして、その歪みが神様の言葉によって整えられていくとき、歪んだ世界の輝きも整えられ強まっていく。皆の人生の中で、世界はどんどん輝きを増していく。そんなすばらしい毎日がこの一週間、皆に与えられるよう祈りたい。

〈祈り〉

この世界をすばらしいものとして創られたイエス様の父なる神様。歪んでいる私たちこの世界を、あなたの言葉が再び「すばらしい」と言われた世界に相応しく、つくり変えてくださいますように。アーメン。

1. はじめに

神は六日間で天地万物を創造なさった後、七日目に創造の仕事を離れ、安息され、この日を祝福し、聖別なさいました（創世記2:3）。けれども、この七日目の安息は、神の創造の御業と決して無関係な出来事ではありません。創世記2章2節で、「第七の日に、神はご自分の仕事を完成され」とあるように、神の創造の御業が完成されたのは第七の日：安息日です。つまり、神の善き創造としての被造世界全体の完成は七日目の安息において実現したのです。

2. 神の安息に向けて創造された世界

七日目の安息において創造の御業が完成されたということは、別の言い方をすれば、この世界は七日目の安息を目指して創造されたということです。神が深い愛を注ぎながら、六日間にわたって順序よく天地万物を創造なさったのは、この世界が七日目の安息にあずかるためであったということです。ここに被造世界の存在の目的があります。

それならば、この被造世界が七日目の安息にあずかるとはどういう意味なのか。創世記2章3節から分かるように、七日目の安息は単に神が休まれたということだけを意味しているわけではありません。神が休まれたのは、この日を祝福し、聖別するためであったのです。聖別とは「神のものとして特別に取り分ける」ということです。つまり、神が七日目に安息なさったのは、この世界全体の創造を喜び、祝福するため、また、この世界全体が神のものであることを記念するためであったということです。したがって、この被造世界が七日目の安息にあずかるということは、この世界全体もそのような神の祝福と喜びの中に入れられるということです。この世界は神の祝福の中で、神のものとなされ、神の喜びが満ち溢れる世界となるよう創造されたのです。

3. 神の栄光と祝福を現わす世界

神の創造なさった世界は、「見よ、それは極めて良かった」（創世記1:31）と言われるような良

い世界であり、神の栄光と祝福に満ちた世界です。ですから、神によって創造された人間が神の栄光のために生きるべき場所はこの被造世界全体です。私たちはこの世界から離れて神のために生きることができません。人間はこの世界の中で神の喜びを自分の喜びとして生きることが大切です。

もちろん、この世界の墮落という現実を、私たちは決して軽視するものではありません。また、神の国の祝福が最も豊かに満ち溢れている場所がキリストの体である教会であるのも事実です（エフェソ1:23）。だからこそ主の民は教会の礼拝を通して神の栄光に仕えるのです。

けれども、神の救いの目的は究極的には教会ではありません。この被造世界全体の回復と完成こそ神の救いの究極の目的です。イエス・キリストは「わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえ」（ヨハネ1:29）として十字架にかかってくださったのです。だからこそ、主の民である教会は人間の罪の故に、「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっている」（ローマ8:22）現実をしっかりと見て、被造世界全体の回復と完成という神の御業に仕えていかなければなりません。教会は人間の魂の救いだけでなく、被造世界全体の回復に対しても大きな責任があるのです。

この世界が七日目の安息に向かって創造されたということは、今のこの世界もまた終末の完成という究極的な安息に向かって導かれていることを意味します。神はこの世界全体が神の祝福と喜びに満ち溢れる世界として回復し、完成されるために働いておられるのです。その中で、主の民である私たちは既に毎週の主の日の礼拝において、その完成の前味にあずかることが許されています。

既に終末的完成の恵みにあずかっている主の民の使命は、この世界全体の終末的完成という神の御業に仕えるために、神の祝福と栄光の舞台である世界の中で生きることです。（弓矢健児）

テキスト 創世記 1章31節～2章3節
カテキズム 子どもカテキズム 問1, 11, 12

〔単元のねらい〕

契約の子たちは、神の民、幼きキリスト者として歩んでいます。それゆえ彼らもまた、さまざまなプレッシャーを受けながら生きているはずですが。私どもは、この日本で信仰の厳しい戦いを生きている。ついつい、生活のさまざまな局面において「あれもダメ、これもダメ」と否定的、消極的なものの言い方、見方に陥りやすいと思います。それが、契約の子たちの信仰への消極的態度を促すことをおそれます。反対に、万一、そのようなプレッシャーを避けさせようとするなら、契約の恵みを軽んじ、空しさの中へと進んで行くこととなるでしょう。創世記の創造物語は、徹底的に世界を肯定的に見る視点を確立させる源泉です。世界は、神の栄光の舞台です。人間こそ、このひのき舞台の上で、神の御前で思いっきり生きることができし、そうすべき最高の生なのです。肯定的、積極的、明るいキリスト教育論の人生観を子どもたちに！

「世界は神さまの栄光を物語る」

一週間は七日間あります。一週間は日曜日から始まります。明日は二日目の月曜日、そして、火曜日、水曜日、木曜日、金曜日と続きます。最後の第七日目は土曜日です。

神さまは、天と地、地球と宇宙を造られたとき、このように順序正しく、きちんと丁寧に造って行かれました。そして、第六の日に、お造りになられたすべてのものを、じつとご覧になられて、仰いました。「良し・すばらしい・見事・美しい」。聖書の著者も、心の底から感動して言います。「見よ、見てごらんささい。極めて、良かった」。

でも、この創世記を書いた人は、神さまが天地を創造された様子を見たことは、ありませんよね。人間はそれを見ることはできなかつたのです。まだ、造られていなかったのですから。それなら、この創世記を書いた人は、どうしてそんな風に言えたのでしょうか？ 昔からこれを書いたのは、モーセさんだと言われてきました。モーセさんはどんな人かという、イスラエルの人々をエジプトの奴隷から脱出させた偉大なヒーローでした。神さまは、エジプトの王子として育てられていたモーセを通して、イスラエルの民を救いだします。エジプトの王と戦ったモーセは、ついにイスラエル

の人々を引き連れて、約束の地を目指して脱出します。ところが、エジプトの軍隊が追いかけてきました。目の前は行きどまり、海です。ところが、神さまに祈ったモーセが、その海に向かって手を差し伸べると、どうでしょうか。ものすごい風がビュービューと吹いて、海が真つ二つに分かれてしまいました。イスラエルの人々は、海の底を通って進むことができたのです。

すごい奇跡ですね。それをなさったのは、聖書の神さま、僕たち私たちの神さまです。モーセさんは、この神さまのすごい力と愛をその目で見ました。だから、こんなすごい創世記を、神さまに教えられたとお書きしたのかもしれない。

僕たち私たちは、聖書によって、この創造のお話を読んでいます。それを、信じています。どうして、信じられるかという、イエスさまを知っているからでしょう。イエスさまが、神さまなのに、天から降りて、人間となってくださった。そして十字架について死んでくださった。そして、死の力を打ち破ってよみがえってくださった。今も生きて、世界中の教会とイエスさまを信じるキリスト者たち、僕たち私たちを守ってくださり、世界中の国々と人々を守ってくださるこ

とを知っているからでしょう。本当にイエスさま、神さまの御わざは、すごいですね。

神さまは、第七日に休まれました。それは、何にもしないということではありません。神さまが創造された世界を神さまが、喜び、楽しんでおられるのです。そうすると、これまでのお働きの中で、一番すばらしい日はいつになるのでしょうか。先生はこう考えます。すべては第七の日のために、それを目指して、神さまは働かれました。どの一日一日のお働きも楽しく、うれしく、すばらしかったと思います。でも、その目標はその完成だと思えます。神さまが創造された最高傑作は人間でした。僕たち私たちです。つまり、世界は、僕たち私たちがそこで楽しく、喜んで生きることができるようにつくられた樂園だったのです。神さまの栄光を燦然と輝かす、見事な、あまりにもすばらしく、美しく、過ごしやすく、働きやすい、言葉では決して言い表せないほどの、すばらしい世界だったのです。神さまの造られた栄光の舞台。栄光の劇場です。僕たち私たちで言うと、栄光の遊び場、砂場？かもしれません。

ということは、そこで、僕たち私たち人間が、思いっきりそれを楽しんで、生き生きと生きることが、神さまに喜ばれることになるはずですね。そんな世界を、神さまもまた、おもいっきり祝福されました。特別の日として、取り分けられたのです。聖別されたということです。

今朝の暗唱聖句をもう一度、読みましょう。「天は神の栄光を物語り／大空は御手の業を示す。(昼は昼に語り伝え／夜は夜に知識を送る)」。今、僕たち私たちは、聖書を持っているでしょう。聖書には、神さまのことが直接書いてありますね。詩人は、「天は神の栄光を物語り、大空は御手の業

を示す」と言って、神さまが造られた世界のことを「第二の聖書」って呼びました。神さまがいらっしゃって、どんなに美しく、すごい力を持っておられるのか、それは、海と空を見れば、分かるからです。

今は、どんな時代ですか。2010年4月25日。その通り、でも、もっと大きく数えると神さまの造られた時間のなかで、第七日目です。僕たち私たちは、この世界、この時間の中で、神さまに祝福されているのです。あらためて、子どもカテキズムの間1を思い出してください。「人生の目的とはなんですか。神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光を現すためです。これがわたしたちの喜びです!」。つまり、この神さまがつくられたすばらしい世界、わたしのこの命、人生を喜ぶこと、それが、神さまを喜ぶことに、つながっているのです。神さまが、僕たち私たちが喜んで生きることを喜ばれているのです。だったら、神さまの栄光を現すことも、神さまを喜ぶことと、つながっていることがわかりますね。この人生の中で、思いっきり生きること、栄光の舞台の上で、我を忘れて、楽しむこと、遊ぶことです。20世紀の一番有名な神学者の先生は、「人生は遊び」って言ったそうです。先生も、昔、子どもが砂場で夢中になって遊んでいる姿を見て、うれしかったことを覚えています。神さまは、僕たち私たちが、そんな風に、神さまの栄光の舞台で生きることを、大喜びで見てください。だからと言って、勉強しないでいいのかということではありません。勉強もまた、遊びの一部だということですね。そんな神さまを知ることができた僕たち私たちは、幸せです。今日は安息日ですね。最高の遊びは礼拝ですね。(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] 詩編 19編2節

天は神の栄光を物語り
大空は御手の業を示す。

〈ねらい〉

神さまが七日目に休まれたことを知り、神さまに造られた世界や自分たちを喜び、神様に感謝する。

〈さんび〉

いのちのことば社『ブレイズワールド』、3「このままの姿で」

〈すいせんとしよ〉

日本聖書協会・みんなの聖書絵本シリーズ1『せかいのはじまり』

〈おはなし展開例〉

今日も、世界のはじめのおはなしです。

一日目、何を造られたかな？ 暗やみと光を分けられました。二日目、何を造られたかな？ お空を造られました。三日目、何を造られたかな？ 海と大地を造られて、木や草花を造られました。四日目、何を造られたかな？ 太陽、月、星を造られました。五日目、何を造られたかな？ 鳥や魚、動物たちを造られました。そして、六日目に、人を造られました。神さまは、造られた世界を見て、「とてもすばらしい！」と言われたんです。

そして、七日目に神さまはお休みされました。この世界を造るのが大変なお仕事だったから、「あー疲れた」と言ってお休みされたというわけではありません。神さまがお休みされたのは、造

られた美しいこの世界をゆっくりと楽しんで、「すばらしいなあ」と喜んで、そしてこの日を特別な記念日にしました。

わたしたちが、日曜日に教会に来るのはね、わたしたちのまわりにある、すべてのものを与えてくださった神さまにありがとうという気持ちをこめて心から礼拝するためなんだよ。せんせいは、礼拝がだいすきです。神さまが、ほんとうにわたしたちを大切にしてくださって、わたしたちに必要な言葉をお話ししてくださるからなんだよ。そして、神さまが造られたお花や木の緑がきれいだなんて思う心が与えられたり、この世界を大切にしたいなという思いが与えられるんだよ。

いつも、わたしたちに与えてくださっているすべてのものに、神さまありがとうの気持ちを忘れないようにしようね。そして、神さまを礼拝する日曜日は、神さまが与えてくださった特別な日だっていうことを忘れないようにしようね。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。わたしたちにたくさんの良いものを与えてくださってありがとうございます。いつも神さまを礼拝して、イエスさまといっしょに歩いて行けますように。これからも、わたしたちやお友だち、この世界を守ってください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

神様の創造された世界は「見よ、それは極めて良かった」と言われるほどのものであり、神様の栄光と祝福に満ちた世界である。その世界にわたしたちは生かされている喜びを知ろう。

〈はじめに〉

新しいクラスになって一か月になります。子どもたちの様子が少しわかってきたでしょうか。よくお話をする子どもや静かな子ども、恥ずかしがり屋さんもいるでしょう。どんな子どもでも神様はいつも愛してくださっていることを伝えましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①神様はお造りになったこの世界を見て、どう思われましたか？
- ②神様はこの世界を創造されました。何日に分けて造られましたか？
- ③第七の日には、神様は何をされましたか？
- ④安息なさったこの日を、神様は祝福されました。今のわたしたちにとって、この日は何曜日として過ごしていますか？

〈展開例〉

神様は創造の六日で世界に必要なものをすべてお造りくださいました。そして、次の日、第七日目には、お仕事を離れ、安息なさったと聖書に書いてあります。安息というのはお休みになるということです。お休みだからずっと寝ているという

のではありませんね。神様はこの日を祝福して、聖別されたと聖書は書いています。神様は特別にこの日を過ごされたのです。神様が心を込めて、すべてのものをすばらしく造られたその中で、神様は喜んで一番すばらしい日として過ごされたのです。創造が完全に完成した日として喜ばれたのです。

神様は、創造の最後として、人間を造ってくださいました。人間にとって必要なものをすべて用意してくださいました。最後、大事に大事に人間を生かしてくださいましたのです。それだけ、人間を愛してくださっているのが神様です。

神様は人間を造られて、第七日に安息されました。この日が今日、日曜日なのです。わたしたちはどうやって、この日を過ごしますか？ 教会で神様を礼拝して過ごしますね。一番の喜びの日、神様を賛美する日、神様とお話をする日、そう過ごすことを神様が一番願っておられて、わたしたちを心から喜んでくださる日なのです。ただのお休みとの日とは随分違いますね。世界のすべてを神様はおつくりくださいました。わたしたちはどこに行ってもどこでも神様とお交わりが出来るのです。神様が造ってくださいましたこの世界でわたしたちは神様を喜んで生きることが出来るのです。

〈祈りましょう〉

神様、この世界を祝福してくださいありがとうございます。神様が造られたこの世界で、わたしたち一人ひとり元気に、喜んで毎日過ごすことが出来ますように。またこの喜びをお友だちに伝えることが出来ますように、わたしたち一人ひとりをあなたのためにお用いください。



〈改革派信仰の確認のために〉

特に、「喜びの神学」の理解のために、前もってウ小教理第1問、大教理第1問、またハイデルベルク第6問を熟読してください。牧田吉和『改革派信仰とは何か』の「付録：喜びに満ちたカルヴィニズム」も、ぜひお読みください。

〈関連聖句〉

※子どもたちと一緒に味わってください。

出エジプト記20章8～11節

詩編96編

ネヘミヤ書8章10節

フィリピの信徒への手紙4章4節

〈恵みを立体化するための視点の提示、例話〉

※子どもたちとの対話に用いてください。

庭いじりをする人には分かるであろう。自分が丹精込めて造り上げた庭で、美しい緑に囲まれて、ゆっくりと深呼吸しながらあたたかい紅茶など飲んだりする、そんな喜び。金木犀の香りが鼻をくすぐる。こしらえた砂場では子どもたちが戯れる。そんな様子に心からの充足を与えられ、あふれる祝福に感謝し、神を賛美し、喜ぶ。創造の完成における神の安息にも、そんな喜びが満ちていたのではなからうか。

神様は、世界を祝福しておられる。大いに喜んでおられる。ご自分の創造された作品の素晴らしいに、「極めてよい」と深い満足を覚えておられる。その世界で耕し、建て上げ、愛しあい、走って、学んで、遊んでいる……、そんな私たちを見て喜んでくださる。

ならば私たちも、神様といっしょに喜ぼう。神が私たちのために与えてくださったこの世界を喜ぼう。神が与えてくださった素晴らしい人生を感謝し、「喜び」を数えよう。神様は私たちに、いつも「善きもの」を与えてくださる。よき友・隣人・家族を与えてくださる。美しい景色を用意してくださる。おいしい食事を備えてくださる。豊かな個性、才能……etc、私たち一人ひとりにオーダーメイドされた祝福が与えられている。そんな神の祝福を、体と心をいっぱいに使って喜び楽しもう。折のいい時にも悪い時にも、神様が用意してくださっている「善きもの」を拾い集めながら、幾千、幾万の、星の数ほどの「喜び」へと開かれていこう。

その「喜び」の中心は礼拝です。日曜日に神の御前で安心して息をして、御言葉に慰めと励ましを受け、希望と祝福を受けて派遣される。世界と私たちを祝福し喜んでくださる神様を、私たちも喜び感謝し賛美する。日曜日の礼拝堂にはそんな「喜び」の共鳴があるのです。

〈祈り〉

神様、あなたはご自分のお造りになったこの世界と私たちをごらんになって、心から満足していただきます。喜んでいただきます。だから私たちは、生きていてもいいのだと安心することができます。ありがとうございます。私たちは罪に汚れ、あなたのように喜ぶことができません。自分を祝福することもできません。でも、あなたと共に喜んで生きることができるようにしてください。



〈ねらい〉

神様との安息が与えられていることを喜ぶ。

〈展開例〉

①今日の箇所で、ついに世界の創造が完成される。

世界の創造は「あること」によって成し遂げられた。それが何か考えながら聖書を読む。聖書朗読（1章31節～2章3節）。

Q. 世界の創造は、最後に何が成されて完成したか？

⇒安息、七日目の祝福と聖別

②神様は七日目に休まれた。そして、その日を「安息」のための特別な日として、祝福された。神様は疲れて働けなくなってしまうような御方ではない。当然、何日でもイケル。「安息」＝何もしない、ということではない。「安息」とは「やすらかに休むこと（広辞苑）」。中学生の言葉で言うならば「まったり」すること。創造した世界で、創造した人間と「まったり」するために、一日を特別なものとして取り分けて（聖別）、特別な恵みを注がれた（祝福）のである。世界は六日の間にすべて出来上がった。しかし、完成ではなかった。神様と一緒に、一日中、仕事を忘れてまったりすること。この日の有る無しが、世界が完成するかどうかの変わり目だった。

Q. みんなはどうか？ 神様と安息できているか？ 神様とまったりできているか？

③人生の喜びは色々なところで味わえる。神さまのすばらしさは生活サイクルのどの場面にも溢れている。食事をするとき。趣味に没頭するとき。体を思いっきり動かすとき。がんばって勉強した成果を発揮するとき。友だちと時間を共に過ごすとき。神様の恵みのもとで、生きている充実感を喜ぶ場面はみんなの毎日に溢れている。世界は神様のすばらしさに輝く（栄光）舞台である。そして、中学生はこの舞台の上で、

勉強、スポーツ、友だちづくり、その他、大人になるすべての準備を整えていく。

④しかし、もし、自分の仕事を手放して神様とまったりする時間を確保できないなら、君の人生は完成しない。君が大人になるのに絶対に必要なもの。なるべく良い仕事に就くこと、そのためにはなるべく良い学校に行くこと、色々な思いがあると思う。でも、どんな仕事に就こうが、どれだけ勉強のできる学校に行こうが、どれだけスポーツの強い学校に行こうが、どれだけ素敵な友だちや恋人ができれば、君の人生は未完成。世界は神様と人が喜び合って生きるために創られた。逆に言うなら人は神様なしに生きられない。七日目は言わば神様とのデートの日。神様の愛にどっぷりつかって力を養う日。

⑤しかし、私たちの生きる現実には、これが出来ない歪みがある。日曜日だけ神様のことを味わって、あとは知らんぷり。日曜日、教会に来るけれど心の中では知らんぷり。日曜日も来るかどうかは自分の気分しだい。それでよいのだろうか？

⑦これは君たちの命に関わること。ぶ厚い聖書のこんなに初めの部分で語られなくちゃならないほどに重要なこと。神様は一日中、君と触れ合っていてられる時間を心底、求めておられる。「そのためにはなら、自分のひとり子を犠牲にしてもよい！」と言われるほどに。

〈祈り〉

私たちと過ごす時間を心から求めてくださる神様。あなたの愛に喜んで応じることのできる心と生活を、私の人生のうえに造り上げてください。アーメン。

〈六日目の創造〉

天地創造の最終段階に至って人間が創造される。家畜・這うもの・地の獣が同日に置かれるのは、人間もまたそれらの生き物と同類と看做される所以であろうか。しかし、その差異は明瞭である。人間は神にかたどって創造され、創造の冠として、天地万物が整ったのち地上に現れる。

人間の創造に際し、神が「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」（26節）と一人称複数で語られたことが議論になる。数々の解決が試みられてきたが、神の熟慮を表す複数と捉えておけばよい。三位一体の神の対話という伝統的な解決法は歴史的釈義からは導出されないが、啓示の進展の上で正当化されよう。

〈神のかたち〉

「神のかたち」とは何かがさらに議論となる。伝統的には人間の本性が神に類似するものと捉えられ、理性や自由意思、道徳性などと考えられた。しかし、旧約では「かたち」は具象的であり、身体性と精神性をあまりに厳密に区別することは相応しくない。26節の表現は、5章3節でアダムが息子をもうけたくだりで繰り返されており、そこから推察される含意は「複製」である。子は父の存在を受け継いでこの世に生を受けるが、初めの人間は身体的・精神的すべての存在を通して神を映すものとして創造される。

旧約聖書が背景とする古代オリエント世界では王が神のかたちを有すると看做され、一般庶民とは区別された。聖書はその王に相応しい権能や尊厳を人類一般に敷衍し、すべてのものが神のかたちを有すると主張する。古代世界で神のかたちを有する王が人民を支配したように、人間は自然界を統治する権能をもつものとしてこの世に創造され、その命の尊厳については最高度の価値が付与される（9章1～6節）。

〈男女の平等〉

神のかたちに創造されたのは男だけではない。

27節で「男と女に創造された」と加えられているのは、男女一对の姿もまた人間の本性たる神のかたちに含まれていることを示唆する。後に「人が独りでいるのはよくない」と言われる所以である（2章11節）。

〈祝福された生命〉

はじめに神は生命に満ちた世界を創造し、これを祝福された。旧約における神の祝福は繁栄を約束する。人間は与えられた尊厳ある使命に基づいてその繁栄を司る。神は人間の命を養うと同時に、あらゆる生き物の命をも養われる。人間による自然の支配を命じる神の言葉は、自然崇拜を行う世界に神中心的な世界観を与えると同時に、人間のエゴイズムによる自然破壊にも警鐘をならす。王に求められるのは義の実行である。人間は自然界の王として、与えられたすべての力を神の祝福の実現のために用いるよう、世界に存在する。

〈創造と終末〉

祝福の内容には人間および地上の生物の食物に対する関心が示され、基本的に創造の時点ではみな草食である。自然科学の見地から実際にどうかとの問題は別にして、血の流れる生き物が互いに血を流すことなく生きる世界がここに描かれる（イザヤ書11章6～9節、65章25節）。肉食は罪ある世界を神が減ぼさないと決意された洪水後の時代に許可され（8章21節、9章3節）、動物犠牲がささげられる現在を指し示す。創造は終末を表示する。初めに神が創造された世界は、「極めて良かった」と賛辞が贈られる状態で完成された。来るべき終わりの世界はこの初めの状態への回復へ方向づけられ、キリストによる真の完成を待つ。ゆえに、キリスト者の求める神の栄光・永遠の喜びは、神の被造世界と切り離された個人的瞑想において実現するのではない。キリストの救済の業は選びの民によって創造の回復に向けて進められており、地上のあらゆるものが聖なるものとして神へと立ち帰る途上にある。（牧野信成）

5月2日

「人間の創造と人生の目的」

説教展開例

テキスト

創世記 1章26～31節

カテキズム

子どもカテキズム 問1

〔単元のねらい〕

天地創造のみわざの中で、とくに人間の創造について学ぶ。今回のカリキュラムでは、天地が神の栄光の舞台であることが強調されている。人間は、その栄光の舞台におかれた「創造の冠」である。その栄光を知り、心に刻むことを中心にしたい。神の恵みに感謝し、神を畏れること。そこから、神を喜び、神の栄光をあらわす人生の目的へと導きたい。人の被造物支配、文化命令は、その中で理解される。

「創造の冠としての人間」

神さまの天地創造のみわざを学んでいます。神さまが、「光あれ」とおっしゃって光が造られて、天地創造のみわざが始まりました。第一日、第二日、第三日と、順序立てて、秩序正しく、六日間かけて、天と地が創造されました。天と地のすべて、この世界は、とても美しく造られています。神さまが秩序立てて、配慮して造ってくださったから、そして、神さまの愛が込められているから、この世界はとても美しいのです。

今、生態系の破壊や気候の変動といった環境問題が大きく注目されています。確かに、動物や植物の生態系は破壊されています。お天気、気象もおかしくなってきました。けれども、神さまがこの天地を支えておられることには変わりありません。今日も、東から太陽が昇り、西に沈みます。春のあとには夏が来て、秋があって、冬がある、その順序も変わっていません。「もしも季節がいちどにきたら」という子どもの歌で、全部の季節がいちどに来て、海で泳いで雪合戦をするという楽しい歌がありますね。でも、残念ながら、いくら異常気象ということがあっても、季節がいちどに来たりはしません。神さまが造ってくださったこの世界は、今も、神さまご自身の御手によって支えられ、守られています。

神さまは、六日間で天と地のすべてを造り、第七日に、この天と地のすべてのものを祝福して、安息されました。創造のみわざを終えて、安息さ

れました。そのことを、先週、学びました。さて、その第七日の祝福の前、天地創造のみわざを終える前の、神さまの最後のみわざは何だったでしょうか。神さまが、天と地を造る、その最後に造られたものは何だったでしょうか。そう、それが人間です。わたしたち人間です。人間は、神さまが創造のみわざの最後に造られたものです。

「最後」と言う、「何だ！ いちばん最後なのか？」と思うでしょうか。でも、こう言い換えるといえましょう。最後というのは、締めくくりなのです。天地創造の締めくくりであって、いわば、天地創造のみわざを完成させる、そのために、人間を造ってくださいました。人間の創造は、天地創造の締めくくり、天地創造を完成させる、神さまのみわざです。(※もちろん、天地創造の完成は、第七日の安息にあります。けれども、第七日の安息は、人が神と向かい合って神との交わりに生きることとおして実現します。神さまは、人とおして第七日を祝福し、聖別されることを良しとされました。その意味で、人間の創造は、創造のみわざの完成に不可欠なものとしてされています。)

ですから、人間のことを「創造の冠」(あるいは「被造物の冠」と呼びます。すべてのものが創造されて、その極みとして人間が造られました。造られたものすべて、被造物すべての上に人間という冠が置かれている、そのような存在として、人間が造られました。そのような、大切な、尊い存在として造られた人間である。そのことを、ま

ず大切に心に刻みましょう。

さて、そのように、人間が締めくくりとして、最後に造られました。人間が創造の冠である。そのことは、逆に言えば、それまでのすべての被造物が人間のために造られ、備えられたものである、ということでもあります。今朝の御言葉にも繰り返されていました。「海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう」(26)、「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ」(28)、「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる」。こうあって、人間のために備えられ、人間に与えられ、人間が支配する、ということが語られています。しかし、これは、わたしたちが、すべての被造物、神さまの造られた世界を好き勝手にして良い、わたしたちの思いのままにして良い、ということなのでしょう。

ひとつには、すべての被造物がわたしたち人間に与えられている。わたしたち人間の手にゆだねられている。そのことは真実です。主なる神に感謝しましょう。神さまをほめたたえましょう。

けれども、次に、わたしたちに与えられているからと言って、ゆだねられているからと言って、思いのままにして良い、何でも自分の好き勝手に利用して良い、ということではありません。

聖書の詩編8編にこうあります。

「あなたの天を、あなたの指の業を／わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは／人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう／あなたが顧みてくださるとは。神に僅かに劣るものとして人を造り／なお、栄光と威光を冠としていただきせ／御手によって造られたものをすべて治めるように／その足もとに置かれました。羊も牛も、野の獣も／空の鳥、海の魚、海路

を渡るものも」(8:4～9)。

詩編の御言葉は、人を創造の冠として造られた神さまに対する畏れを言い表しています。この天と地のすべてを造り、治め、支えておられる神さまが、大きな栄光と名譽を与える存在として人を造り、造られたものすべてをゆだねてくださいました。それに対して、わたしたちは、神さまに感謝し、畏れをあらわし、神さまに喜ばれる生き方をして応えることが求められています。大きな恵みと栄光が与えられたならば、それを自分のものとして思いのままにするのではなく、神さまに感謝と畏れをあらわして、神さまをほめたたえて歩まなければなりません。

神さまは、「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」(26)とおっしゃって、「神にかたどって」(27)人を創造されました。天地の造り主である神さまは、この天と地を愛し、良い配慮で満たし、はぐくまれたお方です。わたしたちは、その神さまにかたどり、似せて造られました。神さまと向かい合って生きる存在として造られました。

そうであれば、わたしたちは、神さまと向かい合って、神さまをほめたたえて歩みます。子どもカテキズム問1にあるとおり、「わたしたちが生きるのは、わたしたちの神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわすためです」。それは、礼拝をささげて、神さまを喜んで生きることです。そして、この世界、天と地のすべてのものを大切にすることをとおしても、神さまをほめたたえることができます。最初に言いましたように、生態系の破壊や気候の変動といった環境問題があります。神さまは、それでもなおこの世界を維持し、支えてくださっています。ですから、わたしたちも、この世界を大切にすることによっても神さまに仕え、神さまの栄光をあらわしましょう。

(望月 信)

[今週の暗唱聖句] 詩編 8編5節前半

そのあなたが御心に留めてくださるとは／人間は何ものなのでしょう。

〈ねらい〉

神さまは、人を造られ、世界の中で生きる目的を与えられていることを知り、小さなこどもたちも、神さまの役に立てることを知る。

〈さんび〉

いのちのこば社『ブレイズワールド』、3「このままの姿で」

〈おはなし展開例〉

みんなはどうやって生まれてきましたか？ お母さんのお腹の中から生まれて来たんだよね。じゃあ、世界で一番最初の人、お母さんも誰もいないのに、どうやって生まれたのでしょうか？サルから進化したんではないんです。世界でさいしょの人は、神さまが造られたんです。そして、わたしたちも、お母さんのお腹の中に生まれさせてくださったのは、神さまなんです。神さまってすごいね。

神さまは、わたしたち人間を、とても大切にしてくださっています。だから、この世界を造られて、すべて準備OKになってから、人間を造られたんです。

それだけじゃないんです。他の動物は神さまに

お祈りしたり、礼拝したりできないよね。犬が神さまにお祈りしたり、ネコが賛美歌うたったりしたら、おかしいよね。神さまは、人間だけが神さまとお話できるように造ってくださいました。それは、神さまがわたしたち人間を特別に大切にしてくださっていて、わたしたちにお話したい、わたしたちのお祈りを聞きたいと願ってくださっているんです。だから、わたしたちは、聖書を読んで、神さまがわたしたちに何をお話しようとしているのかを聞きます。そして、そこに書かれている通りにしてみると、どんなに小さなわたしたちも、神さまのお役に立つことができます。いつも、神さまの声が聞けるように、そして神さまに用いていただけるようにお祈りしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、わたしたちを造ってくださってありがとうございます。神さまに造られたわたしたちとお友だちを大切にすることができますように。いつも神さまの言葉を聞いて、小さくてもわたしたちが神さまの喜ばれることをすることができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

神様は、人を造られました。そして生きる目的をお与えになりました。

〈はじめに〉

GWが始まりました。旅行中の子どもたちがいるでしょうか。出席した子どもたちに休み中の様子を聞きましょう。旅行中のお友だちが神様に守られるよう共に祈りましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①創造の第六日目、神様は何を造られましたか？
- ②何にかたどって造られましたか？
- ③神様は、人間にどんな役割を与えましたか？
- ④神様は、お造りになったすべてのものをご覧になられて、どう思われましたか？

〈成長のために〉

創造の最初の三日は、太陽や月、星、海や陸、木や花、果物を造られました。創造の後半の三日で、神様は、魚や鳥、動物そして人間を造られました。息をしなければ生きていけない動物や人間のために、神様は生きるための場所をまずご用意くださいました。人間は、すべてのものが用意されてから造られました。

人間は、「光あれ」「大空あれ」と言われた創造の言葉とは違う言葉で、創造されました。1章26節、「我々にかたどり、我々に似せて……」。三位一体の神様が良く考えて、大事に人間をお造りくださったことがわかります。神様のかたちに、神様に似せて造られたのがわたしたちです。これは、わたしたちが神様のようになるということではありません。わたしたちは、特別に神様と関係を持つ

ことができるということです。わたしたちは、神様を知ることができます。わたしたちは神様とお祈りを通してお話ができます。そして、神様にお応えできるのです。そんなわたしたちに神様は、神様の造られたこの世界を守るように、大切にするようにという役目をくださいました。この役目がわたしたち一人ひとりに与えられています。これを守る時、神様は喜んでくださり、わたしたちは神様を喜ぶことができるのです。

〈祈りましょう〉

- 先生：神様、あなたは創造の第一日目、昼と夜を造られました。
- 子ども：神様、ありがとうございます。
- 先生：あなたは創造の第二日目、美しい青い海をわたしたちにくださいました。
- 子ども：神様、ありがとうございます。
- 先生：第三日目、あなたは、木も草も花もそして海も造られました。

- 子ども：神様、ありがとうございます。
- 先生：四日目、あなたは大きな太陽、月そして輝く星を造られました。
- 子ども：神様、ありがとうございます。
- 先生：五日目、神様は、鳥を空に飛ばせ、海には魚を泳がせて、祝福されました。
- 子ども：神様、ありがとうございます。
- 先生：六日目、あなたは、この世界にいろんな大きさ、いろんな形、いろんな色の動物で満たしました。
- 子ども：神様、ありがとうございます。
- 先生：同じ日に、人を造られ、そして愛してくださいました。そして休まれました。
- みんなで：わたしたちは、あなたを賛美し、あなたに感謝します。イエス様のみなによって祈ります。アーメン。



〈改革派信仰の確認のために〉

特に、「人の創造された目的」の理解のために、前もってハイデルベルク第6問、またウ小教理第10問を熟読してください。

〈関連聖句〉

※子どもたちと一緒に味わってください。

創世記9章6節

詩編8編

エフェソの信徒への手紙4章22～24節

コロサイの信徒への手紙3章5～10節

〈恵みを立体化するための視点の提示、例話〉

※子どもたちとの対話に用いてください。

人間は神のかたちに創造された「創造の冠」であり、被造物の支配と管理を委ねられた、尊厳と光栄ある存在だと、説教展開例において十分に教えられています。分級において補足する必要があるとすれば、子どもたちが単なる人間礼賛にとどまってしまうことがないように注意することでしょうか。

聖書においては、人間がたたえられることはありません。人間は「神のかたち」ではあっても、決して神と同じではない。偉大なる神の栄光と対比された、塵に過ぎない者、弱く貧しい者としての人間理解が徹底されています。「悪く、心のねじれた（ハイデル第6問）」罪人であるがゆえの、悲惨な人間の現実を直視する者であれば、誰でもそのような理解に辿り着かざるを得ないでしょう。

例えば、旧約の民が人間性の崩壊を経験したバビロン捕囚の破れという現実がありました。母親が子を煮炊きした（哀歌4:10）という凄惨な飢餓、

鬼畜となり枯れ木（同8節）となった人間に、罪の極まった姿が示されています。墮落による悲惨が極まった世界です。戦争、差別、環境破壊……。それは今でも私たちの内外に、子どもたちの内外に、変わることなく存在している惨めな現実です。

この罪人の挫折を徹底的に見つめぬいてこそ、聖書が語る「人間の尊厳」を、真に「神の愛の教え」として受け取ることができます。土の塵で造られた（創世記2:7）という人間のはかなさ・無力さを包みこむ、神の力と愛顧の圧倒への感動が生まれます。人間は弱く小さい者である。しかしその私たちが、あのエデンの園においては、ただ神の慈しみによって無限に尊厳ある存在として扱われていたのだと聖書は教えてくれます。私たちは本来、惨めなままでいい存在ではないのだ、と。

そしてキリストは、そんな尊厳ある人間を再創造するために、死んで甦ってくださいました。私たちは、もう痛ましい姿のままではいけない。古い罪人のままでいてはいけない。イエスを信じ従って、「神にかたどって造られた新しい人（エフェソ4:24）」を身に付けて生き始めよう！！

〈祈り〉

神様、弱く小さな私たちを、無限に価値ある「創造の冠」として愛してくださる、あなたの愛に感動します。私たちは、そんな素晴らしい者として創造されたことを、よく覚えさせてください。そして、そんな私たちの素晴らしさを取り戻してくださったイエス様のことを、強く信じて従う信仰をください。



〈ねらい〉

神様から人生を求められる光栄を喜ぶ。

〈展開例〉

①六日目の創造のあとに、神様は、この世界を極めて良い世界と言われた。つまり、めっちゃめっちゃイケテル世界。六日目に何が起こったのか？生き物の創造、そして、最後に人間が創造された。このことは、人間が特別な存在であることを教えてくれる。人間の何が特別なのか考えながら、聖書朗読（24～31節）。

Q. 人間はどんなところが特別だと思うか？

（全部に触れる時間はないので、今回は、人に使命が与えられている点に重点を置く）

②まず、人間に対するセリフの長さだけ見たって人間は特別。内容も特別。人間だけが「神様にかたどられている（特別に尊い存在）」。人間だけが「男と女に創造された（支えあって生きる存在）」。そして、今日注目したいのは、人間だけが使命とセットで創られたという点。人間は使命のために創られた。つまり人間には目的がある。バットでゴルフをするのは不自然。フライパンで野球をするのも不自然。どんなものも目的にあって活かされると一番輝く。では、人間の使命、目的とは何だろうか？

③それは生き物を支配すること（26節、28節）。「支配」という言葉は強制や暴力を連想させるイメージの悪い言葉かもしれないが、神様が命じられる「支配」はそんなじゃない。言い換えるなら「統治」すること。「統治」というのは「統括（バラバラのものをひとつにまとめること）」して「治める（意志や命令に相手を従えて、相手を整えてあるべき状態をつくり維持すること）」こと。あるべき状態とは神様に祝福されて、生命が世界中に満ち溢れる状態。この状態を維

持するために人は創られた。人間自身も神様から祝福され続け世界中に満ち溢れるために創られた。神様の治める人間が世界を治めることによって、世界全体が神様に治められる世界。そうやって繁栄していく世界が、神様が創り上げた極めて良いめっちゃめっちゃイケテル世界。

Q. みんなはどうか？ 世界に君が支配されるという逆転が起きてないか？ 神様や自分以外の生命のためでなく、自分だけを喜ばすために生きていないか？ そんな将来を考えてはいないか？

④人間にとって世界とは支配されてしまうものではなく、こちらから支配するもの。しかし、いい気になって自分勝手にしたり、壊したりするのでもない。ありがたがって尊ぶもの。これが君のいる世界、そして君の人生。

⑤だが、そうは言っても、私たちには世界に支配されそうになる弱さがある。創造されたときには無かった、神様の支配に逆らおうとする「罪」が私たちの人生をじゃましようとする。しかし、イエスさまはこの罪をすべて引き取ってくださった。イエス様が罪の身代わりとなられたのは、君の人生が神様に支配されて世界を治める人生となるため。死んだ後のことだけのために、イエス様は君の罪を請け負ったのではない。イエス様は、君の人生が神様のもので輝きを取り戻すようつくり変えてくださる。イエスさまは君の人生が輝くことを楽しみにしている。みんなの進む人生が輝くものとなるよう祈りたい。

〈祈り〉

私たちの人生が輝くことを求めておられます神様。弱い私たちがあなた以外のものに支配されることなく、あなたに従って人生を治めることができるようにしてください。アーメン。

神は人間の創造にあたって男女を一組としてつくられた(1章27節)。これは神の創造の祝福に与る人間の基本的なかたちを表す。しかし、1章の記述とは別に、2章では、人は初めから二人だったのではなく、神が二人にされたと知らされる。エデンの園で、初めに人は独りきりであり、その自覚すらなかったであろう。大地の基が据えられ、天には星が輝き、緑が生い茂る、新しい命が輝き満ちている世界に、神のかたちを宿した人間がひとり立ち上がった時、神はそこに、ある欠けを認めている。そして、「人が独りているのはよくない」との発言がある(2章18節)。そこで神は行動を起こし、人間のパートナーとして地上の生き物を造るが、その中に人の求める伴侶は見出されない。すると、神は人を深い眠りに落とされ、人の身体からもう一体の人をお造りになり、最初の人のところへ連れて来られた。その時、人が叫んだ言葉が「ついに、これこそ、わたしの骨の骨、わたしの肉の肉」である。「これぞ」と声を挙げる興奮の中、人は真の伴侶を見出す。人間が心から求めたのは人間である。人はこのように二人になることにより、互いに愛する関係に生きる者として神の前に立つ。

人間の創造にまつわるこの記述は、人類の原初を語ると同時に、結婚という出来事を通して知られる神の御業を教えている。人が独りているということは、何も独身でいることを意味しない。創造されたときの人間は、文字通り一人きりだった。ただ、その後、人類が世界に増え広がって人は孤独にはなりえなくなったかといえば、そうではない。結婚をしても、家族があっても、友人に取り囲まれているようであっても、人は独りきりで生きていることがある。愛を生み出すには相手が必要だが、その相手を見出すことのできないところに人の孤独な姿がある。人がそのようなになってしまったのは、人が罪を犯して神の御前から失われてしまったからだ、と聖書は語る。

人が独りているのはよくない—神はご自身に向かってそう語られ、我々はここで一人きりである人をご覧になる神の心を告げられる。続いて神が行動を起こされたとき、一人は二人になる。それが押し付けでないことは、初めに動物を連れて来られた時も、神は人がどう受け取るかをご覧になっていたことで分かる。二人を無理やり結びつけるのではなく、人の喜びとなる相手を造るために神は働かれる。伴侶を得るということは、ある人がただ近くに場所を占めるということではない。そこで互いの心が開かれ、結びつくことが大切である。そこに「出会い」がなくてはならない。動物ではなく、人間が造られて連れて来られた時、そこには心踊るような出会いがもたらされた。人を造られた神は、人が愛する者となるために、出会いを導いてくださるお方である。

「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」(24節)。神に導かれた出会いにより、互いを自分自身のように愛することを学びながら、結婚した二人は心も身体も一つにされる。結婚には神が人間をお造りになった喜びが込められている。

創世記はこの後、結婚の祝福を与えられた人間がそのままの愛を保って幸せになった、とは記していない。むしろ、二人になった人間が神の御前に罪人となったとき、互いの愛は直ぐにも傷ついてしまう。人が歴史の現実にあって経験する人と人との結びつきは、互いの利益を巡る駆け引きの中で脆さをさらけ出す。その現実の中で私たちが聴くべきは、天地創造の時から今日この時に至るまで変わらない神の御旨と御業である。教会で挙げられる結婚式では、人が罪に敗れ傷ついていく世の中で、人と人が出会い、互いの愛に生きることを誓う、新しい出発を造りつづけておられる神の御業が目撃される。神は出会いを創造し、その原初の出来事を通して愛に生きよと人に呼びかけておられる。(牧野信成)

テキスト 創世記 2章18～25節
カテキズム 子どもカテキズム 問15

〔単元のねらい〕

人間の創造の中でも、とくに男と女の創造ということに絞って学ぶ。創世記2章の結婚が神の制度であることを教える御言葉を取り上げるが、結婚ではなく、「人が独りでいるのは良くない」がこの単元の中心となる。神が交わりのうちに生きるお方であるように、人も交わりのうちに生きる者とされている。神との交わりに支えられて、人と人との交わりに生きる。そのあらわれの一つが男と女という違いを持つ存在として造られたことである。互いの違いを尊び、共に生きることへと招きたい。

「男と女、互いに助ける者として」

創世記には、天地創造のことが二回、出て来ます。創世記1章から2章のはじめまでと、創世記2章の4節から25節までです。これは、天地創造が二回行われたということではありません。ていねいに読むと分かります。創世記1章は、人間が造られたことも含まれていますが、天地創造のみわざの全体が教えられています。天と地を秩序正しく造られた、その全体です。2章4節からは、人間がどのようなものとして造られたのか。人間の創造ということが中心になっています。人間の創造ということがクローズアップされて、男の人と女の人、そして、その結婚ということも出て来ます。今日は、とくに、人間が男の人と女の人に造られたということを学びましょう。

創世記2章18節からです。主なる神さまが、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を人のところに持ってきて、人がそれをどう呼ぶか、御覧になりました。そして、人が呼ぶ名前がその生き物の名前になることを良しとされました。人が呼ぶと、それが生き物の名前になる。これは、その生き物を人間にゆだねておられる、生き物を支配することを人間におまかせになっておられるということです。これは、先週学びました。この天と地の生き物は、わたしたち人間にゆだねられています。大きな光栄と責任が人間にあります。

そのところで、「人はあらゆる家畜、空の鳥、

野のあらゆる獣に名をつけたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった」(20)とあります。神さまが人のところに野の獣や鳥を持ってこられたのは、人に合う助ける者を見つけるためでした。けれども、見つかりませんでした。

皆さんの中には、犬や猫を飼っている人がいるでしょう。あるいは、金魚やカメを飼っている、ハムスターを飼っているという人もいるかもしれません。生き物を飼うというのは、とても大切なことです。生き物をとおして、命の大切さを知ることができます。食べ物を必ずあげなければなりませんから、責任感を養うこともできます。そして、心が安らぎ、気持ちが落ち着くということもあります。わたしも、子どもの頃、家で犬を飼っていました。お友だちのように、犬と一緒に遊びました。犬や猫は、ただペットとして飼うだけでなく、お友だちや家族の一員と言えるほど、親しくなることができます。そのことによっても、人間だけではない、多くの生き物の大切さを教えられます。人間だけではない、神さまが造られたあらゆる生き物の大切さを知ってください。

けれども、そのところで、聖書は言っています。「自分に合う助ける者は見つけることができなかった」。どれほど犬や猫の生き物と仲良くなっても、どれほど一緒に生活して、親しくなって、

家族の一員と呼ぶほどになっても、決して「自分に合う助ける者」にはなれません。ですから、人間以外の生き物にはなく、人間に、自分に合う助ける者を求めなければなりません。

先週学んだ創世記1章27節にありました。「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」。人は神さまにかたどって造られました。だから、です。人は、神さまに似せて造られています。ですから、神さまが霊的なお方であるように、人も霊的な存在です。人には、肉の命があるだけでなく、魂の命があります。人は、自分という存在を知り、頭の中で思いめぐらし、言葉でそれを表現することができます。神さまと向かい合って、神さまと共に、神さまとの交わりの中で生きる者として造られました。人は魂で生きるのです。そのことが、人とほかの生き物とを決定的に違うものとしています。そのことを教えるために、神さまは、このとき、人に、あらゆる獣と空の鳥を持ってこられました。ほかの生き物の中に、自分に合う助ける者を見つけることはできない、そのことをここで教えてくださったのです。

神さまが、ご自身にかたどって人を造るときに、男の人と女の人に造られました。これは大切です。わたしたちは、神さまと同じように霊的な存在であり、魂の交わりの中で生きる存在です。思いめぐらしていることを言葉で言い表し、互いに支え、助け合い、命をはぐくみ合って生きていきます。神さまとの交わりに支えられて、人と人との交わりに生きるのです。人が、男の人と女の人という、それぞれ違う仕方で、けれども、違いはあっても人なのです、どちらも魂の交わりの中で生きる存在です。互いの違いを尊びながら、魂をはぐくみ合って生きていくことができます。これは、神のかたちの具体的なあらわれのひとつです。

神さまは、人を深い眠りに落として、人からあ

ばら骨の一部を抜き取り、そのあばら骨で女の人を造り上げられました。とても不思議なことですが、こうして女の人造り上げられて、そしてはじめて男の人造り上げられました。

「あばら骨の一部で」というのは、あばら骨は肉体の心臓や肺といった大切な部分を守っている骨です。大切な骨なのです。あるいは、胸を指さして心がある場所と言いますね。科学で証明されていることではありませんが、心のある場所を守る骨、ということでもあるでしょう。そのような大切な骨で造られたのであって、男の人にとって女の方は、それほど大切な存在であるということです。そして、人が独りているとは、その大切な部分が欠けた状態のようなものである、と神さまが教えてくださっているのでしょうか。いずれにせよ、人が「ついにこれこそ／わたしの骨の骨／わたしの肉の肉」(23)と呼ぶほどに、お互いにとって大切な存在なのです。こうして、神さまは、人に合う助ける者をお与えくださいました。

男の人と女の人には違いがありますが、どちらも神さまが大切に造ってくださいました。神さまにかたどり、神さまに似せて、男の人と女の人に造られました。神さまとの交わりに支えられて、わたしたちは、この男の人と女の人がいる社会の中で、共に生きていくのです。もちろん、男の人どうしも、女の人どうしも、互いに励まし合い、支え合って生きていきます。

わたしたちは、罪のため、残念ながら、人を傷つけてしまう、人に傷つけられる、ということを経験します。人に裏切られることもあります。そんなときに、人の声を聞きたくなくなることがあるかもしれません。交わりから離れたくなるかもしれません。けれども、人を助けることができるのは、人しかいないのです。神さまを恐れ、人と人との交わりを喜んで、主にある良い交わりを建て上げて歩いていきましょう。(望月 信)

[今週の暗唱聖句] 創世記 2章18節より

人が独りているのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。

〈ねらい〉

神さまは人を男と女に造られたこと、自分と異なる人を受け入れ、お互いに大切にしていくことを伝えたい。

〈さんび〉

いのちのこば社『ブレイズワールド』、3『このままの姿で』

〈おはなし展開例〉

Kちゃんは、男の子？ 女の子？ (男の子)。Hちゃんは男の子？ 女の子？ (女の子)。そうだね。神さまが人を造られたとき、全員が男の子になるようには造られなかったんだね。男の子と女の子という違う人間を造られたんだよね。こうするのがいいって神さまがお考えになられたからだね。

男の子と女の子は色んなところが違うよね。体のしくみが違う。着るものも少し違うね。好きな遊びも違ったりするよね。男の子と女の子が違うのはね、神様が、男の子と女の子がお互いに助け合って生きていってほしいと思われたからなんだ。お互いに大切に、困ったときに助けてあげてほしいって思っておられるんだよ。

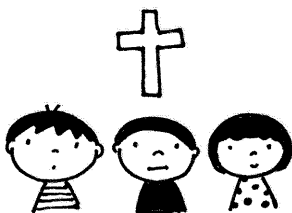
みんなは、大人になったら、好きな人ができて、結婚すると思います。結婚は、一人の男の人と一

人の女の子が、お互いに助け合っていっしょに生きていくために、神さまがつくられた決まりなんです。みんながこれから、好きな男の子、好きな女の子ができるかもしれないけど、それは、大きくなってから結婚するための準備なんです。そうして、大人になるまでに、色々な男の子、女の子とお友だちになって、いつか、神さまがみんなにぴったりの相手と出会わせてくださるんだよ。

お互いに違うと、時々いっしょにいることが難しいよね。「あの子いじわるするから嫌い!」「あの子いっつも変な呼び方するから嫌」って思うことがあるかもしれない。でも、神さまは、お互いの良いところをみつけて、仲良くしましょう。いっしょに生きていってほしいと思っておられます。神さまが与えてくださった、男の子のお友だちも、女の子のお友だちも、大切に、これからも仲良くしていきましょうね。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。男の子とも女の子とも仲良くすることができますように。他のお友だちの良いところを見つけて助け合って、色々な子といっしょに生きていくことができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

神様との交わり、家族やお友だちとの交わりを感謝しましょう。

〈はじめに〉

GWが終わり、クラスの子どもたちはみな、元気な顔でお部屋に入ってきたでしょうか？新しい学年になって、これから夏休みまで学校生活が続きます。みんなが守られますように、日曜学校に続けてこられるよう神様に助けを祈りましょう。また、子どもたちどうしも、お互いに励ましあえるような関係をつくあげましょう。

〈御言葉に聞きましょう〉

- ①神様は最初の人、アダムを造りました。アダムは、どこに住みましたか？
- ②エデンの園に住んで、このお庭を守るお仕事を与えられたアダムさんを見て、神様は、何を思われましたか。
- ③神様はアダムを助ける人をお造りになりました。どういう方法で、造られましたか？

〈展開例〉

神様はエデンの園と呼ばれる、美しい庭にアダムを連れてこられました。どんな美しさだったでしょう。(色、におい、風を想像しましょう)。

神様が造られたその場所に人を住まわせてくださるほど、神様は人を大事に思ってくださいまし

た。そのアダムに神様はエデンの園を守るといふ大切なお仕事を与えられました。その中で、神様はひとつ、してはいけないことをお命じになりました。「園の真ん中にある木の実だけは食べてはいけない」という神様とアダムさんとのお約束です。

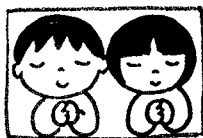
また、アダムさんは一人でお仕事はきつと忙しかったでしょう。そんなアダムさんに神様はアダムさんを助ける人をお造りくださいました。神様は、人を男と女に造られ、一人ぼっちにはなさらなかったんですね。忙しいお仕事もお互いにお手伝いしあうように、造られたんですね。話し合いながら、相談しあいながら、笑いあいながら、心配しあいながら、毎日を過ごしたでしょう。

神様はわたしたちを愛してくださっています。わたしたちの周りにはどんな人がいますか？家族やお友だち、学校の先生、教会の先生、教会のおばさんや、おじさん、教会のお友だち……。わたしたちは一人ぼっちでないことを神様に感謝しましょう。

わたしたち一人ひとりも、家族にとって、お友だちにとって、そして教会にとって、とっても大切な存在です。このクラスなかで、皆さんは大切な存在です。お互いを大切にしましょう。困ったときは助け合いましょう。なぜならそういう風に人を神様はおつくりくださったからです。

〈祈りましょう〉

神様、わたしたちを愛してくださいありがとうございます。どうか、わたしたちが、自分のことだけでなく、困っている人、悲しんでいる人を助け、慰める子どもとして、お用いください。



〈改革派信仰の確認のために〉

特に、聖書の信仰は個人主義的なものではなく、契約共同体への参与を伴うものであることの確認のために、前もってハイデルベルク第55問や、ウ小教理第94問を理解しておくといいかもしれません。

〈関連聖句〉

※子どもたちと一緒に味わってください。

詩編133編1節

マタイによる福音書19章3～6節

ヨハネによる福音書13章34、35節

使徒言行録2章43～47節

〈恵みを立体化するための視点の提示、例話〉

※子どもたちとの対話に用いてください。

人間は孤独に生きる者としてではなく、交わりの中で生きる共同体的存在として創造されたのだと、説教展開例に十分に教えられています。

信仰生活においても同様です。聖書の示す信仰生活は、基本的に共同体的です。他の信者から孤立した独りぼっちな霊的隠者について言及しません（預言者らの孤独という例外あり）。私たちが共に集まり、仲間に加わり、共に建てあげられ（エフェソ2:22）、共に受け継ぎ（エフェソ3:6）、共に組み合わせられ（エフェソ4:16）、共に結び合い（同）、共に引き上げられる（一テサロニケ4:17）と言われています。使徒言行録にも、生活や食事を共にし、一つになって祈る教会の姿があります。

契約の子にとって、教会の交わりには煩わしさや痛みも多くあることでしょう。幼い時から、親以外の多くの大人たちとの関わりの中で生きるこ

との息苦しさを想像します。でも私たちは、共同体を離れては信仰の成長も喜びも味わえないものです。とりわけ、子どもたちの信仰の成長のためには、共に祈る仲間が必要です（各種キャンプなどの必要!）。

「文明は、人が一人で生きていくことを可能にする」と言った人がいるそうです。24時間営業のコンビニがどこにでもあります。さらにいえば、オンラインショッピングを利用すれば、誰にも会わずに欲しいものが手に入る時代です。かつては、やむを得ず母親が働きに出るためにかまうことのできない児童は、「母親が帰るまで町でぶらついていろ」と指示されたと聞きます。困ったことがあれば誰かが助けてくれる、地域のコミュニティーがあったのです。それと比べて現代は……。誰も会話することもなく、一人で延々とテレビゲームに向かっている子どもたちの姿を想像します。そんなことが確かに「可能」にはなりませんが、それで人間が幸せになったわけではありません。今こそ「人が独りでいるのは良くない」との神の言葉が、語られることを必要としています。

〈祈り〉

神様、あなたは私たちが独りでいるのはよくないと教えてくださいました。私たちは、傷つくのを恐れて、人と関わることを面倒に思うものです。友だちと仲良くやれずに、自分のことばかり考えてしまうものです。そんな私たちを赦してください。そして、交わりを作り出すことのできる愛の力を与えてください。なによりも、あなたが共にいてくださって、私たちが独りでないことを教えてください。



〈ねらい〉

孤独を埋めてくださる神様の御配慮を喜ぶ。

〈展開例〉

Q. いきなり暗い質問だが、みんなは「自分は独りぼっちだ」と感じるときがあるか？「遊びに誘われないとき」「趣味があわないとき」「グループに入れないとき」「自分の考えを理解してもらえないとき」……。

①人は「独りぼっち」だと寂しくなる。特に中学生という時期は、自分の本当のトモダチを探したり、仲間を大切にしたりする時期。もし「自分は独りでもかまわない」と思っているなら、それこそ寂しいこと。なぜなら、人は「独りぼっち」で生きようには創られなかったから。

②聖書朗読（18節）。神様は「人が独りでいるのは良くない」と言われる。人は独りじゃ、やっていけない。もし、人間が一人だけで良いなら、神様は人間を一人しか創らなかつたはず。でも、神様の目に、人が一人でいるのは良くないこととして映った。

Q. ひとが「独りぼっち」だと何が良くないのだろうか？「一人だつつまんない」「生きることを全部、自分でしなくちゃいけない」「自分のことしか考えられなくなる」……。いろいろあると思うが、一番は「誰かを大切にすることも、誰かに大切にされることもない」ということ。

③じゃあ人にはどんな相手が相応しいのだろう。聖書朗読（19節～20節）。「自分に合う助ける者」は動物の中にはいなかった。私たちも「独りの自分は嫌だ！」と感じ、いろいろなモノで寂しさを埋めようとする。現代は動物以外にもいろいろなモノが溢れている。人は孤独な時間を何かで紛らわそうとする。でも、どんなもので寂

しさを埋めたとしても、心の深いところにある「大切にされたい、大切にしたい」という気持ちは満たされない。「一人ぼっち」を感じることはできないことは不幸なこと。人間には自分を助ける相手、自分が助ける相手が必要だということを感じ取る、「一人ぼっち」の時間も必要。

④聖書朗読（21節～25節）。共に生きる相手と出会った、人の感激が記されている。人間を本当に大切な相手として助けることができるのは人間だけだった（神様は別として）。人間にしかないものとは何か？それは、神様と通じ合うように創られた心。人間は自分を大切にしてくださいと神様と心通わせる。その人間だけが、自分以外の「誰か」を本当に大切にできる。

⑤しかし、上手いいかない現実がある。それは「罪」の存在。人が神様を大切にしなくなったそのときから、人間の「誰かを大切にする心」が歪んでしまった。でも、イエス様は君のこの歪みをなおそうとしてください。君のことを死ぬほど大切にし、大切にされる喜びを教えてください。そうやって「大切に合って生きる喜び」を君の人生につくり上げてください。君は人から助けられる存在。そして君は人を助ける存在。みんなの一週間が、イエス様を見つめて、誰かに大切にされ、誰かを大切にす一週間となるように祈りたい。

〈祈り〉

私たちの孤独を悲しみ、私たちに仲間を用意して、出会いを与えてくださる神様。ありがとうございます。与えられた仲間を心から大切に思えるよう、罪で歪んでいるこの心を整えてください。そして、神様から大切にされていると感じ、誰かに大切にされ、誰かを大切に出来る一週間となりますように。アーメン。

テキスト 創世記 3章1～13節

3章では、二人となり、夫婦となった人間が神に背く。蛇と女との対話を通して人が罪を犯す際の心の動きが丁寧に描き出される。発端となる蛇の誘惑は知恵の囁きを意味する。蛇は巧妙に神の言葉を捻じ曲げて問いかける。「園のどの木からも食べてはいけない」とは神は言われていない。むしろ逆で、「どの木からも食べて良い」(16節)と言い、ただ一本の木から採って食べることを禁じられた。蛇の誘導は神の言葉に疑いを抱かせることを狙いとする。問いかけに対する女の答えには、その畏にはまった人間の心理が映し出されており、女は「触れてはいけない」という、元々命じられてはいいない禁止事項を加えている。この誇張には、「いけない」と命ずる神の言葉に対する不満が表示されているとみることができよう。禁止命令は「死んではいけない」という、人の生命を保護するために与えられた(神の律法はイスラエルを神の民として生かすための具体的な指針であったことを思い起こさされたい)。しかし否定の言葉が不服と感じられた時、行動へはあと一歩となる。

蛇が女の目を木の実に向けさせると、それは魅力的で美しく、賢さを誘うものであった(6節、ヨハネの手紙一2章15節参照)。この魅力の前に「食べてはならない。きっと死ぬ」(2章17節)との神の言葉は消し飛んでしまう。むしろ「死なない」との蛇の言葉が欲望を後押しし、ついに人は禁じられた木の実に手を伸ばす。ここから神の言葉は忘れられ、モノと人間相互の密接な支配関係が始まる。

こうして人は「善悪を見分ける」ようになったが、神が世界を創造された時点でまだ悪は存在しない。それが「見分ける」ことができるようになり、善と悪との区分・対立が生じる。神は初めに人間を良いものに創造されたが、知識の木の実を食べることで悪を内に持つようになった。これが

聖書の記すところの「原罪」である。人は神に対して生きる存在であり、神によって豊かに生きる命を養われているのだが、サタンの囁きによって神を疑い、目の欲に促されて、神の警告に反して死を選択する。これは過去の話ではなく、神に背き、悪への誘惑に弱く、神のごとき知識を目指して突進する今日の我々を映す鏡である。

女による違反は続く男の反応と一連の出来事であり、罪を犯した結果として、人間は裸であることを恥じ、神の気配から逃れようと身を隠す。さらに神の追及を逃れようとした男は、罪の責任を女に転嫁し、さらに「あなたが与えた」といって神を罪の作者とする。ここに現れたのは、神に祝福されたはずの人間同士の絆が、罪の結果、脆くも崩れ去った模様である。人はもはや、神が与えたもう伴侶をも信頼することができない。

この墮罪の記事は罪ある人間の原初の物語であり、今現に神の御前に生きるすべての人の原像を映している。人間が違反によって手に入れた、神に等しい賢さは決定的な魅力である。しかし、神に等しいのであれば保護は必要ない。彼らは楽園を出なければならず、苦しみの多い世界に生きるものとなる。罪を知ることの大切さは、人間のこの本来的な暗さを知ることによって、明るい方向へと具体的に踏み出すことができる点にある。他方、罪を知らないことの問題は、自分を過信して、今気が付いていない問題をさらに取り返しへの付かない方向に悪化させてしまうことにある。罪人という、聖書が示すところの否定的な人間像は一般的には受け入れがたいものであろう。しかし、そこからしか始まらない、神に造られた人間の命の在り方がある。また、自分の罪を認めるということは、同時に、隣人の罪をも知り、私たちの暮らすこの社会や世界の罪を自覚することへと広がる。神の救いはそこから現実的に語り得るものとなる。(牧野信成)

テキスト 創世記 3章1～13節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問16, 17、ウェストミンスター小教理 問13～19

〔単元のねらい〕

主によって最初に極めて良く造られた人間でありながら、今、私たちは苦しみと死を避けてとおることができなくなっています。それは、最初にアダムとエバがサタンに誘惑され、罪を犯したが故です。子供たちに語ろうとする時、「最初の罪があるから、私たちも罪人だ」と語っても子供たちは理解することは難しいでしょうし、物語として記憶に留めておくだけでも不十分だと言わなければなりません。むしろ、ここに記されている最初の罪こそが、私たちが持っている罪の原形であり、ここに記されている罪こそが、私たち自身の姿を語っていることを共に覚えましょう。しかし、「私たちは罪人だ」とばかり意識させるのではなく、同時にイエス・キリストの十字架による神の救いが約束されていることを伝えましょう。

「つい罪を犯してしまった！」

神さまは人間をととてもすばらしくお造りくださいました。そして人は生きるようになったのです。最初の人、アダムさんは、神さまに似せて、神さまにかたどられて創造されました。それは、罪を犯すことなく、正しく生きることができる状態でした。罪を犯さないのだから、死ぬことも考えられませんでした。そのため、最初の人アダムさんとエバさんは、エデンの園というすばらしい場所で、神さまに愛され、またふたりが互いに愛し合っ、とても幸せでした。

神さまに似せて、神さまにかたどられて創造された人の幸せは、神さまと共にあり、神さまとの交わりに生きることです。食べるために必要なものは、園の中にすべてあり、自由に選んで食べることができたのです。何一つ不自由のない、苦しみのない生活をするのができたのです。

主なる神さまは、ふたりにただ一つの約束を与えられました。それはエデンの園での生活よりもっとすばらしい、天国での幸せで喜びの生活を準備して下さっていたからです。その約束とは、「善悪の知識の木からは決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」(2:17)ということです。ふたりにとっては十分に守ることができる約束でした。神さまは、ふたりが神さまの御言葉

に従うかどうかを確かめられたのです。

そこにサタンが蛇の姿をして現れます。サタンは、人を神さまから引き離そうと、人を誘惑します。蛇は最初、女に言います。「園のどの木からも食べてはならない、などと神は言われたのか」(3:1)。女は蛇に答えます。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました」(3:2～3)。

しかし、蛇は女に「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存知なのだ」(3:4～5)と語りました。そのため、女は、その木がいかにもおいしそうで、目を引きつけ、賢くなるように思ったので、実を食べ、男にも渡しました。

ここに罪の誘惑があります。誘惑とは、「食べる」と死ぬと言われていたのに、「決して死なない」と約束を変更させるのです。誘惑は、罪を犯すことが非常に素晴らしいことのように見せるのです。最初の約束は、神さま以外に変更することなどできないのに、目の前にある木の実が非常に魅力的ですばらしいもののように見えるため、蛇に

言われるままに、自分の判断で、神さまの約束を変更し、これ位大丈夫だと思いこみ、罪を犯してしまったのです。

みんなも経験がありませんか。お友だちの家に遊びに行く時に、お父さん・お母さん・家族に「今日は5時に帰ってきなさい」と言われ、「はい、5時には帰るから。行ってきます」と言い、遊びに行きます。でも帰り際に、お友だちから「もうちょっといいでしょ」と言われ、5時半や6時に帰ってしまい、怒られてしまったということ。これが罪の誘惑です。家族の人との約束は守らなければなりませんよね。しかし遊ぶことが楽しくて、「少しくらい」と思ってしまふところに誘惑があるのです。約束を忘れ、自分で約束を変更してしまうことこそが罪です。それは自分が神さまとなっているのです。

アダムさんとエバさんが、神さまとの約束を破り、木の実を食べてしまったことこそが、罪です。彼らはその結果、神さまが最初に約束されたとおり、死ぬこととなります。それもアダムとエバから生まれたすべての人、つまり私たちも、死ぬこととなったのです。「なんで私たちも」と思ってしまふますが、約束を守り、罪を犯さないということは、それだけ重要なのです。

その後、主なる神さまがアダムさんとエバさんの所に来た時、二人はどうしたのでしょうか？ 恐ろしくなって隠れてしまうのです。これ位なら、

誰にも見つからないだろうと思って行うことでも、内心はドキドキです。しかし神さまは、そのすべてのことをご存じなのです。私たちはどれだけ小さな嘘であっても、神さまの御前には隠すことはできません。だからこそ、私たちは、アダムさんとエバさんから生まれた子孫であるというだけでなく、私たち自身がこれ位大丈夫だと思って行ってしまう小さな罪の故に、神さまによって罪に定められ、死ぬことを免れることができなくなっているのです。だから、私たちは誰も神さまの御前で、「自分は悪いことはしていない」とは言えないのです。

しかし神さまは、私たちのすべてをご存じであり、「あなたは罪を犯し、悪いことをしましたね」と怒られるばかりのお方ではありません。それでもなお、神さまは私たちを愛してくださっています。そして「あなたの罪のために、イエスさまが十字架にお架かりくださったのですよ。だからあなたは罪に定められることはありません」とお語りくださっているのです。

私たちは、みんな、アダムさんやエバさんのように、神さまとの約束を守ることはできず、罪を犯してしまいます。それでもなお、神さまは、その罪を認め、イエスさまを信じる人に救いを約束してくださっているのです。神さまがお与えくださった恵みに感謝しましょう。（辻 幸宏）

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 6章23節

罪が支払う報酬は死です。

しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。



〈ねらい〉

わたしたち人間は罪をもって生まれてきたこと、自分の力では神さまとの関係を回復できないことを知る。

〈さんび〉

いのちのことば社『ブレイズワールド』、13「両手いっぱい愛」

〈すいせんとしよ〉

日本聖書協会・みんなの聖書絵本シリーズ1『せかいのはじまり』

〈おはなし展開例〉

世界のはじめのお話です。エデンの園という場所に、アダムさんという男の人と、エバさんという女の人がありました。アダムさんとエバさんは、神さまから愛されていました。そして、お互いに愛し合うとてもいい関係でした。神さまは、アダムさんにあるお約束をしました。神さまは、「このエデンの園の木の実を食べてもいいですよ。でも善悪の知識の木の実だけは食べてはいけません。食べると死んでしまうのです」と言われました。

さて、アダムさんとエバさんは、神さまのお約束を守ったでしょうか……？ ある日、エバさんのところにへびがやって来て言いました。「神さまは、ここにあるどの木からも食べてはダメだなんて言ったのかい？」。エバさんは答えました。「いいえ。わたしたちは、この園にある木の実はずべて食べて良いといわれています。でも、園の真ん

中にある木の実だけは食べてはダメ。触ってもダメ。死んではいけないからと言われていました」。ところが、へびはエバさんにこう言いました。「その実を食べても死ぬことはないよ。食べると神さまのように何でも知ることができるようになるんだ」。そう言われると、エバさんは食べたくなくて、パクリと食べてしまいました。そしてアダムさんにも渡してアダムさんも食べてしまいました。

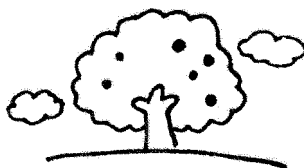
アダムさんとエバさんは、神さまのお約束を守れませんでした。その時から、神さまと人間の間には壁ができてしまいました。この壁は、どんなに力の強い人も壊すことのできない壁です。どんなにがんばっても、わたしたちの力では、神様との関係をもとどおりにすることはできません。

神さまとの壁がない人は誰もいません。産まれたばかりの赤ちゃんも、ここにいるすべてのお友だちも、お父さんやお母さんも、先生たちも、みんな神さまとの壁があります。みんな罪人といいます。

そして、そのみんなのために、イエスさまがいるのです。イエスさまにしかわたしたちと神さまとの関係をもとどおりにすることができる人はいないのです。イエスさまありがとう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。わたしたちにはどうしようもないわたしたちを、神さまは愛してくださって、神さまの子どもにしてくださったことをありがとうございます。聖書の言葉をよく聞いて、守れる子どもになれますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

罪について、その悲惨さ、悲しさを知ります。

〈はじめに〉

創世記1章から2章にかけて、神様の偉大さ、すばらしさ、人を造ってくださったこと、神様ご自身が喜ばれたことを学びました。この世界は、神様が造られました。そして今もその神様がこの世界を、わたしたち守ってくださっていることをまず、確認しましょう。今日から、内容ががらりと変わります。子どもたちの心が静かに御言葉に向けられるよう祈りましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ① 女の人に話しかけてきたのは、誰ですか？
- ② 神様は、園の真ん中にある木の実を食べはけないといわれたのですが、蛇は、女の人をそそのかしました。女の方は、神様との約束を守りましたか、破りましたか？
- ③ アダムさんは神様の言うことを守りましたか？
- ④ アダムさんは、誰に薦められて、木の実を食べてしまいましたか？

〈展開例〉

この世界は神様が造られました。人が住むことが出来るために、順序良く造られたほど、神様は特別に人を愛してくださっています。神様と人は仲良しでした。神様の言うことを人は大事に、守

る存在でした。

創世記3章から、その関係が変わってしまいます。蛇にそそのかされて、エバさんは、神様が食べてはいけないという木の実を食べてしまいます。それだけではなくて、木の実を食べることをアダムさんにも勧めてしまいます。残念なことにアダムさんも神様とのお約束を破って、エバさん言うことに従ってしまいました。これを見た神様はどんな気持ちだったでしょう。どんな悲しみだったでしょう。せっかく大事に大事にしていたアダムさんとエバさんが、神様の言うことではなく、蛇の言うことに従ってしまったのです。神様との関係が壊れてしまいました。これを「罪」といいます。これが、神様が造られた美しい世界に入ってきた一番最初の「罪」でした。この罪は神様とアダムさんたちの関係を壊し、アダムさんたちの生活もがらりと変えてしまいました。

わたしたちはどうでしょう。神様とのお約束を守っているでしょうか。破ることのほうが多いですね。アダムさんやエバさんがお約束を破った時に神様が深く悲しまれたように、わたしたちが神様に従わないとき、神様は悲しまれるお方です。でも神様はそんなわたしたちのためにイエス様をお与えくださって、わたしたちが「神様ごめんなさい」と言うとき、必ず赦してくださいませ。礼拝の中で、お祈りの中で、神様ごめんなさいといましよう。

〈祈りましょう〉

神様に従うことが出来ないわたしたちをお赦してください。いつも神様にごめんなさいと言える、すなおな心をお与えください。



〈改革派信仰の確認のために〉

前もってハイデルベルク第2～11問や、ウ小教理第13～19問をよく読み、罪とは律法への違反であるという契約神学における基本認識と、原罪を抱える人類の悲惨を確認してください。

〈関連聖句〉

※子どもたちと一緒に味わってください。

ローマの信徒への手紙5章12～14節

詩編14編1～3節

〈恵みを立体化するための視点の提示、例話〉

※子どもたちとの対話に用いてください。

罪とは、神の律法に背くことであると、カテキズムには教えられています。神の律法、それはすなわち、人が幸いな道を歩むことができるようにと神が与えてくださった恵みの教え・道しるべです。「永遠の命を受け取りなさい」という招きも、そう考えるならば、神が与えてくださる命令・律法です。そんな神の教えを聞こうとせずに、それと反対の道を行こうとするとところに罪の問題があります。

では、なぜ人は神の律法に背くのでしょうか。子どもたちと一緒に、一步踏み込んで考えていただきたいのです。創世記のテキストからは、神様に対する「信頼の欠如」と、「神への疑い」という大きな問題が浮かび上がってくるようです。それを誘ったのは、「死ぬことはないよ」「神様はあなたが賢くなることを恐れているんだよ」という蛇の言葉です。しかしより根本的な問題は、「神様の命令にしたがってはいは、本当の幸せを手に入れることはできないのではないかと？ 命令を破ってこの木の実を食べれば、もっとすばらしい未来があるのではないかと？」という内なる声を抑えられない、人間の傲慢にあります。神に生を委

ねることを拒否し、自力で立とうとする、すなわち、自分を神よりも上に置くという自己神化の問題がここに 있습니다。それは、神を信頼しきれない、私たちの弱さの問題と、実は表裏一体なのです。

キリスト者が圧倒的少数の日本社会で、神を信頼し続けることは至難の業です。「神様の言うことなんかまじめに聞いて、君は頭がおかしいんじゃないの？」という批判を、子どもたちは必ずや一度は受けるでしょう。そんな外なる声に心乱されて、「本当に神様の教えに生きることが幸いなのだろうか？ 聖書に縛られないで、自分の考えで生きるほうが、よりよい未来が開かれるのではないだろうか？」という内なる声が大きくなっている子もいるかもしれません。人間はだれも、そうやって神を疑い、神から離れていくのです。

ではその結果はどうなるのか。神を捨てた近代以降の、今日に至る世界の混迷と向き合えば、「墮落による腐敗と悲惨」はまさに本当のことであるということは、子どもたちの目にも明らかでしょう。その道は、滅びに至る道なのです。私たちは、言い訳できぬほどに、現実にその滅びを味わいつつある罪人なのです。

〈祈り〉

神様、私たちはあなたを信頼することができないものです。あなたの愛を疑ってしまうものです。そしてあなたよりも自分自身を信頼して、あなたから離れてしまいます。私たちはあなたの教えに従わないで、悲惨に苦しんでいる罪人です。どうか憐れんでください。そんな私たちのために、あなたがイエス様を与えてくださったことを感謝します。

〈ねらい〉

罪の誘惑の周到さを知り、御守りを求める。

〈展開例〉

①世界が創られたとき、人と神様はとても親しくお付き合いしていた。神様はいつでも、どこでも身近な御方だった。

Q. 皆にとって神様は身近な御方か？ それとも遠い御方か？ 「小さい頃は身近に感じていた神様が、最近何だか遠く感じる」「教会では神様に心を向けるけど、普段は神様のことなんかおこまいなしに生きている」。こんな人がいるかもしれない。世界の全ての人が、神様から離れてしまう心の歪み「罪」を抱えている。今日の個所は最初の人間が、どうやって神様から離れてしまったかが、描かれている。

②人間には神様からこんなルールが与えられていた。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」(2章16節)。だが、人は神様を裏切り、離れていく。

③蛇の誘い(3章1節)。「賢さ」が神様の命令に疑問を与える。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのだろうか？」

Q. 神様は実際、何と言われたか？
⇒神様はそんなことを言っていない。

④女も同じように答える(2,3節)。だが、女の答えは神様の命令どおりではない。

Q. 女の答えと神様の約束はどこが食い違っているか？
⇒触れてもいけないとは言っていない。
⇒「死んではいけない」など言っていない。神様は「必ず死ぬ」と言われた。

⑤この迷いを蛇は見逃さない(4,5節)。「決して

死ぬことはない」。悪いことなんか起こらない。それどころか、これは君の成長のために役に立つ。そして、君は神様のように、良いこと悪いことを自分で判断できるようになる。

⑥女の心はどう変化したか？(6節)。神様の命令は女の頭から消え去っている。目の前のものが欲しくてしょうがない。そして、神様の命令に従って生きるのではなく、「賢さ」に従って「必ず死ぬ」と言われていた道を選択した。

⑦結果はどうだったか？(7節～13節)。二人の目は開かれたが、神様のようになることはなかった。それどころか人間は「ありのままの自分を見せられない存在」「神様に対して隠れる存在」「自分が悪いと認められない存在」「誰かに責任をなすりつける存在」となった。

Q. 皆は、神様の求められる命令に対して、同じようにしてしまうことがないか？ 神様を大切にしない、という命令に、言い訳をして命令をすりかえることがないか？ 神様と離れた場所に自分を立派にさせるものがあると思いませんか？

⑧人生には「園の木」のように様々な恵みがある。しかし、神様から離れていくなれば、行き着く先は「必ず死ぬ」というゴール。しかし、神様に嫌な思いをさせ続ける人間を、神様は見捨てない。放っておけば「永遠の死」にゴールする皆を、「どこにいるのか？」と言って探し出し、イエス様の言葉を聞かせて「永遠の命」にゴールできるように導いてくださる。皆の一週間が誘惑から守られるよう祈りたい。

〈祈り〉

あなたから離れていく私たちを見捨てずに救ってくださる神様。誘惑に弱い私たちが、御言葉に従えるよう守ってください。アーメン。

〈背景と文脈〉

主イエスは父なる神の使命を帯びて地上に来られた。そのクライマックスが十字架での贖いの死と復活であった。使命を終えられて父なる神のみもとに帰られるにあたり、主は福音伝道の働きを弟子たちに託された。マタイ28章18～20節、マルコ16章15～18節、ルカ24章44～49節には、復活された主イエスの宣教命令が記されているが、今日の箇所もそれらに相当する。弟子たちの派遣が、特に聖霊の授与との関わりにおいて強調されていることに注目したい。

〈復活の主の顕現〉(20:19～20)

復活された主イエスは、「その日(20:1)、すなわち週の初めの日の夕方」に弟子たちに現れられた。そのとき、彼らはユダヤ人を恐れて、家の戸に鍵をかけていた。この場合のユダヤ人とは、特に主を死に追いやった宗教的指導者を指す。

主イエスは彼らの真ん中に立たれ、「あなたがたに平和があるように」と言われた。これはユダヤ人の通常の挨拶言葉であるが、二回繰り返されている(19, 21)ことから、単なる挨拶ではなく、実質的な意味をもっていた、と考えられる。主イエスは十字架にかかれる前、弟子たちに「わたしの平和を与える。わたしはこれを世が与えるように与えるのではない」(14:27)と言われた。贖罪のみ業によって信仰者は義とされ、神との間に和解が成立し、平和が与えられる(ローマ5:1)。この平和は義認の結果としての平和であり、主イエスだけが与えることができる。

鍵がかかっている家に主が顕現されたことから、復活体はそれまでとは異なった体であることがわかる。しかし、ふたつの体の間には継続性が見られる。すなわち、主の手には、釘を打たれたときの傷跡と、脇には槍で突き刺された傷跡(19:34)があった。それらは、主イエスご自身であることを証明するものであった。それで弟子たち

ちは喜びに満たされた。

〈聖霊の授与と弟子たちの派遣〉(20:21～23)

主は地上での使命を終えられて父の御許に帰られるに際して、和解の福音を伝える働きを弟子たちに託された。主は、彼らがこの使命を遂行することができるように、三年余弟子たちを訓練されたが、今やその時が来た。

彼らを宣教に遣わされるにあたり、息を吹きかけ、聖霊を授与された。「息を吹きかける」(22)という語は、七十人訳(旧約聖書のギリシャ語訳)の創世記2章7節、「命の息を吹き入れられた」で使われている語である。

そして言われた。「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」(23)。弟子たちへの聖霊の授与は、彼らが力と権威をもって伝道できるためであり、彼らが罪を赦したり、赦さなかったりする権能を与えられたことを意味しない。聖書は、神だけが罪を赦すことができるお方である、と言っている(マルコ2:7)。「その罪は赦される」(23)、「赦されないまま残る」(23)、という表現は、文法的に言えば、過去の行為に基づく結果を表す完了形の受動態が使われており、もちろんその行為者は神ご自身である。ゆえに、神によって罪が赦される、あるいは赦されないまま残る、ということに関して宣言する権能を弟子たちが与えられた、と考えることができる。

信じない者に対して主は、「あなたたちの罪は残る」(9:41)と言われた。弟子たちの伝道を通して、結果的に、主を信じる者と信じない者が現れるが、信じる者の罪は赦され、信じない者の罪は赦されないまま残ることを宣言する権能が彼らに与えられた、と考えられる。聖霊なる神は、伝道する者と共におられ、確信と力と権威を与えてくださるお方である。(後藤公子)

テキスト ヨハネによる福音書 20章19～23節
カテキズム 子どもカテキズム 問80

〔単元のねらい〕

これまで、聖霊降臨祭は、使徒言行録を通して、新しいイスラエルであるキリストの教会の誕生に中心をおいて祝ってきました。今年は、復活された主イエスが弟子たちに現れた出来事から学びます。この御言葉は、復活祭に読まれるべき個所の一つです。しかし、ヨハネによる福音書は、ここで聖霊降臨の出来事を先取りしています。主イエスは、息を吹きかけ、聖霊を受けよと招かれます。主イエスご昇天の後、共同体として聖霊を受け、キリストの教会としての務め、罪の赦しの福音を全世界に宣教するように遣わされます。今朝、子どもたち一人ひとりに、主イエスが息を吹きかけられていることを確認しましょう。礼拝式においては、共同体で聖霊を注がれ、本来のあるべき人間へと、取り戻されていることを告げましょう。聖霊を受けるために、主イエス・キリストを信じ、熱心に祈り求めることへと励ましましょう。

「聖霊を受けなさい」

今日は、教会にとって特別の日をお祝いします。聖霊降臨祭です。ペンテコステの日です。それは、世界で最初に始まった教会の誕生日です。世界中の教会のお母さんのような教会です。その教会のことをエルサレム教会と言います。その教会は、イエスさまの十二人のお弟子さんたちによって始まりました。

世界で最初のエルサレムの教会が始まる時、お弟子さんたちは、さあ、イエスさまの教会を始めるぞと意気こんでいたのでしょうか。違うのです。お弟子さんたちは、イエスさまが、ユダヤの国の王様となって、自分たちの国を救ってくださる。自分たちはイエスさまの国の大臣になれる、そう考えていました。ところが、イエスさまはユダヤの警察に逮捕されました。彼らはイエスさまを捨てて逃げてしまいました。

お弟子さんたちは、家のカギをしっかりと閉めて、息をひそめて隠れていました。エルサレムの町には、イエスさまを殺した指導者たちがいて、自分たちもひどい目にあわせられるかもしれないからです。怖くて怖くてしかたがありませんでした。

彼らは、もしかすると、イエスさまに出会って、

夢のように共に過ごしたすばらしい日々を思い返したかもしれません。イエスさまの教え、神さまの力に夢中になって過ごした日々……。でも、もう、おしまいです。イエスさまを裏切り、見捨てて逃げたのです。イエスさまは、もう、殺されたのです。弟子たちは、結局、田舎に帰って、昔の生活に戻ろう、ひっそりと誰にも知られないように暮らそう。そう考えていたかもしれません。

ところが、まさに落ち込みへたり込んで、動けずにいるお弟子さんたちのところに、お甦りになられたイエスさまが駆けつけられたのです。

「よくもわたしを捨てて逃げ去ったな。情けない。もう二度と弟子にしない。絶対にお前たちを信用しない。これでおしまい。わたしは出て行って、本物の弟子を探しに行く」。そんなことは一つも書いてありません。そんなことは、ひと言も仰いけません。イエスさまは、弟子たちを叱りつけるために来られたのではありませんでした。まったく違います。その正反対です。

イエスさまはこう告げられました。「あなたがたに平和があるように!」。「神さまの平和があなたがたに、今、ある。今、ここで実現した」と言

われたのです。

世界で、もっともすばらしい祝福、それは平和です。神の平和を受けることです。それは、神さまとの間に何のわだかまりもないということです。神さまとの間に、これっぽっちも溝がないということです。まっすぐな関係です。すこしの影もありません。「良い関係になっているよ」と、裏切った弟子たちにイエスさまが宣言されたのです。

つまり、彼らのすべての罪、ありとあらゆる罪はもう赦されている。消し去られている。神さまは忘れてしまわれたと仰ったのです。

ほんとうに驚きです。不思議すぎます。お弟子さんたちは「ごめんなさい」ってひと言でも言いましたか？「ごめんなさい」と言ったからイエスさまが赦されたとは、まったく書いていません。つまり、イエスさまは、一方的に赦してしまわれたのです。

ポカーンとしているお弟子さんたちのために、イエスさまは、本当にイエスさまだということを証しするために、手とわき腹に残っている傷跡を見せられました。この傷によって、あなたの罪は赦されたのだよと教えるためでもありました。

ついに、お弟子さんたちは本物の喜びにあふれます。喜びが爆発します。「イエスさまは、私たちの罪を赦すためにご復活された！」

イエスさまは、この弟子たちにあらためてお命じになられます。「この平和を世界中に広げなさい！わたしは、そのために天のお父さまのところから遣わされた。わたしも、あなたがたを平和の使者として遣わします」。

神さまの平和、救いを告げる仕事、伝道こそ、人間ができるもっともすばらしい仕事、もっともすばらしい働きです。

でも、そのためには、一つだけ、条件があります。聖霊を受けることです。それは、もう、決し

て自分の力を頼りにしては生きないということです。自分の「おりこう」な考えでは、イエスさまのことも、その説教も分かりません。そんな生き方はイエスさまを信じて生きる生き方ではありません。お弟子さんたちの失敗は自分の力を信じたからです。

イエスさまは、そのことを心の底から教えたくてしかたがないのです。だから、イエスさまの霊、神さまの霊を注がれたのです。

こうして、お弟子さんたちは、まさにまったく生まれ変わったように、それから、自分に頼らず、イエスさまに頼りながら、イエスさまがお命じくださった平和を告げる働きに命をかけて従いました。それが最初のエルサレム教会となりました。そして、その教会は世界に広がったのです。

今日の暗唱聖句をもう一度、読みましょう。僕たち私たちは、神さまの霊を注がれるとき、本当に生きるもの、神さまの前に生きる人間、神さまと平和に生きる人間になります。神の平和を生きる幸いを知ります。

聖霊は、聖書を読んで、お話を聞いて、お祈りをする、この礼拝式で、目には見えていませんけれど、神さまの霊は、天から、ほら、皆さんに注がれています。先生にも注がれています。その恵みを心から信じ、感謝しましょう。この恵みがあるから、ここに僕たち私たちの教会も誕生し、今もここにいるのですから。

この教会は、僕たち私たちの教会です。皆がいなければ、教会になりませんよ。だったら、僕たち私たちも、教会のためにお祈りし、教会の仕事、平和を告げる働き、伝道の働きのお手伝いができるはずですよ。それをしてゆきましょう。その働きの大切な一つは、お友だちに優しく、親切にすること、赦してあげることです。自分の力ではとても無理と思うでしょう。でも、聖霊の力を受けているのです。挑戦しましょう。（相馬伸郎）

[今週の暗唱聖句] 創世記 2章7節

主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、
その鼻に命の息を吹き入れられた。
人はこうして生きる者となった。

〈ねらい〉

ペンテコステの意味を知り、聖霊に力をいただいで歩める恵みに感謝する。

〈さんび〉

いのちのこば社『プレイズワールド』、15「歩こうイエスの道を」

〈おはなし展開例〉

今日はペンテコステです。ペンテコステは教会のお誕生日です。みんなのお誕生日には、ケーキを食べたり、プレゼントをもらったりするよね。教会のお誕生日も世界中の教会がお祝いするんですよ。みんなは、みんなが生まれたときのお話しをお父さんやお母さんから聞いたことがあるかな？「なかなか生まれなくて大変だった……」とかね。子どもたちの誕生日には、お父さんお母さんは、みんなが生まれたときのことを思い出すことがあるんです。今日は教会のお誕生日だから、教会が生まれた時のお話をします。

一番さいしょの教会は、イエスさまの12人のお弟子さんたちから始まりました。でも、その時のお弟子さんたちは、暗い顔をしていました。どうしてかという、イエス様が十字架にかけられて、死んでしまわれた時だったからです。ショックで悲しくて沈んでいました。それだけでなく、イエス様を捕まえた人たちが、弟子たちを捕まえに来るんじゃないかと恐くて恐くて、家の中に入って鍵をしめて隠れていたんです。

そんな時、お弟子さんたちの真ん中に、イエス様が立ってこう言いました。「あなたがたに平和があるように」。死んでいたイエスさまが、目の前に立っておられるのです。しかも、イエスさま

の手には十字架につけられたときの釘のあとがありました。「本当にイエスさまだ！」お弟子さんたちは、大喜びです。よかったよかった。そこでお話しが終わるのかというと、まだ先があります。イエスさまは、「この喜びの知らせをたくさんの人に知らせなさい」と言って、お弟子さんたちに、「フーっ」と息を吹きかけられました。お弟子さんたちは、イエスさまから力をいただいで、教会が始まりました。

わたしたちにも、お弟子さんたちと同じように、目には見えないけど、イエスさまが息を吹きかけてくださっています。この息のことを、聖霊っていうんだよ。聖霊は、聖書を読んだりお話を聞いたりするときに、よく分かるように助けてくれます。そうして、神さまから力をもらえるんだよ。聖霊の力をもらって、今週も、元気いっぱいすごしましょう。そして、お友だちに優しくすることができる力を神さまからもらえるように、「ごめんなさい」とあやまる勇気ももらえるように、お友だちと仲直りする力をもらえるように。そして、小さなわたしたちでも、神さまの役に立つ働きができるようにお祈りしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。力強い神さまのお名前を賛美します。わたしたちに、聖霊を送ってください。わたしたちは神さまから力をもらえることを、ありがとうございます。これからも、神さまの言葉が良く分かるように助けてください。お友だちと仲良くする力を与えてください。お友だちを教会に誘うことができますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

わたしたちは、神様から命の息を吹き入れられた存在であることを確認しましょう。

〈はじめに〉

今日は、ペンテコステ礼拝です。教会カレンダーによるとクリスマスから始まり、レント・イースター、そしてペンテコステにつながります。特別なことはないかもしれませんが、教会にとっては大事な礼拝です。子どもたち一人ひとりがこの教会の大切な存在であること、そしてこの教会の歩みが守られていることを感謝しましょう。さらにこの教会に、一人でも多くのお友だちが導かれるよう祈りましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①お弟子さんたちは、家に集まっていました。その家の玄関のドアの鍵は閉められていました。なぜでしょうか？
- ②鍵がかかっているのに、誰かが入ってきました。誰ですか？
- ③イエス様は、何と言われましたか？
- ④イエス様は、お弟子さんたちに何を吹きかけましたか？
- ⑤イエス様は、何を受けなさいと言われましたか？

〈展開例〉

みなさんにお誕生日があるように、この教会にもお誕生日があります。自然に出来たわけではありませんね。(教会の歴史を簡単にお話してもいい

かもしれません。)世界に目を向けると、世界で一番最初に出来た教会があります。それは、エルサレム教会といいます。

皆さんのお誕生日にはみんなおめでとうと言われますね。中にはお友だちを呼んで、ケーキを食べたり、プレゼントをもらったり、わくわくどきどきの楽しい一日かもしれません。

最初の教会はどうだったでしょう。お弟子さんたちが集まって、パーティがあったのでしょうか？プレゼントがあったのでしょうか？みんな楽しそうに過ごしたのでしょうか？今日の聖書の箇所の中には「弟子たちは……恐れて……鍵をかけていた」と書いてありました。どうですか？楽しい雰囲気ですか？パーティーをしていましたか？違いますね。まるっきり反対でした。うれしくてどきどきしているのではなく、ユダヤ人に捕まらないように、見つからないように、隠れて、鍵を閉めて、みんなで息を潜めてどきどきしていたんですね。ユダヤ人にイエス様が捕まって十字架で殺されて、お弟子さんたちもその仲間だから捕まることが怖かったのです。

そんなお弟子さんたちのところに、イエス様はスーと入ってこられたのです。そして、聖霊を受けなさいといわれて、息を吹きかけられました。お弟子さんたちは、今までどきどき怖がっていた気持ちががらりと変えられました。聖霊を受けて、イエス様を伝える働きをするようになったのです。わたしたちもこの聖霊が注がれています。聖霊の力が、わたしたち一人ひとりに与えられていることを感謝しましょう。

〈祈りましょう〉

神様、わたしたちに聖霊をくださってありがとうございます。聖霊の力によって、わたしたちをここから、お家に学校に送り出してください。



〈改革派信仰の確認のために〉

前もってウ小教理第29～36問をよく読み、「キリストのあがないの恵みをあてはめる」という聖霊のお働きの全容を把握してください。またハイデルベルク第53問は必読です。聖霊を与えられて生きる慰めを確認してください。

〈関連聖句〉

※子どもたちと一緒に味わってください。

エゼキエル書37章1～14節

ヨハネによる福音書14章16, 17, 26節

使徒言行録1章8節、2章4節、4章31節

〈恵みを立体化するための視点の提示、例話〉

※子どもたちとの対話に用いてください。

このテキストにおいては、霊的に死んでいた弟子たちが、希望の中に甦らされて、再び生きるものとされたという、再創造が問題になっています。はじめの人間が、土人形に神の霊を吹き入れられて人間になったように、弟子たちもまた主イエスによって霊を吹き入れられて、命の躍動を回復されるのです。上述の関連聖句にあるエゼキエル37章では、枯れた骨に霊が吹き入れられることによって人間が復活するという希望が示されています。聖霊はそうにして、罪に死んでいる私たちのうちに、命の希望を生み出してくださいということを、子どもたちに伝えたいと思います。私たちには、自分の罪に破れ、挫折し、おのれの無力に絶望してしまう時が、誰にも必ず来ます。大きな過ちを犯してしまって、もうこんな自分は、

神に見捨てられても仕方が無いと思う時もあるでしょう。子どもたちの中にも、そんな挫折を味わっている方がいるかもしれません。例えば、イエス様のことを信じていることをバカにされて、恥ずかしくなって否定してしまった……。友だちがはじめられているけど、イエス様の教えのようには何もできなくて、無視してしまった……。それぞれに、この弟子たちと同じような、イエスに従えぬ自分の弱さを抱えているかもしれません。その罪を糾弾するのではなく、同じ弱さを抱える者として、その心に寄り添い、その私たちのうちに命を生みだしてくださる聖霊を求める祈りに導いてあげていただきたいと願います。

説教展開例にもあるように、聖霊は私たちに力を与え、伝道の働きをするための力を与えてくださいます。信仰者として証しを立てるための力を与え、言葉をも与えてくださいます。敵をも愛する、不可能な愛を可能にしてください。その聖霊が、「私にも与えられている（ハイデルベルク53）」ことの喜びを、子どもたちと分かち合ってください。

〈祈り〉

神様、私たちはイエス様に従えなかった弱い弟子たちと同じです。自分の力では、イエス様の教えにとても生きることができません。どうか聖霊を与えてくださった、命を満たしてください。あなたのために生きることができる力を、私たちにください。



〈ねらい〉

私たちを強めてくださる聖霊のお働きを喜ぶ。

〈展開例〉

①今日はペンテコステ。教会の誕生日。人は神様から霊を与えられてこの世に誕生する。教会は神様から「聖霊」という命の息を与えられて誕生した。今日の個所は、ペンテコステより少し前の出来事。復活されたイエス様が、天に帰られる前、弟子たち（トマスはいなかった）に聖霊を与えられたときのことが記されている。

②聖書朗読（19節前半）。ユダヤ人たちにビビっている弟子たちの姿から今日の話は始まる。弟子たちが怖がっていたユダヤ人とはどんな人たちだっただろう？ それは「イエス様を『神の子』と認めない人々」「イエス様の教えとイエス様を殺すほど憎んだ人々」だった。しかも、弟子たちといつも一緒にいてくださった「神の子」であるはずのイエス様は死んでしまってもういない。

Q. 皆は「イエス様を神様と信じない人」「イエス様の教えを理解できない人」「イエス様の存在を否定する人」から隠れたくなかったことはないか？「イエス様は本当に『神様の子』なんだろうか」と不安になったことはないか？

③聖書朗読（19節後半～20節）。イエス様はそんな弟子たちのど真ん中に現われる。おびえる弟子たちに「平和があるように」と安心を与えてくださる。「わたしは十字架についた、あのイエスである！」と、自分が確かに十字架の死から復活した「神の子」であることを信じさせてくださる。世の罪を取り除く神の小羊であることを信じさせてくださる。「神の子」であるイエス様が自分たちと一緒にいるとわかったとき、今までの臆病は吹き飛び、弟子たちは喜びに包まれた。

④聖書朗読（21～22節）。さらに、イエス様は再

び「平和があるように」と言われ、世界中の人がこの方を信じて独りも滅びることがないように、「神の子である救い主イエス様」を伝える勇気と使命とを与えてくださる。そして、その力に満たされるために、いつでもイエス様と自分を結び付けてくださる「聖霊」を与えてくださった。イエス様がどのような方か、私たちの心に伝えてくださる「聖霊」を与えてくださった。

⑤人が本当の安心を得るために必要なのは罪の赦し。聖書朗読（22節）。弟子たちは地上から天国へお帰りになるイエス様の口となり、神様が罪を赦されたと宣言する。教会は、神様の代わりに罪を赦すのではない。神様が赦された人に、天上のイエス様の口に代わって赦しを宣言する。一人でも多くの人が、赦しを宣言され、神様と一緒にいる安心を得るため、神様が差し出す罪赦された平和へと人々を招く。

⑥神の子であるイエス様と一緒にいるとわかったとき、「イエス様はいないんじゃないか」というビビリも、「世間の人はいエス様を『神の子』だなんて信じない」というビビリも、「神様と一緒にいる平和、安心」へと変えられる。この日、弟子たちに与えられた聖霊が、ペンテコステの日、天上のイエス様から、すべてのクリスチャンに贈られた。もし、君の心に弟子たちと同じ臆病があるのなら、君にも聖霊が差し出されていることを信じて、その力を求めて欲しい。イエス様は君にこう言っている。「聖霊を受けなさい」と。

〈祈り〉

私たちの臆病を安心に変えてくださる聖霊なる神様。弱い私たちにイエス様を信じ、イエス様を伝える力をください。今、心からあなたを求めます。どうか助けてください。アーメン。

テキスト 創世記 3章14～24節

神の言葉に背いた罰として人間には死が定められた。人間は苦しんで子を産み（或いは子育てに苦勞する、と理解することも可）、土を耕し、最後には土に返る。そして、楽園から追放され、命の木に至る道が閉ざされる。人間はもはや自力でそこへ戻ることはできない。しかし、この墮罪の原点において、神が人間を見る眼差しには慈愛が宿る。

神の憐れみを示す文脈は次の通り。まず、女が木の実を食べ、すぐさま男が口にするが、それで彼らは即死しない。創造者にはそうした罰を下す権限があるはずである。しかし、神は自分で造った人間を失敗作として廃棄せず、憐れみによって生かし続ける。

神は人間を呪ってはいない。呪いは祝福とは逆に、この世の悲惨と死をもたらす力である。罪の結果として呪われたのは、人間ではなく大地である。園の外では過酷な労働が課せられるが、人間自体は神に呪われた存在ではない。女にはエバという名も与えられ、その名（「命」の意を表す）の通り、命がそこから生まれるようになる。

神は人間を園から追放するが、彼らには皮の衣が着せられ、神は彼らを保護される。人間はエデンの外で始まった歴史を、神の憐れみの眼差しの下で生きてゆく—これが聖書が語るところの世界観・人生観である。

注目すべきは、そこに約束が与えられていることである。神が蛇（つまりサタン）に向かって語られた言葉の中に、罪を犯した人間に対する希望が示される。すなわち、3章15節の「原福音」である。「蛇の子孫」とは、後の時代のサタンの働きを指す。そして、「女の子孫」は将来の人間を指す。その両者の間に敵意がおかれる。つまり、人間は罪へと誘う力に立ち向かうようになることが暗示される。約束された将来において、人間は

悪のかしらを砕き、悪は人間のかかどを砕く。かかどを砕かれても死なないが、かしらを砕かれれば間違いなく死に絶える。つまり、女から生まれてくる人によって悪が減ぼされる、という約束である。ここに与えられた預言は、最終的には神から送られてきた人が悪を減ぼし、神の園を世界規模で回復するという、人類の救済にまで行き着く。

聖書全体の展望がここから開かれる。すなわち、聖書は次のことを人類全体に関わることとして語る。神は罪人を憐れんで、世界に救済をもたらす。具体的には、それはイエス・キリストによって歴史の上に実現された。イエス・キリストは十字架におかかりになった神の子であるが、それが、原福音にある「彼はお前の頭を砕く」という事態に相当する。十字架は神の子を破壊した出来事のようにみえるが、実はそうではなく、悪がそれによって減ぼされることになった事態である。つまり、キリストの十字架は、罪のために死に定められた人々から罪を取り去るための犠牲をあらわし、キリストの復活は罪が人にもたらした死を終わらせることを意味する。罪を知るといことは、神の憐れみに触れ、このキリストの十字架と復活による救いを身に受けることによって、再生した新しい命を得ることに結びつく。

ここに聖書が差し出す救済史の大きな展望が開けている。人間は初めに二人で園を出た。しかし、キリストの十字架を折り返し地点として、こんどは世界がこぞって天の国へ帰る道が開かれる。新しく用意された場所はもはや二人きりしかいない園ではない。海の砂のように、天の星のように増え広がった人々の園が、その彼方に見えている。人間が神から離れてしまった時代にも、我々の思いの及ばない神の計画が世界の歩みを終わりへと導いている。（牧野信成）

テキスト 創世記 3章14～24節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問18、ウェストミンスター小教理 問20

〔単元のねらい〕

創世記3章の前半（前々回）では、人間に罪が混入してきたことを学びました。今日のテキストからは、まず罪の結果、人が生きることに労苦しなけりばならなくなった悲慘について覚えたいと思います。すべての人が、アダムとエバの子孫だからこそ、現在の生活があり、本来、神さまが創造して下さった最初の人の状態とは異なっていることを確認したい。またさらに、主なる神さまは、人を罪と悲慘の中に置かれ、突き放されたのではなく、なおも人を愛して下さり、恵みの約束（原福音）をお与えくださっていることを確認していただきたい。

「神さまは見捨てません！」

アダムさんとエバさんは、神さまとの約束を破り、善悪の知識の木から木の実をとって食べてしまいました。神さまは最初に、この木の実を「食べると必ず死んでしまう」とふたりと約束していましたが、彼らが罪を犯した結果はどうなったでしょうか？

木の実を食べるとすぐに死ぬことはありませんでした。しかし、アダムさんとエバさんは、やがては死ぬこととなったのです。そしてふたりから生まれる子どもたち、すべての子孫が、生まれながらにして、必ず死ぬこととなったのです。これは、神さまが最初、人を造られた時、「命の息を吹き入れられ」（2:7）、生きる命をお与えくださったこととは、違うのです。今生きている私たちは、「年をとれば、やがて死ぬんだ」と思っています。しかし、神さまが最初に人を造られた時には、そうではなかったのです。私たちがやがて死ぬのは、アダムさんとエバさんが最初に罪を犯したからであり、アダムさんとエバさんから生まれた私たちもまた、毎日、神さまの御前で罪を犯しているからなのです。

アダムさんとエバさんが罪を犯した結果、他にも変わったことがありました。神さまによって創造された時、エデンの園の中にあるどの木から取って食べても良かったのです。そのため、食べ物を得るために、ふたりは苦勞する必要はなかつ

たのです。しかし、罪を犯した後、ふたりはエデンの園から追い出されます。そうすると、ふたりは、食べ物を得るために、自分で農作業を行って汗を流し、苦勞しなければ、食料を得ることができなくなったのです。今も同じです。みんなはまだ、学校に入っていない人もいれば、小学生・中学生・高校生の人もいますよね。わたしたちは、社会に出るために勉強しなければなりません。そして高校・大学を出れば、働くことが求められます。それは生きていくには、お金が必要だからです。お金を稼いで、それで食べるもの・着る物・また必要なものを得なければならないのです。みんなのお父さん・お母さんも、毎日働いていますよね。中には、お母さんは仕事には出ていないという人もいるかと思いますが、ご飯を作ったり、洗濯したり、家庭の中の仕事をすることも大変ですよ。「働かざる者、食うべからず」とのことわざがありますが、アダムさんとエバさんが罪を犯した後は、人として生まれてきた以上、働くことが求められるようになったのです。だからこそみんなも、高校・大学を卒業したら、働くことが求められるのです。

また、神さまは特に女の人たちに特別のことをお語りになりました。それは、子どもを産むことの苦しみです。みんなは、赤ちゃんが生まれてくるまで、どれだけの期間、お母さんのお腹の中に

いるか知っている？ ^{とつきとおか}十月十日と言われています。その間に、赤ちゃんがだんだんだんだん大きくなり、生まれる直前は、お母さんは非常に大きなお腹で、毎日生活しなければなりません。非常に大きな苦勞があるのです。それでも赤ちゃんが生まれる喜びを知っているからこそ、それに耐えることができるのです。

このように、罪人となった人は、神さまが最初に創造してくださった時からはかなり離れてしまい、毎日毎日働くことが求められ、赤ちゃんを産まれるにしてもお母さんは大変苦しみ、さらに最後には土に返る、つまり死ぬこととなったのです。「もう生きていくのが嫌になった」なんて言わないでください。神さまを知らないならば、確かに希望はありません。しかし、みんなは神さまを知っているのです。主なる神さまも、みんなのことを良く知っていてくださいます。そして、神さまを信じるならば、苦しみながら死んでゆくではありません。主なる神さまは、この時、神さまを信じて生きる人に対して、救いを約束してくださいました。アダムさんとエバさん、そしてみんなが神さまから離れ、罪を犯した結果、死ななけ

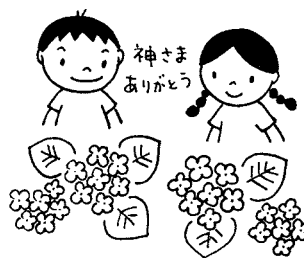
ればならないのですが、神さまは悲しく思われ、みんなを愛して、イエスさまによる救いを約束してくださいました。そしてイエスさまの十字架によって、サタンが滅ぼされ、みんなが背負っている罪が赦され、そして神さまの子どもとして、救われるようにしてくださいました。

神さまは、このように、アダムさんとエバさんが最初に罪を犯した直後に、すでにみんなのことを覚えていてくださり、みんなを救うために、イエスさまを準備し、約束をしてくださっていたのです。このことで、本当に、神さまがみんなのことを愛していてくださっていることを理解していただけだと思います。

だからこそ、みんなも、これから長い人生、生きていく間には、いろんな苦しみもあると思いますが、それでもなお神さまが共にいてくださり、助け、救ってくださっていることを覚えて、神さまを信じて欲しいです。神さまを信じることによって、神さまは、私たちを、もう苦しみもない、悲しみもない、天国の祝福で満たしてくださいました。(辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 5章8節

わたしたちがまだ罪人であったとき、
キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、
神はわたしたちに対する愛を示されました。



〈ねらい〉

神さまに背いた人間に対し、救いを約束してくださった神さまの大きな愛に触れる。

〈さんび〉

いのちのこば社『プレイズワールド』、13「両手いっぱいのお愛」

〈すいせんとしよ〉

日本聖書協会・みんなの聖書絵本シリーズ1『せかいのはじまり』

〈おはなし展開例〉

せかいでさいしょの人は、アダムさんとエバさんというお名前だったよね。このアダムさんとエバさんは、へびに誘われて、神さまとの約束をやぶってしまったのでした。食べてはいけない木の実をパクリと食べてしまったんだよね。神さまは、「なんていうことをしたのか！」と、アダムさんとエバさんを叱られました。でも、そのすぐ後に、神さまは、人間を救うことを約束してくださるんです。

ここでアダムさんとエバさんを、神さまから離れるように誘ったへびは、サタンです。そして、このサタンと、人間が戦うと言われました。どちらが勝つかもはっきりしています。神さまは、人間がサタンの頭をくだき、サタンは人間の足のかかとをくだきと言われました。どっちが勝ったかな？ かかを砕かれても死なないけど、頭を砕

かれたら死んでしまいますね。人間がサタンに勝つということを約束してくださいました。

この約束は、イエスさまが十字架に架かって死なれて、死から復活された時にその通りになったんです。人間は生まれたときから罪人です。そのままでは、いつかみんな死んでしまうのです。でも、イエス様のお陰で、身体は死んでしまっても、神さまから決して離れることがない命をもらうことができるようになりました。人間が最初に神さまの約束をやぶってしまったときから、神さまはこうやって人間を救いますよって約束してくださっていたんです。それくらい、神さまはわたしたちのことが大切だから、死んでしまわないようにしてくださったのです。神さまにありがとうございます。そして、イエスさまにありがとうございますって言いたいね。お祈りしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。わたしたちを大切に思ってください。わたしたちを赦してくださいありがとうございます。わたしたちが神さまからはなれないようにイエスさまを送ってくださいありがとうございます。イエスさま、わたしたちのために十字架で死んでくださってありがとうございます。わたしたちは神さまに愛されている子どもです。これからも、神さまと離れずにいっしょにいられますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

神様は罪を悲しまれるお方であり、裁くお方である。そして、人を愛し、救いをお与えくださる憐れみ深いお方である。

〈はじめに〉

新しいクラスになって二ヶ月がたちました。クラスの雰囲気はいかがでしょう。先生と子どもたち、子どもたち同士の信頼関係は築きあげられているでしょうか。天地創造の神様がわたしたち一人ひとりを、今日も礼拝に、このクラスに招いてくださり、神様の言葉を聴くことが出来、またわたしたちも神様に「ありがとう」「ごめんなさい」とお話できることを、みんなで神様に感謝しましょう。お休みをしているお友だちのこともいつも覚えましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ① アダムさんとエバさんは、今、悲しい思いをしています。なぜですか？
- ② お約束を破ったアダムさんとエバさんは、このまま、エデンの園に住むことが出来ますか？
- ③ お約束を破ったアダムさんとエバさんは、これまでの生活ががらりと変わりました。今までエデンの園のどの木からも木の実を取って食べてよかったのですが、これからはどうなりますか？

〈展開例〉

罪が入ってきたために、神様が作られた世界は大きく変わりました。アダムさんとエバさんの人生も大きく変わりました。神様とずっと一緒に、神様とのお約束を喜んで守る生活は壊れてしまいました。神様はとても悲しまれました。きっとアダムさんとエバさんも後悔したでしょう。けれど

も、アダムさんとエバさんはエデンの園から出なければなりません。神様との関係が壊れてしまったからです。

そして、神様はアダムさんには一生懸命お仕事をすること、エバさんには赤ちゃんを産む苦しみをお与えになりました。けれども、アダムさんとエバさんを死なせることはありませんでした。

このアダムさんとエバさんの、神様に従わないという罪は、今のわたしたちの中にもあります。けれども、神様は、アダムさんとエバさんが罪を犯したとき、神様のお約束をくださいました。この世に、一人の赤ちゃんが生まれ、その人は必ずサタンを倒す、そういう人をこの世に与えてくださるというお約束です。それがイエス様です。このお約束を神様は実現してくださいましたね。このイエス様を信じることによって、わたしたちの罪は赦されるのです。壊れていた神様との関係が、壊れたままではなくて、新しくまた回復して神様と一緒に生きることが出来て、神様にありがとう、ごめんなさいとお話が出来るとしてくださったのです。神様は本当にわたしたちを愛してくださっているのですね。

〈祈りましょう〉

先生のお祈りを繰り返しましょう。

神様、(繰り返し)

わたしたちにイエス様をお送りくださりありがとうございます。(繰り返し)

わたしは、時々、あなたに従うことが出来なくてごめんなさい。(繰り返し)

どうか、わたしをおゆるしてください。(繰り返し)

わたしの罪をぬぐってください。ありがとうございます。(繰り返し)

わたしはあなたをこころから愛します。(繰り返し)

アーメン。(繰り返し)

〈改革派信仰の確認のために〉

前もってハイデルベルク第10～15問や、ウ小教理第20問をよく読み、一人の完全なる仲保者・あがない主を通しての恵みの契約によらなければ、罪人には救いはありえないことを確認してください。

〈関連聖句〉

※子どもたちと一緒に味わってください。

詩編85編1～14節

ローマの信徒への手紙5章6～11節、16章20節

〈恵みを立体化するための視点の提示、例話〉

※子どもたちとの対話に用いてください。

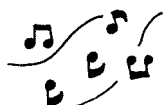
神様は、罪を絶対に赦すことのできない義なる方です。今日のテキストにある神様のお言葉はとても厳しい。神の言葉に背いた罰を与えられていることは明確です。神は、罪人に対して怒っておられるのです。しかし、怒るといのは愛の証拠です。親が子を叱るのは、誰よりも深く愛して、誰よりも子の将来を真剣に考えているからでしょう。「こんなやつどうなってもいい」と思っているなら、怒りはしません。神様は私たちのことを、私たちの父や母以上に深く愛し、真剣に考えていてくださいます。だから、「罪人」になってしまった私たちに、真剣に怒りを覚えられます。神の怒りは、あふれる愛を抑えきれぬ、神の熱情の表れです。すなわちその怒りのまなざしにさえも、すでに慈愛が宿っているのです。（その他、このテキストにおける神の憐れみを示す文脈については、聖書研究を参照してください）。

また、人間には死が与えられたことの意味を、子どもたちと覚えてください。「善悪の知識の木の実を食べると必ず死ぬ」と言われたとおり、罪の罰として、死が与えられました。「塵にすぎな

いお前は塵に戻る」と言われています。どれだけこの地上で財産や名誉を手にしても、すべての人が最後は死んで塵になります。もともと人間は、神様とともに生きる、決して死ぬことのないものとして創造されたのに、神様から離れた結果「死ぬべき者」となったのです。「罪が支払う報酬は死です（ローマ6:23）」。今や人間は、その死の力にがんじがらめにされた、どこまでもむなししい存在になってしまいました。人間にとって一番大切なもの＝「神様との豊かな命のきずな」を失った、生ける屍になってしまったというところに本当の深刻さがあります。翼の折れてしまった鳥のようです。生きていても死んでいるのです。それが「死を与えられた」ということの悲しさです。そして人間は、エデンの園から追放されてしまいました。もう神様と共に過ごした喜びのオアシスに戻ることはできません。それでも神様は、私たち「罪人」を愛することをおやめになったわけではありません。やがてこの神様が、私たちの罪を赦すため、愛する独り子を身代わりの犠牲として与えてくださいます。それはこのテキストにおいて指し示されている遥かな約束です（聖書研究を参照）。私たちの滅びを望まぬ神の愛は、サタンへの支配に勝利する救い主を約束し、この救い主への信仰を通して、永遠の命を約束してください（ヨハネ3:16）。それは、エデンの園で失敗して以来、もう一度私たちに与えられたビックチャンスです。

〈祈り〉

神様、あなたは私たちの罪を決して赦すことのできない義なる方です。でもそのあなたが、私たちが滅びないように、身代わりにイエス様を与えてくださいました。ありがとうございます。あなたの愛を信じさせてください。



〈ねらい〉

罪の悲惨と人間を見捨てない神の憐れみを喜ぶ。

※説教展開例に合わせ19節までに絞る。

〈展開例〉

①聖書には、神様が創られたスバラシイ世界の姿が描かれている。美味しい世界中の果実が全部食べ放題（2章9節）。人生は「世界のスバラシサを守るため」の仕事で充実（2章15節）。人間関係も最高。お互いを自分自身のように大切にし、すべてをさらけ出す付き合いが出来た（2章21～25節）。そんな幸せ満タンの人間たちが、世界中に広がり繁栄することを神様は心から祝福された。世界は神様の愛に輝いていた。

Q. しかし、実際の世界はどうか？ おいしい食事ばかりでも、楽しい仕事ばかりでもない。人目を気にして、人を疑うような人間関係がある。

②聖書は世界が歪んだ原因を「人間が神様に背を向けたせい、『罪』のせいだ」と語る。神様は人間に一つだけルールを与えた。誰だって守れそうなルール。「この木からだけは実を食べたらダメ」というもの。しかも、「食べたら、お前は絶対に死んでしまうからだ！」と、食べちゃダメな理由も、食べた場合の危険もしっかり教えられた。もし神様に背いたら死んでしまう。自分を大切にしてくれる神様とも、人ともお付き合いが終わってしまう。人間は全身に神様の愛と人の愛を受けていたのに、その関係を終わらせる道を選び取る。女は蛇に誘われて、男は女に誘われて、この果実にかぶりついた。神様に背を向けた男と女、そして、そそのかした蛇。神様は犯罪者たちを追及し、その判決を下された。聖書朗読（14節）。まず、弁解無用の蛇は神様に嫌われる、呪われたものとなった。

Q. 女への判決はどうだったか？ 聖書朗読（16節）。家族を産む祝福はどうなったか？ 祝福さ

れていた人間関係はどうなったか？

Q. 男はどうか？ 聖書朗読（17～19節）。管理を任されたスバラシイ世界はどうなったか？ 食事や仕事、生きる輝きはどうか？ 人生は、食べるためだけの労働に命を消費する充実のないものになり、さんざん働いて死んでいくだけの空しいものになってしまった。

③神様はひどい？ そうじゃない。それほどに神様から離れるというのは恐ろしいこと。「私は死んでもよい」と言うのと同じ。神様の言葉に逆らい背を向ける「罪」とはそれほどまでに重い。しかし、「そんなふうにした神様が悪い」、そんな声をたまに聞く。これこそ人間が歪んでいる証拠。「私たち人間は悪くない。悪いのは神様だ」。これは12節のアダムと同じ言い訳。三者とも皆、神様への加害者。被害者は神様ひとり。素直に考えれば、ひどいのが人間なのは明らか。

④でも、神様はすべて終わりにされず、むしろ希望をくださった。聖書朗読（15節）。蛇という悪の存在を嫌う心を神様は残され、「やがては人が悪を打ち砕く」と約束された。罪が生まれた直後に、救いの道が開かれた。イエス様が悪を打ち砕く日まで、人間を救い続ける神様の忍耐と救いの歴史が開始した。その神様の忍耐に支えられ今がある。そしてイエス様は、再び人が神様とお付き合いする世界を取り戻された。人生は労苦の果てに死ぬだけの空しさから、神様のスバラシサを伝え広める輝きを取り戻した。自分の抱える罪の重さを悲しみつつ、そんな私たちを捨て去らない神様の憐れみに感謝したい。

〈祈り〉

私たちを見捨てず救われた神様。私たちを恐ろしい罪から遠ざけてください。アーメン。

テキスト 創世記 4章1～16節

原初史のテーマは、神から離れていく罪人の、醜さと愚かしさを描き出すことにあると言える。神がどういう方であるかということよりも、神から見て人間はどういう存在であるのかということに、より一層の強調点が置かれて書かれている。ここには最初の殺人の記録がある。エデンの園にもはや帰ることができない人間は、これからどれほど悲惨な歩みを刻むのか。その前途多難な旅のはじまりの記録である。

カインは農夫、アベルは羊飼いであった。これは古代西アジアにおける基本的な二つの生活様式であった。ここで神はアベルの献げものに目を留め、カインの献げものに目を留めなかったとある。新約聖書はその理由として、アベルが優れた犠牲をささげた（ヘブライ11:4）、アベルは正しい人だった（マタイ23:35）と説明しているが、物語自体はその理由を何も語らない。兄弟の優劣などは、一切注目されていない。

理由は分からない。ただ、不条理にさえ思える神の自由な選択だけが示されている。ここでは「神の恵みの不公平さ」がテーマとされているという学者さえいる。

近代人は、人間は平等だと言いたがる。しかし各個人に与えられる境遇には明らかに違いがあり、例えば大富豪の御曹司とスラム街の孤児とでは、生まれた瞬間からスタート位置が違うのが現実である。それを一人ひとりに与えられた最善の配剤と信じて、希望を見出すことができるのは信仰のみであって、聖霊との出会いなき者の目には、まさに恵みの不公平としか見えないであろう。それはいつも人間が直面する事実であり、カインはその悲劇を味わっている。

そしてここでのカインの姿は、まさに人間その

ものである。神の自由な恵みの采配を認めることができず、弟への嫉妬に身を焦がし、「神に愛されていない」と、勝手に自分で間違った判断をしてしまう。顔を伏せ、「どうして私は選ばれない？」と問うこともせず、神との対話を拒絶してしまう。これこそが「正しくない」ことであり、非常に危険な状態である。罪をそんな彼を待ち伏せて、蹂躪する。罪を支配できずに、支配されてしまった人間が、こうして最初の殺人を犯す。（私訳では、7節は「もしお前が正しくふるまおうとするならば、顔を上げなさい。」であり、ここで神が求めておられる「正しいふるまい」とは、神との関係の中にとどまり続けることだと考える。）

神はこの殺人者に、あえて弟の所在をたずね、もう一度対話を求めるが、カインはますます心を閉ざしてシラを切る。そんな彼に、神は厳しい処罰を下す。それまで生活の基盤としてきた地の実りが与えられず、定着民が軽蔑する放浪者に転落せねばならない。これは最も厳しい裁きであった。カインは自分の罪の重さに嘆き、与えられた運命に恐怖した。それは神の「御顔から隠されて」、庇護のないままに罪の世界を行く恐怖であった。

しかし神は、カインを見放したわけではなかった。彼の死を望んではおられず、安全を保障するためにしるしをつけられる（刺青のようなものか？）。まるで「これは私の愛する者だ」と示すように。そこには神の憐れみがあふれている。「この者を殺すな。この者は罪の力に呑み込まれてしまった、私のできそこないの子だ……、でも誰にも手出しさせはしない。私の大切な子だ……」こういう神の声が聞こえてくる思いがするのは、私だけであろうか。（坂井孝宏）

テキスト 創世記 4章1～16節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問21

〔単元のねらい〕

アダムとエバの罪は彼らの初めての子カインにも受け継がれた。弟アベルを殺したカインの罪に、わたしたちは慄然とする。わたしたちはおのおの、罪がいかに手ごわいものであるのかを知っている。しかしわたしたちは贖い主イエス・キリストを仰ぐことができる。いかなるときにもキリストを仰いで生きる。それこそが罪に勝利し、命を得る道であることを確かめたい。

「神さまを仰いで」

アダムとエバとの間に、ふたりの男の子が生まれました。お兄さんのほうはカイン、弟のほうはアベルと名づけられました。大きくなってカインは土を耕す人になり、アベルは羊飼いになりました。

あるとき、カインもアベルもともに、神さまにささげものをささげました。それぞれの仕事に応じてカインは土の実りを、アベルはよく肥えた羊をささげたのです。

このとき、神さまはアベルのささげものは受け入れられましたが、カインのささげものには目をとめられませんでした。なぜなのだろう、それでは不公平ではないかと思うかもしれませんね。そのことについてはさまざまに推測をする人々がありますが、聖書にははっきり書いていないのです。

ひとつだけ言えることは、カインはこのことをも受け入れるべきであったということです。神さまはなぜ弟のささげものを受け入れられたのに、自分のは受け入れられなかったのか。カインには納得ができなかったでしょう。でも、神さまのなさることにはまちがいはありません。このことにも、神さまのお考えがきっとあったにちがいません。ですから、カインはこの神さまのなさりかたをも受け入れるべきでした。神さまがわたしたちに求めておられることは、どんなときにも神さまに従い、神さまのみこころを受け止める信仰なのです。

けれどもカインはこのときに、激しく怒りました。このような判断をなさった神さまに怒りを燃やし、弟のアベルをねたみました。そしてアベルを野原に誘い、アベルの命を奪ってしまったのです。

アダムとエバがエデンの園で、神さまのみ言葉に背いて、禁じられていた木の実に手を伸ばしたとき、人類に罪が入ったことを学びましたね。なぜアダムとエバが木の実に手を伸ばしたのかを思い起こしてみましよう。それはサタンから、この木の実を食べてもあなたがたは決して死ぬことはない、それどころかあなたがた自身が神のようになるのだと誘惑されたからです。

罪とは何でしょうか。それは、神さまをさしおいて自分が神のようになろうとすることです。神さまよりも自分を正しいとすることです。

このときのカインもそうだったのです。神さまが弟のささげものは受け入れ、自分のささげものは受け入れられなかったことを、まちがったことだと考えたのです。そして、まちがったことをなさる神さまに対して怒りを燃やす自分は正しいと信じたのです。アダムとエバの罪が、確かに子どもカインにも受け継がれていたのですね。

わたしたち人間は神さまのみこころをきわめ尽くすことはできません。時には、神さまのなさることの意味がわからないということもあるでしょう。けれども、そのときにも神さまは正しいのです。神さまの正しさは、わたしたちの正しさをは

るかにこえています。そのことを信じて、どんなときにも神さまをあげ、神さまに従っていくことが、わたしたち人間の道なのです。

実は神さまはカインがアベルを殺してしまうより先に、カインに警告のみ言葉を語ってくださいました。顔を上げなさい、との警告です。カインは神さまのみ前で、顔を伏せたままでした。自分の正しさにとらわれ、怒りに支配されているとき、わたしたちは顔を伏せます。顔を上げて、神さまを仰ぐことができないのです。神さまよりも自分のほうが正しいと思っているからです。けれどもそのようなときこそ、神さまはわたしたちに顔を上げよとおっしゃるのです。わたしを上げとおっしゃるのです。なぜなら神さまを仰ぐとき、わたしたちは暗い罪からときはなされるのだからです。

神さまはカインに、お前は戸口で待ち伏せている自分の罪を支配しなければならないとおっしゃいました。自分の罪を支配するとはどういうことでしょうか。自分の力で罪の誘惑とたたかって、追い払わなければならないということでしょうか。

そうではありません。わたしたちを罪から守ってくださるイエスさまのもとに逃れることです。罪の力は手ごわいので、わたしたちは自分の力でこれにうちかつことはできません。けれどもイエスさまを仰いで、イエスさまのみ前にへりくだるとき、罪に勝利する力をいただくことができるのです。

顔を上げて、イエスさまを仰ぎましょう。イエスさまはどのようなときにも、わたしたちとともにいてくださいます。そしてわたしたちを守ってくださるのです。 (木下裕也)

[今週の暗唱聖句]

詩編 46編2節

神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。
苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。

イエスさま...



〈ねらい〉

どんな時も、神さまにしたがうことが正しいことだと知り、そのためにはイエスさまの助けが必要だということを知る。

〈さんび〉

いのちのこば社『ブレイズワールド』、30「いっしょにうたおう」

〈おはなし展開例〉

最初の人、アダムさんとエバさんには、二人のこどもが生まれました。KくんとSくんみたいに、男の子二人の兄弟でした。二人が大きくなってお仕事ができるような歳になると、お兄さんのカインさんは畑仕事をする人になりました。弟のアベルさんは、羊飼いになって羊の世話をする人になりました。兄弟がそれぞれ違うお仕事をするようになったんだね。

ある時、二人は神さまにささげものをすることにしました。お兄さんのカインさんは、畑でとれた食べ物を神さまにささげました。弟のアベルさんは、生まれたばかりの羊を神さまにささげました。そうしたら、神さまは、弟のアベルさんのささげものは受けとったのだけど、お兄さんのカインさんのささげ物には目を向けなかったのです。どうしてかなあ？ 神様は、お肉は好きだけれど、野菜が嫌いだったのかなあ？ そうじゃないよね。聖書には何も書いていないから、どうしてか分からないんです。でも、お兄さんではなく、弟のアベルさんが選ばれたんです。そういうことってあるよね。お兄ちゃんばかりほめられて、ぼくはあんまりほめられない……弟ばかりかわいがられて……とか思っちゃう時あるよね。このとき、お兄さんのカインさんは、どうしても納得できま

せんでした。そして、「どうして自分のささげものは受け取ってもらえないんだあ！」と怒りました。そして、弟が憎たらしくなってきて、弟のアベルさんを殺してしまいました。

カインさんは、神さまに受け入れてもらえると思っていたんだね。でも、神さまのお考えとは違ったみたい。神さまのお考えは、わたしたちの思いとは違うことがあるんだよ。そんな時、「なんで！」って思うけど、神さまがされることだから、わたしたちは気づいてないけど、それが一番良いことなんだ。でも、カインさんはどうしても受け入れられなくて、心が暗くなって、最後には弟を殺してしまったんだね。わたしたちにも、「何でぼくは選ばれないの？」「なんでわたしのことはほめてくれないの？」って思って心の中がムカムカしたり、暗くなることがあります。でも、本当は、わたしたち一人ひとりのことを神さまは大切に思ったださっているんだよ。それが分からなくなると、心が暗くなってしまうんです。そんな時は、イエスさまに助けてもらおうね。わたしたちだけでは、心が暗くなってしまふことばかりだけど、わたしたちのことをぜんぶ知ってるイエスさまが、命をかけてわたしたちのことを大切に思ってくれるイエスさまが、わたしたちのことを助けてくださるから、大丈夫だよ。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。わたしたちは、嫌なことがあったり、自分は大切じゃないと思うと、心が暗くなってしまいます。そんな時も、イエスさまが助けてくださるからありがとうございます。神さまにいつもしたがうこどもになれますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

罪という悲惨さ、悲しさを知ると同時に、罪に倒されることなく、わたしたちには勝利にイエス様がいつも共にいてくださることを知る。その喜びを味わう。

〈はじめに〉

梅雨の時期に入ります。雨が降ると、日曜学校に行くより家に居るほうがいいなあと思ったりするかもしれません。日曜学校に出席した子どもたちひとりひとり、よく来たことを心から歓迎しましょう。何よりもイエス様が招いてくださり、その招きに応じて来た子どもたちをイエス様ご自身が喜んでおられるのです。親に連れられてきた、自分で来た、と子どもたちは思うかもしれません。でも事實は、神様がわたしたちの心を動かしてくださり、来るようにとしてくださったのです。その目には見えない事実を目を留めましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ① アダムさんとエバさんに二人の男の子供が与えられました。お兄さんの名前は何ですか？ 弟の名前は何かですか？
- ② 大きくなって、カインさんのお仕事は何でしたか？
- ③ アベルさんのお仕事は何でしたか？
- ④ ある日、カインさんとアベルさんは神様に捧げ物をしました。カインさんは何でしたか？ アベルさんは何をささげましたか？

〈展開例〉

神様に従わない罪は、アダムさんとエバさんの最初の子どもカインさんにも受け継がれていきました。カインさんは、何をしてしまったのでしょうか。カインさんが神様にささげた献げ物を神様が受け入れなかったので、カインさんはとっても怒り、そして、弟のアベルさんを怒りのあまり、殺してしまいましたのです。

神様に従わないという罪は、人の命まで奪ってしまう恐ろしいものです。わたしたちは人殺しはしないと思うでしょう。けれども、心の中で、あのお友だちはいやだ、きらい、と思ってしまったり、悪口を言ったり、小さいいじわるをしてしまったりします。もちろん兄弟げんかはいつも、です。ね。そういうわたしたちの心を神様はご覧になって、人殺しと同じだ、心の中でその人を殺してしまっていると、厳しく言われます。わたしたちにも神様に従わない、自分が一番、という罪があるので。

カインさんは大事な弟を殺してしまいました。神様はどう思われたでしょう。カインさんはお家を離れました。けれども、神様はカインさんがほかの人に殺されないよう守ってくださいました。今、わたしたちにはイエス様が共にいてくださいます。罪の力は大きくて、負けてしまいそうになっても、イエス様が助けてくださいます。このイエス様に信頼しましょう。

〈祈りましょう〉

神様、わたしたちは弱い子どもです。心の中で、悪いことを思ってしまったり、いじわるをしてしまいます。どうかお赦しください。今度悪い思いが出てきたら、イエス様助けてください。そして、神様に喜ばれる子どもにしてください。



〈改革派信仰の確認のために〉

前もってウ小教理第16から19問をよく読み、アダムの罪が、原罪としてカインに受け継がれ、罪の悲惨の泥沼に入っていることを確認してください。またハイデルベルク第27,28問によって、神の熟慮に基づく配剤の慰めを確認し、その信仰にとどまらなかったカインの弱さに思いをいたしてください。

〈関連聖句〉

※子どもたちと一緒に味わってください。

マタイによる福音書15章18～20節

ローマの信徒への手紙5章6～11節、16章20節

ヨハネの手紙一3章11,12節

〈恵みを立体化するための視点の提示、例話〉

※子どもたちとの対話に用いてください。

ここにあるのは人類最初の兄弟げんかであり、殺人事件です。小学校上級であれば、すでに「人が本当に憎い」という感情を経験している児童も多くいるかもしれません。罪の悲惨とは決して抽象的なものではなく、イエスやパウロが列挙するような（上記の関連聖句参照）悪しき思いにとらわれた人間が繰り広げる悲劇の数々が作り出す、憎しみの連鎖に縛られた世界です。その連鎖をスタートさせたのが、アダムの墮落であり、カインの「殺意」です。その「殺意」は、現在の小学生が抱えるそれと何ら変わることありません。その「殺意」を抱える自分は、確かに原罪を受け継いでおり、罪の悲惨の泥沼にはまっっている存在だと自覚することがなければ、救いの必要は絶対にわかりません。

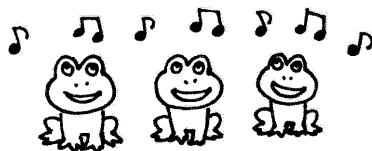
筆者が担当した聖書研究、および説教展開例によれば、このテキストにおいては、アベルのささげ物を選ぶという神のなさり方、神のみこころを受け入れることができず、この不公平な（としか彼には思えない）配剤に対する不満ゆえに心を閉ざしてしまったところに、カインの本質的な問題があると指摘されています。

この事件のように、神の御心に満足できない時に、人は罪の誘惑に落ちていくものです。どうしても買って欲しいおもちゃが買ってもらえない。だから、万引きをして手に入れる……。それを持っている友だちをねたんで、わざとおもちゃをこわす……。その子をいじめる……。借りたふりして盗む……。どれも、私が小学生の時なら考えそうな悪知恵です。誰もがカインと同じ寂しさを味わえば、カインと同じ罪を犯しかねないのです。その自分の弱さを、子どもたちと共に見つめあい、神の御心を見上げる信仰へと開かれていっていただきたいと願います。

このような弱く惨めな罪人に注がれる神の憐れみについては、筆者が担当した聖書研究の後半を参照してください。

〈祈り〉

神様、私たちはカインと同じように、原罪を受け継いでいる者たちです。カインと同じように、弱くて、信仰が足りなくて、人を殺したいという、とんでもない思いを持ってしまう者たちです。どうか、私たちを救ってください。



〈ねらい〉

罪の生み出す悲しい結末を覚え、神を求める。
※説教展開例に合わせ8節までに絞る。

〈展開例〉

①今日は罪を抱えた人類が初めて人を殺してしまったときのお話。その殺人事件は血を分けた兄弟の間で起こった。聖書朗読（4章1～2節）。二人はアダムとエバの子どもたち。兄カインは農作業をする人。弟アベルは牧畜をする人だった。あるとき、二人はそれぞれの収入から神様に感謝の献げ物をした。そのとき事件は起きた。二人の献げ物に注意しながら続きを見たい。聖書朗読（3節～4節前半）。

Q. 二人の献げ物はどんな献げ物だったか？

⇒カインは畑の収穫物。アベルは肥えた初めて生まれた羊。アベルは一番良い物を神様に献げた。カインも最高の物かどうか分からないが自分の収入から自分なりに献げ物をした。

②二人の献げ物はどうなったか。聖書朗読（4節後半～5節）。アベルの献げ物は受け入れられ、カインは受け入れられなかった。理由は書いていない。これまで神様がどんな方だったか思い出したい。神様は人と心を通わせることを求められる方だった（1章26節）。また、人がいつまでも神様を大切にできるように、簡単なルールを守るという仕方で神様を大切にする方法を与えてくださる方であった（2章17節）。そのルールで、神様を大切にする人の心をいつも確認される方だった。そして、その心を忘れたとき、その罪に厳しく判決を言い渡される方であり（3章16～19節）、同時にそんなアダムとエバさえ大切に保護する方であった（3章21節）。これがここまでの神様のお姿。心を大切にされる神様が目を留めない献げ物。それはカインの心が神様から離れていたせいかもしれない。

Q. 皆は態度や仕草だけで心が神様に向いていないときはないか？ この質問に「俺は自分なりに苦勞して神様に時間を割いている」こう思う人はいないか。そんな君を神様が相手にされなかったら、君はどう思う？ カインは激しい怒りを覚えた。「なんで俺のじゃダメなんだ！」。

③そんなカインに神様はこう言われる。聖書朗読（6節）。カインの心に何があったかわからない。だが、怒るカインの心には何か正しくない思いがあった。神様は怒りと共に神様から離れ去ろうとしているカインに「自分の心を見つめなさい」とアドバイスした。「お前の怒りは正当なものか？」しかし、カインはこの神様の言葉よりも、怒りに燃える自分の判断に従って行動を起こし、アベルを殺害する。聖書朗読（8節）。

④私たちは、初めの間アダムの墮落から芽生えた、神様の正しさを離れ、自分の判断を正当化する見苦しさ。父親アダムのように、神様の追及に自分の非を認められない悲しさ。心の深みで自分の悪に気付きながらも、正しい人を悪者にし、「あんなやつと自分は一緒に生きられない」と正しい人を排除する恐ろしさを抱えている。イエス様は自分の正しさのために人を殺す「罪」の人生から、神様のために人を生かす「愛」の人生へと私たちの未来を整えてくださる。聖書朗読（ヨハネー3章12～18節）。自分を正当化しようとする罪の深さを認め、神様を正しい方として求められるよう祈りたい。

〈祈り〉

自分を正当化する私たちの罪のために、十字架で殺されたイエス様、あなたを殺した罪が私たちの心にもあります。私たちのために命を捨てられたあなたを見つめ、人を生かすために命を献げる心を与えてください。アーメン。

テキスト 創世記 6～7章

1. 人の罪に心を痛められる神 (6:1～8)

ノアが五百歳になった頃 (5:32)、すでに人々は地上に増え広がり、自分の好むままに妻を得ていた。そこには主なる神の御心に従って生きる信仰に基づく生活はなかった。地上は人の悪で満ちていた。そのような人の状態をご覧になった主は、地上から人を拭い去ることをお決めになられた (6:7)。

「人の一生は百二十年となった」 (6:3)。洪水の後に生まれた人々の寿命が五百年弱になり (11:10以下)、バベルの塔の出来事の後、さらに二百年弱になる (11:19以下) ので、人の寿命のことと見る見方もあるが、通常、6章冒頭で主が洪水による裁きをお語りになってから、人間に対する猶予の期間として120年が与えられた、と見られている。

「ネフィリム」 (6:4) は、「落ちる、倒れる」という意味の言葉からきている。「他の人々と共通な水準からかけ離れた、ほしいままに凶暴な振舞いをする人々がいた」(カルヴァン)ということ、自分の力に頼り、神を畏れることのない思い上がった者たちのこと。

主は「地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた」 (6:6)。主は人のように自分のしたことを悔やんで嘆くということはない (民数23:19)。しかし、主は人のなす悪事に大変心を痛められた。主は人の罪を何とも思わないなどということはないのであって、罪を嫌われる。それを表わすために後悔し、心を痛められた、と表現される (エフェソ4:30)。

2. 神と共に歩んだノア (6:9～7:5)

「その世代の中で、ノアは神に従う無垢な人」 (6:9) であった (エゼキエル14:14参照)。「無垢な」という日本語では、「混じりものがない、汚れがない」という面が強調され、ノアが一心に主を求めた信仰の姿勢が示されている。ノアは、エノク (5:24) と同様「神と共に歩んだ」。神はエノクを

取られたが、ノアには大変な苦勞をして箱舟を造り、生き延びよう命じられる。神と共に歩む人生は多様である。神は時を支配しておられる。すべての肉なるものを滅ぼし絶やすことをノアに知らせ、箱舟の建造を命じられた。

「アンマ」は、肘から中指までの長さで、約45cm。それで計算すると箱舟は長さ約135m、幅約22.5m、高さ13.5m。

神はノアと契約を立てられた (6:18)。ノアは神に従う人であったが、一連の出来事はノアの正しさではなく、神の御心に基づいており、神の確かな契約に根拠がある。

神はノアに、妻子と嫁たちと共に箱舟に入り、その他すべて命あるものから一つがいつ箱舟に入れるよう命じられる (6:19)。さらに、清い動物と空の鳥については七つがいつ取るよう命じられる (7:3)。清い動物と清くない動物は、主が区別される (レビ記11章)。

3. 洪水 (7:6～24)

主が名指して選ばれた者だけが箱舟に入れる。これは再三記される (6:18, 7:7, 13)。他の人々は、「神が忍耐して待っておられたのに従わなかった」 (ペトロ前3:20)。

「主は、ノアの後ろで戸を閉ざされた」 (7:16)。箱舟の中と外は主が明確に区別しておられる。人がそれを開けることはできない。主イエスは、ご自身が再び来られる時のことを、ノアの時と同じだと言われ、目を覚ましているようにとお命じになった (マタイ24:37～39)。

神の前にはなほだしく墮落していたのは人間であったが、神は「地の表にいた生き物はすべて、ぬぐい去られた」 (7:23)。人の罪により大地に住むものも滅ぼされる。人が神の前に与えられた立場が非常に重い。「被造物は神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいる」 (ローマ8:19～22参照)。(久保田証一)

テキスト 創世記 6～7章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問7～21

〔単元のねらい〕

最初の間が神様に背いて以来、人間は、神様からますます離れ、自分勝手に生きるようになっていった。そんな罪人であふれる大地を神様は大洪水によってぬぐわれることになさったが、決して、無情な独裁者のように大地を裁かれたのでないことをおぼえたい。さらに、御自身の約束への忠実さから、ノアとその家族を選ばれて、大洪水から救われ、女の子孫へと続く血筋を保ってくださったことをおぼえたい。

「神さまといっしょに歩むノアさん」

愛する子どもたち、おはようございます。
今は梅雨。今日も、雨の日曜日になりました。先生が、みんなの頃は、梅雨と言えば、雨が、シトシト、ずっと降っていました。けれども、最近、雨がザーザー降ったかと思うと、すぐにカーッと晴れて、太陽が顔をのぞかせたりします。時にはバケツをひっくり返したような土砂降りの時もあります。そのため、川やドブが雨水であふれて、洪水になって、お家が流されたり、つかってしまうことがあります。けれども、何十日も、二十四時間、大雨なんてことは経験したことがありませんよね。ところが、今日の聖書には、昔々の大昔、雨が、四十日四十夜も降り続いて(7:12)、大洪水が百五十日も続いた(7:24)と書き留められているのです。

さて、神さまに造られたアダムさんとエバさんが、罪を犯して、神さまなんか知らない! になってしまったから、何年ぐらい経ったのでしょうか? 人間が増えて、大地のいろんな所に住むようになりました。ところが、人間は、神さまなんか知らない! という罪の状態ですから、人間が増えて、大地のあちらこちらにひろがって行くということは、それだけ、人間の罪が増えて、罪が大地を覆って行くということでもありました。その人間の罪深い行いの一つが、男の人が自分で選んだ女の人を妻にすることでした。

でも、結婚というのは、出会ったお互い同士が

好きになって、この人を私の夫にしよう、この人を私の妻にしようと、自分で選んでいっしょになるわけだから、別に悪いことではないのでは? と思うかも知れません。だけど、この時、人々は、神さまを抜きにして、結婚していたんだ。この神さま抜きが大問題なんです。それで、この神さま抜きは、何も、結婚だけではなかったわけです。何をするにも、神さまなんかいらない! 自分一人で、何でも決めたり、したりできるんだ! そういう態度だったのです。

神さまは、御自身に似せて人間を造られ、愛されました。それは、人間が罪を犯してからもそうでした。ですから、人々が、そんな状態になってしまっていたので、神さまは、とても心を痛められました。それで、神さまは、心に痛みをおぼえられながら、大地から、人間の罪とその影響を大洪水によってぬぐうことになさったのです。「わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう。人だけでなく、家畜も這うものも空の鳥も。わたしはこれらを造ったことを後悔する」(6:7)。

しかし、神さまは、罪深い全ての人間、或いは、全ての生き物を大地からぬぐってしまわれることが御心ではありませんでした。神さまのお約束を思い出しましょう。「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き／お前は彼のかかとを砕く」(創3:15)。

ところで、神さまは、どうして、信頼すること

ができるのでしょうか。「信仰」や「信頼」の“信”という字を辞書で調べると、信じるというこちら側のことよりも前に、信じる相手側のこと、つまり、「約束にそむかないように行動する」という意味が第一にあげられています。神さまこそ、まさにお約束通りに行動なさるお方です。だからこそ、心から信頼できるのです。

神さまは、人間の中の一人、ノアさんを御心に留められました(6:8)。このノアさんのことが、こう言われています。「その世代の中で、ノアは神に従う無垢な人であった。ノアは神と共に歩んだ」(6:9)。ノアさんは、お約束に忠実な神さまに信頼し従って生活していたのです。それなら、ノアさんがそうだったからこそ、神さまは、ノアさんに御心を留められたのでしょうか。いいえ、ノアさんも、罪人の一人でした。しかし、憐れみ豊かな神さまは、御心のままに、そんな罪人の一人、ノアさんを選ばれたのでした。「しかし、ノアは主の好意を得た」(6:8)。まず、神さまが、ノアさんを選ばれ、彼といっしょに歩もうと決められたのです。だからこそ、ノアさんは、神さまに信頼し従って生活できたのです。神さまといっしょに歩めたのです。

神さまは、ノアさんに箱舟を造るようにお命じになりました(6:14~16)。みんなに馴染みのない、「アンマ」という単位が使われています。約45センチです。それで、メートルに直すと、箱舟は、長さが約140メートル、幅が約23メートル、高さが約14メートル。大きなビルを横にした感じでしょうか。神さまは、かなり細かい指示を出されました。さらに神さまは、箱舟には、奥さんと子どものセムさん、ハムさん、ヤフェトさんとそれぞれの奥さんたち、そして、生き物のオスとメス、ワンペアーずつ入れなさいとお命じになりました(6:18~20, 7:2~3)。神さまのご命令は本当に細かいものでしたが、ノアさんは、全部、神さまがおっしゃった通りにしました(6:22)。このように神さまは、とても細かいご命令を出されました

が、それは、神さまが、ノアさん一家を大洪水から救われるために、本当にきめ細かく御心をかけておこなってくださったということです。救いのために必要なことは全て、神さまがおこなってくださったということです。ですから、ノアさんは、神さまがおっしゃるままにするだけで、大洪水から救われるのです。

雨が降り始めて、洪水が起こり始める中で、完成した箱舟の中へと大移動が行われました。神さまがお命じになられたように、全ての生き物ワンペアーが入ると、神さまが箱舟の戸を閉ざされました(7:16)。ここからも、神さまが、救いのために必要なことを全ておこなってくださったのだと知ることができます。そして、神さまの予告通りに、雨が、四十日四十夜も降り続き、大洪水が百五十日も続きました。水の勢いがすごい時には、高い山さえ、すっぽりと覆われるぐらいでした。地球の表面がまさに海ようになってしまって、ノアさんの箱舟がプカプカ浮いているような状態でした(7:17~20)。こうして、地上の生き物は、人はもちろんですが、家畜、這うもの、空の鳥に至るまで、大地からぬぐい去られたのです。しかし、神さまがおっしゃるままに、箱舟に入ったノアさん一家と、全ての生き物ワンペアーだけは、救われたのでした。神さまといっしょに歩むこと、それは、ノアさんのように、神さまに信頼し従って生活することです。特にノアさんは、神さまがおっしゃる通りにすることで、神さまなんか知らない!という罪への裁きとしての大洪水から救われました。今のみんなにとって必要なのは、やはり、神さまがおっしゃる通りに、神さまがお与えくださった最後の裁きからの救い主イエスさまを信じること、イエスさまに信頼し従うことです。神さまはノアさん一家を大洪水から救われるため、その救いに必要なことを全ておこなってくださったように、最後の裁きからのみんなの救いのために必要な全てことも、イエスさまによっておこなってくださったのです。(長谷川 潤)

[今週の暗唱聖句] 創世記 6章9節

ノアは神と共に歩んだ。

〈ねらい〉

わたしたちの救いに必要なことはすべてイエスさまがしてくださったことに感謝して、イエスさまと共に歩みだす。

〈さんび〉

いのちのこぼれ『ブレイズワールド』、15「歩こうイエスの道を」

〈すいせんとしよ〉

日本聖書協会・みんなの聖書絵本シリーズ13『ノアのはこぶね』

〈おはなし展開例〉

最初の家族が暮らしていたころから、しばらくたって、たくさんの人が住むようになりました。でも、その人たちは、また神さまから離れて、自分勝手に生きるようになりました。結婚する相手も、「あの子かわいい」とか「あの人お金もちだから」とか、勝手に自分の思い通りの人を選んで結婚していました。「えー？ なんでいけないの？」と思うかな？ 結婚する相手も、神さまにちゃんと聞いてからすると、幸せになれるんだよ。でも、この時代の人たちは、神さまのことを無視して勝手なことをしていました。神さまは、とっても悲しまれました。こんなことなら、人間を造らなければよかったかなあ……なんて思うほどでした。

そんな中でも、神さまにしたがって歩んでいた人がいました。ノアさんという人です。このお名前、どこかで聞いたことがあるかな？ ノアさんは、神さまの言われることをよく聞いて、神さまと共に歩んだ人でした。神さまは、ノアさんに、箱舟を造って、ノアさんの家族と、動物のオスと

メスを一組づつ舟に乗せるように言いました。ノアさんは言われたとおりにしました。ノアさん家族と動物たちが舟に入った後、七日後に、雨がザーザー降ってきて、40日も続きました。大変なことが起こったんです。住んでいた場所も人も水に流されてしまいました。水は、木や山よりも高くなって、みんな水の下に入り込んでしまったんです。箱舟に入ったノアさん家族と動物たちだけが、水の上に浮かんでいたの、助かりました。神さまが怒るとすごいことが起こるんです。

ノアさんたちが助かったのは、ノアさんがどうやったら助かるかをいっしょうけんめい考えたからだっけ。そうじゃないね。神さまがノアさんを大切に思いました。そして、ノアさんは神さまに言われるとおりにしていただけでした。あとは、神さまが全部してくださいました。わたしたちのことも、神さまはとても大切に思ってくださっています。だから、イエスさまがわたしたちの救いのためにしなければならないことは全部してくださったんです。わたしたちは、イエス様のお舟に乗って、イエスさまといっしょに、神さまの言われるとおりに歩いていけばいいんだね。そうしたら、まちがった道に行かずにすむんだね。わたしたちみんなでイエスさまのお舟に乗ってれば安心だね。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。わたしたちのことを大切にしてくださってありがとうございます。イエスさまのお舟にのって、これからもイエスさまといっしょに神さまの言葉をよく聞いてその通りに歩いて行けますように。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

ノアさんがどのように神様に従った人なのか、そしてわたしたちも神様を愛し、従う子どもとして、この一週間実行ができますように、チャレンジしましょう。

〈み言葉に聴きましょう〉

- ① アダムさんとエバさんからカインさんとアベルさんが生まれ、またその子どもが生まれ、また生まれ、この世界に人間がたくさんたくさん増えてきました。そして、神様に従わない自分勝手な人がどんどん増えてきました。それを見た神様は、どう思われたでしょう？
- ② 悪い人がたくさんいて、神様は神様が造られたこの世界から、人も動物も全部一度なくしてしまおうと思われました。でも一人だけ、神様が大事にしてくださった人がいました。誰ですか？
- ③ どうして、ノアさんは神様から大事に思われていたのですか？
- ④ 神様はノアさんに何を作りなさいと言われてましたか？
- ⑤ ノアさんは言うとおりにしましたか？

〈展開例〉

ノアさんは、神様が言われるとおりに箱舟を造り、ノアさんの家族と、全部の種類生き物のオスとメスを集めて、みんなで箱舟に乗りました。神様がその箱舟の扉をお閉めになりました。それから

毎日毎日、雨が降り続けて、どんどん水が増えてきて、人も生き物もお家も、木も山も全部水の中に沈んでしまいました。40日間、雨が降り続けました。その箱舟の中にいるノアさんとその家族と生き物は、150日間ずっと船の中において、助かりました。

ノアさんは神様に愛されて、神様と共に歩む人でした。どんなにお友だちが、箱舟を造るノアさんやその家族をバカにして笑っても、反対しても、神様の言われるとおりに従いました。このままでほんとうにいいのだろうか、本当に雨なんて降るのだろうか、って思ったこともあったかもしれませんが。でも毎日、トントンかなづちをうちながら、箱舟を造り続けました。毎日神様に信頼して、毎日神様の言われるとおりにしました。

ヨハネによる福音書14章15節、「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしのおきてを守る」。……「ノアさん、あなたはわたしを愛しているならば、わたしのおきてを守る」。神様はノアさんにおっしゃいます。ノアさんはそのとおりにしました。わたしたちにも、今日、神様は、「……ちゃん、あなたはわたしを愛しているならば、わたしのおきてを守りますね」と言われます。この一週間、学校でお家でわたしたちは神様にどういう風に従っていきましょうか？ 考えてみましょう。

〈祈りましょう〉

神様、わたしたちを愛してくださりありがとうございます。神様の愛にこたえて、わたしたちも学校で、お家で、お友だちの中で、神様に従っていく力をお与えください。神様の愛を伝える子どもにしてください。



〈改革派信仰の確認のために〉

前もってハイデルベルク第10問をよく読んで、人間の罪を赦すことのできない、裁き主なる神の怒りへの恐れ（畏れ）を確認してください。

〈関連聖句〉

※子どもたちと一緒に味わってください。

エゼキエル書14章12～14節

マタイによる福音書24章36～44節

ヘブライ人への手紙11章7節

ペトロの手紙一3章20, 21節

ペトロの手紙二2章4～10a節

〈恵みを立体化するための視点の提示、例話〉

※子どもたちとの対話に用いてください。

「すべて肉なるものを終わらせる時がわたしの前に来ている。彼らのゆえに不法が地に満ちている。見よ、わたしは地もろとも彼らを滅ぼす(6:13)」との神の言葉が、圧倒的な迫力を持っています。

神はアルファでありオメガである方です。この世界と私たち一人ひとりの人生にはじまりを与えてくださった方は、まったく自由な御心によって、終わりをも与えたもう方です。そしてその、神がもたらされる「終わり」は、本来私たちにとって恐怖でしかないのです。私たちの不法については、ここ数回の学びによって十分な自覚がなされていると思います。心まで見通される神の鋭いまなざしの前では、すべて肉なる者は、永遠の滅びにのみ備えます。ノアの洪水は、そんな神の裁きのイメージを与えてくれます（マタイ24:36-44）。子どもたちと共に、その時の到来について、思いを

めぐらし、悔い改めの時としてください。そのような滅びに定められた者たちが、ただキリストの十字架の恵みによってのみ、救われているのです。

ノアの無垢さについても思いを向けましょう。「無垢（タミーム）」は、「完全、欠けのなさ、非の打ち所のないこと、充実、一心、誠実、一途……」といった意味合いを含む語です。神にひたすら信頼し、ひたむきに神に仕え、そのことで心満たされて十分な人。それは、神を疑うがゆえに悪魔の誘惑に乗ってしまった、アダムとエバとは対照的なありようです。

聖書に書かれてないことを想像するのは危険ですが、箱舟を作りながら、ノアが周囲の不法ものたちからどんな誹謗中傷を浴びたことだろうかなどと、どうしても考えてしまいます。誰にも理解されず、キチガイ扱いされながらも、神の言葉だけを信じて、せっせと箱舟を作ったノア。信仰の生涯には、ある意味でそのような、愚直さが必要であることを思います。そんな「幼子のような信仰」を、私たちが失いつつありはしないか、子どもたちと共に顧みてください。

〈祈り〉

神様、あなたは私たちの罪をお怒りになる方だと知りました。でもイエス様の十字架の恵みによって、私たちは永遠の滅びから救われたことを感謝します。神様が最後の審判をなさる時が、今日にも来るかもしれないことを思いながら、いつも目を覚まして、ノアのように、ひたむきにあなたに信頼して歩むことができますように、導いてください。



〈ねらい〉

罪に崩れる人間ですら憐れまれる主が、神様と歩む者を救いへと入れてくださることを信じる。

※長いのでいくつかのポイントだけを読む。「神の約束」については次週「ノアの契約」で扱う。

〈展開例〉

①先週までの分級でこんなことを学んできた。神様が全世界を創られたこと。人間はその世界で最高に祝福されていたこと。でも人間は神様を裏切り、神様から離れようとする「罪」を抱えてしまったこと。この「罪」が神様との関係、人間関係、世界との関係を歪めてしまったこと。

②神様が造られた世界はその後どうなったか？ 聖書朗読（6章5,11節）。悪に染まった世界。戦いがあったかもしれない。盗みがあったかもしれない。強い人や悪賢い人が甘い汁を吸って、弱い人が家や食べ物を奪われる世界だったかもしれない。神様はそんな世界を御覧になって後悔された。そして、神様は悲しい決断をされる。

③聖書朗読（6章7,13,7章17～24節）。「洪水によって人間が減ぼされる」。聞いて気分の良い言葉じゃない。「かわいそう」「ひどい」。こんな思いもあるかもしれない。アダムへの神様の裁きのときも言ったように、被害者は神様。ひどいのは人間。皆が「かわいそう」と思う以上に、神様は心を痛められた。聖書朗読（6章6節）。

Q. 神様の気持ちを想像してみよう。例) 神様の心はどんな風に痛んだのだろうか？ みんなが、将来、裁判官の仕事に就いたとする。そして君の子どもが死刑になるような犯罪を毎日繰り返していたとしよう。親として当然、我が身のように大切な子どもである。しかし、裁判官である君は自分の子どもの罪を明らかにし、刑罰を宣告しなくてはならない。どれほど悪に染まっても我が子はかわいい。たとえ正義のためとは

言え心の潰れるような思いがする。まして親以上に人を愛される神様はどれほど心を痛めたことだろう。

④生きていて当然の人間が減ぼされるのではない。神様は、減んで当然の人間たちを悲しく思われ救いへ招かれた。すべてが悪と思われる時代で、神様はノアと共に歩みノアを導かれた。そして、ノアが子どもと一緒に神様とやり直すために世界を完全には減ぼされなかった。

Q. ノアとはどんな人か？ 聖書朗読（6章8～10節）。「無垢」とは混じりモノの無い純粹さ。ノアは神様にピュアに従うシンプルな信仰者だった。聖書朗読（6章18～22節）。100mを超えるバカでかい船の建造。一見、無茶な神様の言葉、約束を信じて、シンプルにノアは聞き従う。神様に救われる人とは、そんな信仰の人だった。この信仰によって家族にも救いが差し出された。

⑤皆はどうだろう？ 私たちもイエス様を船長とする、「教会という船」のクルー（船員）になるように命じられている。そして、イエス様の約束を信じる者はすべてキリストの家族とされて滅びを免れる。神様は、毎週の礼拝や毎日の礼拝をとおして、私たちと共に歩んでこのような信仰を私たちに整えてくださる。悪に染まりきった人間を悲しまれる神様が、一人でも教会のクルーを増やしてくださるように、そして私たち自身が船から降りることのないよう祈りたい。

〈祈り〉

ノアに信じる心を与えて救いに導かれた神様。この世界は相変わらずあなたを悲しませ続けています。どうか、あなたを悲しませてばかりのこの私と、この世界にあなたに従う心をつくりあげてください。アーメン。

1. 洪水の終わり (8:1～22)

「御心に留め」(8:1)。神が箱舟の中のすべてのものに御心を留めてくださっていたので、何ヶ月のもの間、無事に守られた。箱舟の頑丈さや堅固さによりどこがあるのではない。

「深淵の源と天の窓が閉じられた」(8:2)。降水量がどれほどかという、今日の自然科学的な観点から見るのではなく、神によって雨が降り洪水が起こったことを示す、聖書が記された当時の詩的表現と見ればよい。

「第七の月の十七日」、「第十の月の一日」(8:4, 5)。ノアの生涯の第六百年の七ヶ月目と十ヶ月目。「百五十日の後」は、雨が降り始めた第二の月から数えたもの。箱舟はアララト山の上に留まり、その後約二ヶ月半で山々の頂が現れた。アララト山(山々)は、通説では現在のアルメニヤ地方の一つの峰とされるが諸説がある。

ノアは鳥、鳩を順に放って水が引いたかどうかを調べたが、神が箱舟から出るようにお命じになるまでは出なかった。ノアの六百一歳の第二の月の二十七日に地はすっかり乾いた。雨の降り始めから約一年経過。ノアは外へ出てからまず祭壇を築き、主を礼拝した。清い動物と鳥とは七つがいつづ取っていたので、その中から焼き尽くす献げ物として主にささげた。

洪水が起こって箱舟の中にいたもの以外はみな滅ぼされたが、なお、洪水以前との連続性がある。人が心に思うことは幼いときから悪い。その理由によりこのたびの洪水によるような仕方生き物を打つことを主はなさらない(9:11)。「地が続くかぎり」(8:22)この地は保たれ、季節も夜昼も繰り返されるが、それを終わらせる時の来ことも暗示される(ペトロ二3:5～7)。

2. 神の祝福 (9:1～7)

「産めよ、増えよ、地に満ちよ」(9:1)。神は天地創造の時と同じことを言われた(1:28)。動いている命あるものはみな人の食糧としてよいと神

は言われた。しかし「血」についてはその重要性が教えられる(レビ17:10～14参照)。人の血は特別で、その代価は命である。人が神にかたどって造られたからである(1:26, 27)。他の動物はそれぞれに地が生み出すように神は命じられたが(1:24)、人には神のかたちが与えられた。神と言葉により対話をする者、神に似たものとして人は造られた。人は「神に僅かに劣る」(詩編8:6)とまで言われる。人が産み、増え、地に満ちることは神の祝福そのものである。しかし、命である血が流されることについて、賠償には命が要求されることを人は忘れてはならない。

3. 虹の契約 (9:8～17)

神は、ノアたちと、後に続く子孫と契約を立てられた。ノアの時代だけでなく、全世界が、地の続く限りこの神の契約の下にある。局地的な洪水は世界中でしばしば起こっているが、全世界に及ぶ洪水によって神が地を滅ぼすことは二度とない。

神が洪水によって人と生き物を打たれたこと、再度産めよ、増えよ、という御言葉が与えられたことによって、この世界に住む人間がどんなに悪くても、神の御心によってこの世界が保たれていることが示されている(すべての被造物の保持。ウェストミンスター信仰告白第5章1節参照)。

その契約のしるしとして神は虹を雲の中に置かれた。これは「永遠の契約」であり、神が一方向的に人とすべての生き物、大地に対してお立てになった約束である。人以外のものは、神の言葉を理解するわけではないし、人も幼い時から心に思うことは悪いのである。それゆえ、この契約は神の一方向的な、この世界に対する御心の宣言として与えられている。

これによって、神の救いの御業が歴史の中で展開してゆくための舞台が、地の続く限りは保たれていくことが明らかとなった。(久保田証一)

テキスト 創世記 8章1節～9章17節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問1～2

〔単元のねらい〕

梅雨の季節である。この季節、よく見る虹に、どのような救済史的な意味があるのかを教えたい。そして、御自身の約束に忠実な神様へと信頼して生きることを勧めたい。さらに神様が、罪人に対して、いかに憐れみ豊かであるかも教えて、今が、罪を犯し続ける私たちにとって、どのように生きる時なのかを教えたい。できれば、信仰告白をしていない子どもたちに対しても、どうする時なのかを教えて、信仰告白・受洗への勧めをしたい。

「あわれみ豊かな神さまに信頼しよう」

愛する子どもたち、おはようございます。

今は梅雨の季節で、雨や曇り空の日が多いけれど、先生が、いつも、この季節になると、とても楽しみにしていることがあります。それは、雨が降っている時、雲の間から太陽が顔をちらっとのぞかせることがあると、お空にかかるもの、そう、虹です。虹がどこかにかかっていないかなあと、高い所に登って、辺りを見回すのですが、虹を見つけると、心の中が曇っている時なんか、何だか、心が明るくなるのを感じます。虹を見つけて、そんな気持ちになるのは、先生だけでしょうか？

先週は、神さまが、ノアさん一家を大洪水から救ってくださったお話しをしました。今日は、その続きです。雨による水の勢いは、百五十日も続きました。その後、神さまは、風を吹かせられ、雨が止むようになさいました。すると、地上から、だんだん、お水がひいて行きました。そして、ノアさんの箱舟は、アララトというお山の上で止まりました（以上8:1～5）。ノアさんは、地上が元の状態に戻るまで、箱舟の中にずっといて、中から様子確かめることをしました。それで、最初は、からすを飛ばしました。だけど、からすは出たり入ったりしました。まだ、箱舟から出る時ではありません。七日経って、今度は、はとを飛ばしました。だけど、そのはとも戻って来ました。やはり、まだ、箱舟から出る時ではありません。さらに七日経って、もう一度、はとを飛ばしまし

た。そうしたら、今度は、オリーブの葉っぱをくわえて、戻って来ました。水がひいて、地面にオリーブの木が生えている証拠です。しかし、ノアさんは、がまんしました。もう七日経って、はとを飛ばしました。すると、もう、はとは帰って来ませんでした。それで、ノアさんは、ついに箱舟から出る時が来たことを知りました（以上8:6～12）。しかし、ノアさんは、自分の判断でなく、やはり、神さまがおっしゃる通りにしました。「さあ、あなたもあなたの妻も、息子も嫁も、皆一緒に箱舟から出なさい。すべて肉なるものうちからあなたのもとに来たすべての動物、鳥も家畜も地を這うものも一緒に連れ出し、地に群がり、地上で子を産み、増えるようにしなさい」（8:16,17）。

ノアさんは、箱舟を出ると、さっそく、祭壇をつくって、そこで、神さまを礼拝しました。大洪水から救ってくださった神さまに感謝、ありがとうの礼拝をおさげしたのです。すると、神さまは、ノアさんとお約束くださいました。「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない」

(9:9～11)。

これは、今後、神さまが大雨による大洪水を起こされることは決してないというお約束ではありません。ノアさんの時のような大洪水、高い山さえ、すっぽりと覆われるぐらいの大洪水によって、地上を滅ぼすようなことは、二度とないというお約束なのです。それで、このお約束が確かであることの目に見えるしるしとして、虹をお与えになると、神さまはおっしゃいました(9:14)。ですから、お空に虹がかかった時、私たち、ほくたちは、ノアさんを通じて人間にお与えくださった、このお約束を思い出しましょう。虹を見ながら、特にその神さまのお約束が確かなことを思い出しましょう。神さまは、ご自分がなされたお約束をご自分から破るようなお方ではありません。先週も、お話ししたように、神さまこそ、まさにお約束通りに行動なさるお方でいらっしゃいます。だからこそ、心から信頼できるのです。

それで、その神さまがこうおっしゃたことを心に留めましょう。第8章に戻りますが、神さまはこうおっしゃいました。「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい」(8:21)。このように神さまがおっしゃる通り、今でも、人が心に思うことは悪いのです。神さまなんか知らない！ 神さまなんか知らない！ という思いなのです。どんなにかわいい赤ちゃんだって、そうなのです。神さまとの関係では、罪人なのです。だけど、そんな人間でいっぱい大地だけれども、ノアの時のような大洪水によって大地をぬ

ぐうことはすまいとお約束くださったのです。そして、今、神さまは、このお約束を守ってくださるのです。

しかし、続けて、こうおっしゃったことにも心を留めましょう。「地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも／寒さも暑さも、夏も冬も／昼も夜も、やむことはない」(8:22)。「地の続くかぎり」とあります。やがて、地が終わる時が来ることが示されています。最後の裁き(最後の審判)の時です。この時は、ノアの時のような大洪水ではなく、イエスさまご自身が裁きを行われ、大地から罪をぬぐわれるのです。そういう時を神さまは必ずお与えくださいます。その時まで、神さまは、たとえば、大地が、心に悪いことを思う人でいっぱいであつたとしても、忍耐してくださるのです。そして、この大地に住むご自分の子どもたちが、悔い改めて、ご自分に立ち帰って来るのを待ってくださるのです(ペトロ二3:9)。

私たち、ほくたちは、イエスさまを信じる信仰を与えられていても、神さまなんか知らない！ という悪い思いが起こって、つい、神さまに背中を向けて、神さまから離れてしまいます。しかし、そんな時は、恐れることなく、神さまに立ち帰りましょう。神さまは、そんな私たち、ほくたちの罪を赦すためにこそ、愛する独り子イエスさまに私たち、ほくたちの罪を全部背負わせて、私たち、ほくたちの代わりに、イエスさまを十字架で裁いてくださったのです。罪人に対して本当に憐れみ豊かな神さまに信頼して、神さまのみもとに立ち帰って、赦しをいただきましょう。(長谷川 潤)

[今週の暗唱聖句]

創世記 8章21節

人に対して大地を呪うことは二度とすまい。

人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。



〈ねらい〉

憐れみ深い神さまは、二度と世界を滅ぼさない約束をしてくださったことを知り、世界が回復に向かっていることに希望をもつ。

〈さんび〉

いのちのこば社『プレイズワールド』、30「いっしょにうたおう」

〈すいせんとしよ〉

日本聖書協会・みんなの聖書絵本シリーズ13『ノアのはこぶね』

〈おはなし展開例〉

みんなは、ブロックでかっこいい戦車を作っていたのに、お友だちに壊されたらどう思う？ とっても悲しいし、お友だちに「どうしてこんなことするの！」って怒りたくなるね。もし大切にしていたベットが急に事故で死んでしまったらどうかな。「なんでこんな悲しいことが起こるの？」って思うかもしれない。神さまはどうしてそんな悲しいことをされるんだろうって思うかもしれないね。世界中にも、悲しいことがたくさん起こっています。大きな地震や戦争で、お家がなくなったり、家族が亡くなってしまったりして悲しんでいる人たちがたくさんいるんです。神さまは、悲しんでいる僕たちわたしたちを見捨ててしまわれたのかな？

ノアさんの洪水のお話を聞いたよね。神さまは、神さまの言うことをきかずに勝手なことばかりする人間に対して、怒りました。そして大洪水でノアさんの家族以外はみんな流されてしまったんだよね。でも、その後神さまは、もうこれから

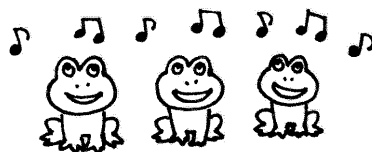
はこういうことは起こりませんって約束してくださいました。悪いのは人間なのに、神さまのほうに先に赦してくださったんです。ありがたいね。

みんなは虹って見たことあるかな？ たくさん雨が降った後、時々お空にかかっているのが見えます。この虹は、神さまがわたしたちにしてくださった約束を思い出すために見せてくださるしるしです。虹を見るたびに、神さまはこれからわたしたちを守ってくださるということを思い出そうね。

そして、神さまはわたしたちやこの世界がよくなることを願っています。わたしたちの心は色々なことが起こると悲しくなったり、暗くなったりしますね。世界にも悲しい事がたくさんあります。でも、神さまはわたしたちを悲しませようと思っているのではないんです。わたしたちの力で世界を良くするんじゃなくて、すべて良いものを与えてくださる神さまがわたしたちを幸せにしてくださいるんだってこと、世界中の人たちを幸せにしてくださいるんだってことを信じてほしいと願っているんだ。死んでいたのによみがえってくださったイエスさまの力でどんなに悲しい時もわたしたちを笑顔にしてくださいる神さまを信じて、これからも歩んでいきましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。わたしたちを大切にしてくださいあってありがとうございます。どんなに悲しいことがあっても、神さまを信じて、顔をあげて歩いていけますように。悲しんでいるお友だちがいたら、神さまが助けてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

神様は、神様に従うノアさんを祝福してください。そして、契約を結んでくださった。神様の一方的な恵みの契約として、もう二度と、この全地を滅ぼすことはしないと約束くださった神様の愛を覚えよう。

〈はじめに〉

ノアの箱舟の話は、何度も聞いていたり、本を読んで子どもたちはよく知っていると思います。先生がお話するまでもなく、子どもたちが先に先に話を進めてしまう場合もあります。静かにお話を聞かせるのも一つですが、子どもたちと対話をしながら、深めていくのも良い方法でしょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①水の上を浮かんでいた箱舟には誰が乗っていましたか？
- ②だんだんと水が減りはじめました。ノアさんは箱舟の窓を開いて、水がすっかり乾いているかどうか確かめるために、カラスを飛ばしました。カラスは帰ってきましたか？
- ③次に鳩を飛ばしました。帰ってきましたか？
- ④もう一度鳩を飛ばしました。何の葉っぱを加えて帰ってきましたか？
- ⑤もう一度飛ばした鳩は帰ってきませんでした。みんな箱舟から出ました。最初にノアさんと家族がしたことは何ですか？

〈展開例〉

箱舟から出たノアさんとその家族は、まず、神様を礼拝しました。そして神様は、もう二度と大地を呪うことはしません、とお約束されました。そのお約束のしるしに神様は「虹」を置かれました。

虹を見たことはありますか？ なかなか見ることはできませんが、雨がたくさん降って、さっと雨が上がって、青空が見えるとき、お空に虹がかかっているか、今度探してみてください。そして、虹を見たら、この神様のお約束を思い出しましょう。もう二度全地を神様は滅ぼすことはしません。ノアさんたちが助けられて、ずいぶん長い時間がたちました。神様は、これまでずっとお約束を守ってくださっています。

けれども、わたしたちはどうでしょう。わたしたちは神様のお約束を守らず、悪いことを繰り返しています。神様はイエス様をお送りくださり、イエス様がわたしたちの代わりに十字架にかかって、その罪の身代わりに死んでくださり、神様の怒りを代わりに受けてくださったために、それを信じるわたしたちは赦されています。

今度、虹を見たら、神様の大きな愛は本当だ！ときっと思うでしょう。

〈祈りましょう〉

神様、ノアさんたちのお約束を、今もお守りくださり、今も、わたしたちをイエス様の十字架のゆえにお赦し下さってありがとうございます。神様の大きな愛をもっともっと知ることが出来るようにしてください。



〈改革派信仰の確認のために〉

この「ノア契約」は、改革派契約神学においては、アブラハムに始まる明確に救済的性質を持つ「恵みの契約」の前提であり、その準備だと理解されます。「地を滅ぼさない」という約束であって、「地を救う」とはまだ言われていないのですが、それを志向しているのです。

神は怒りを抑制し、罪によって歪んでしまった創造世界と、ノアの家族から再スタートする罪人の歴史を保持されると約束してくださいました。これを一般恩恵と言って、キリストを信じる者にもそうでない者にも等しく注がれている神の恵みです。この一般恩恵は、特別恩恵による「救い」の前提です。例えば筆者の場合、非キリスト者として自堕落に生きましたが、滅ぼされることなく生かされたゆえに、22歳の時にキリストとの出会いが与えられました。また、異教徒の家で生まれ育ちましたが、適切な教育と親の愛によって生まれ、まことの神を求める心や、神の言葉を理解するための最低限の知性をも養われました。そういう前提的な恵みを与えられていたからこそ、罪からの救いという特別な恵みにあずかることもできたのです。神は今もそのようにして、罪深い人間の歴史と文化を滅ぼすことなく保持され、救われるべき人々の悔い改めを待っておられます。

〈関連聖句〉

※子どもたちと一緒に味わってください。

イザヤ書54章4～10節

ペトロの手紙一 3章8、9節

〈恵みを立体化するための視点の提示、例話〉

※子どもたちとの対話に用いてください。

「人が心に思うことは、幼い時から悪いのだ」と言われるように、聖なる神の前では誰もごまかしがなくて「悪い」のです。純粹無垢であるかのような「幼い」児童たちであっても、心の腐敗

を見抜かれています。しかし神は、そんな罪人に対する裁きを徹底させることはなさらず、終わりの時まで「滅ぼさない」と約束してくださいました。説教展開例にあるように、神の忍耐を覚えましょう。放蕩息子の帰郷を待つ父親のたとえを引き合いに出すと、よいかもかもしれません。バカ息子に怒りを覚えていないわけではないでしょう。しかし怒りにまざる父の憐れみゆえに、息子は勘当されることなく、父の胸元に帰ることがゆるされるのです。

また神の忍耐とは、怒りの抑制というだけではありません。神は私たちが罪の悲惨に苦しむのを、耐え難い思いで見られておられるのだということを、子どもたちに伝えてください。

人間は、そんな神の思いなど目もくれず、ますます神から遠く離れ、荒みきって、滅びへの近道を急ぎます。神は、そんな私たちが滅びないように、様々な恵みによって人間の歴史を存続させてくださっています。しかし、放蕩息子が、財産を与えられることによって舞い上がってしまったように、私たち人間も、日ごとに与えられる恵みによってかえって高慢に神を侮り、やがて破局に至ります。賜物である資源をくいつぶし、地球の危機に直面している私たちの現実が好例です。そこに象徴されるように、今は本当に、罪の悲惨の極まった時代です。子どもたちも、そんな危機を覚えるべきです。そのような「愛する子どもたちの迷走」は、「父」にとって、耐え難く悲しいものです。私たちは立ち返らねばなりません。「わたしのもとに帰ってこい」と神は待っておられるのですから。

〈祈り〉

主よ、私たちに、まことの悔い改めを与えてください。

〈ねらい〉

神様の約束の確かさと恵み深さを喜ぶ。

〈展開例〉

①今日は先週の続き。神様を信じて船に乗ったノア一家のその後の話。世界への裁きは激しかった。聖書朗読(7章21～24節)。だが、ノア一行は神様の約束どおり、救いの眼差しを受け守られる。聖書朗読(8章1節)。そして神様の命令のもと、神様と新しくやり直し、神様と共に生きるための世界が始まる。聖書朗読(8章13～18節)。

Q. 皆は神様から助けられた思い出があるか？人付き合いでも、助けられた事柄が大きければ大きいほど感謝の気持ちも大きくなる。ノアは何から救われたのだろうか？「裁き」。もう少し噛み砕くと、神様から離れていく世界で、神様から捨てられて滅びる人生から救出された。

②救われた後の新しい世界で、ノアは、まっさきに礼拝を献げた。聖書朗読(8章20節)。きつと自分たちを救い出してくださった神様を礼拝したくてしょうがなかった。

Q. 皆は礼拝したくてたまらないほど救いを実感しているだろうか？神様は君を何から救いだされたのか？何から救い出そうとされているのか？ノアと同じである。助けられたことの重大さを見つめて欲しい。そして神様を礼拝することがどれほど自然なことか自信を持って欲しい。

③ところで、みんなはアダムが罪を犯したときに、神様がくださった約束を覚えているだろうか？「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く」(創世記3章15節)。神様は悪を滅ぼすために全人類を滅ぼすとは言わなかった。ひょっとしたらノアはその約束を知っていたかもしれない。時代は変わったが、実際

に神様は約束を貫き、人間が神様にとどまる道を残された。そして洪水後の世界で、神様と人間が共に歩むために神様は新たな約束(契約)をくださった。聖書朗読(9章8～17節)。神様は地上の生き物を洪水で滅ぼすことは二度としないと約束された。神様はどのような思いでこの約束をされたのか。聖書朗読(8章21～22節)。神様は人の心に悪があることを認めた上で、「産めよ増えよ」と言われた。そして虹の約束は「地の続く限り」守られるという。

④クリスチャンが「神様を信じる」のは「神様がいるかどうか」だけではない。私たちは、神様の言葉、神様の約束をとおして神様を信じる。例)君に知らない人から手紙が届くとする。そこには君がこのままでは死んでしまうこと、私がそこから君を救い出すという約束が書いている。初めは差出人自身が本物かどうか君は疑うだろう。でも、その手紙が「本当にそうだ」と思えるときに、君はもう差出人を疑わないだろう。

旧約聖書には、神様が約束を重ね、人間がその約束を信じなくなることの繰り返しを示されている。ノアの契約の後も、悪は以前のように増え広がった。しかし、やがて来る「最初の地が去るとき」(黙示録21章1節)まで、神様の前に完全に正しい方であるイエス様と、イエス様の新しい家族である私たちが神様と共に生きるために、神様は全人類を滅ぼしはしない。ノアのときはノアと数人の家族だけだったが、イエス様は数え切れないほどの家族と一緒に救われる。ノア契約に示された神様の懐の深さに感謝し、神の救いに友人や家族が加えられることを祈りたい。

〈祈り〉

私とこの世界の悪を堪え、裁きを遅らせ、救いへ招かれる愛に感謝します。アーメン。

この物語は、どうして人間は違う言語で話すのかという疑問に対して答える原因譚としての性格をもっている。まだこの時代、人間は一つの言語しかもたなかった。しかしある時、人間たちは力を集めて神に対抗しようという不遜な思いを抱き始める。「有名になろう」私訳では「我々は我々で名を作ろう」。神によってではなく、自分たちで自分たちの名を作る。名とはその人の実体であり、存在そのもの。自分で名を作るとは自分で自分を生かすというに等しい。神に生かされるのではなくて、自分でやる、神は必要ないという自信の表れ。同時にそれは、神より高みに立って、神が口出できないようにしてしまおうという、高慢の表れでもある。そんな高ぶりを象徴するように、高い高い塔が作られていく。神のおられる天に向かって。

そういう人間の不信仰と高ぶりとを打ち砕くために、神が言葉を混乱させられ、世界中に散らされたというのが、伝統的な読み方である。

この神の介入は、ある意味では神の救いを表しているとも言える。もしこのバベルの塔の出来事がなくて、あのまま人間が力を結集して、ますますおごり高ぶっていったら、どれだけ危険な状態になったか。

今現在、力が分散していながら、なお高ぶり続けて、高い塔を各地に作っている人間。そして限られた資源を食いつぶして、地球の環境をすっかり変えてしまって、世界全体を一瞬にして吹き飛ばしてしまうような兵器をも作り出してしまった人間である。現代の私たちは高度な文明と引き換えに、人類滅亡の危険をいつも突きつけられながら生きている。そう考えると、ここでの言語の混乱ということも、そんな滅亡の危険をわずかでも緩和するための止むに止まれぬ手立てだった

のでは、とも考える。

また注目すべきは、この出来事を通して人間が神から遠く離れてしまったということである。1～11章全体の流れを考えよう。神のかたちに創造され、エデンの園において神と共に生きる存在だった人間。それが墮落によって園を追われ、神から離れてしまった。それでもまだ神の近くで人間の営みは繰り返されていた。「エデンの園に近い＝神に近い」である。カインの殺人も、ノアの洪水も、まだエデンの園からそんなに遠くない出来事。しかしこのバベルの出来事によって、どう人間はエデンの園から遠く離れて、世界に散らばってしまう。それは神との霊的断絶を意味する。「わたしたちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方角に向かっていった。その私たちの罪をすべて、主は彼に負わせられた。(イザヤ53:6)」

そのことが、言葉が通じなくなるということかたちで表されているということが、また奥深く、悲しい。ここにある民族間での対話の断絶は、より根源的には、神との対話の断絶を暗示している。「我々は我々で名を作ろう」と、もはや神との交わりを必要ないとうそぶいて、帰るべき家を見失ってしまった人間がここにいる。そうしてもはや神と人間のあいだで言葉が通じなくなってしまう。

でも神は、なおあきらめず、世界中に散らばってしまった人間たちの中から、たったひとりの信仰者アブラハムをおこされて、彼とその子孫を媒介に人間に語りかけ続けてくださった。やがて神の言として御子を遣わし、御自分の心をすべて明らかにしてくださり、救いに招いてくださった。そのようにして進められてきた、長く周到な救いの計画を、今教会は宣教の業において担っているのである。(坂井孝宏)

テキスト 創世記 11章1～9節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問1

〔単元のねらい〕

「バベルの塔」の箇所は、わたしたちに人生の根本問題をさし示す。人間が被造物であり、それゆえ人間の本分は神の栄光をあらわすことにある（ウェストミンスター小教理問答問1、子どもカテキズム問1）を今一度心に刻みつけたい。

「神さまを土台とする」

洪水の後、地の上にまた人々は増えていきました。そして、自分たちの知恵や力を誇るようになりました。あるとき、人々はこう話し合いました。「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう」

天にまで届く塔を、力を合わせて建てようというのです。天にまで届く塔を建てる—これは神さまに対する挑戦です。なぜなら、天は神さまの住まいだからです。そこにまで届く塔を建てるとは、神さまと力比べをしようということなのです。神さまの知恵と力と、自分たちの知恵と力と、どちらが上か試してみようというのです。

そしてこのことは、神さまに対する背きです。わたしたちは知恵も力もつけた、天にまで届く建物を築くことさえできるほどに力をつけた、だからもう神さまなんていない、神さまなしでも、わたしたちはじゅうぶんにやっていける—そう人々は考えたのです。

ここでもういちど、エデンの園でアダムとエバをサタンがどのような言葉で誘惑したのかを思い起こしたいのです。それはあなたがた自身が神のようになれるのだ、という言葉であったのです。

罪とは自分を神とすることによって、神さまから離れることです。アダムとエバの罪は、ここで天にまで届く塔を建てようとした人々にも、確かに受け継がれていたのです。

けれども、人間は神さまにつくられた者です。ですから、神さまから離れることは人間にとってとてもみじめなことなのです。神さまから離れる

とき、人間は羊飼いのもとの離れ、群からはぐれてしまった羊のように、生きる目的も失ってしまうのです。ついに命を失うほかはないのです。

聖書では罪という言葉は、的を外れるという意味をもつ言葉です。天に届く塔を建てようとたくらむ人々の姿は、まさに的を外れてしまった人間の姿なのです。

神さまは、人々のこのたくらみを知られ、天からみ手を伸ばされました。これをおしとどめられたのです。

どのようなことをなされたのでしょうか。人々の言葉を混乱（「バベル」）させ、通じなくさせられたのです。このとき、世界中の人々が同じ言葉を話していました。ひとつの仕事を協力してなしとげようとするとき、言葉が通じるといのは大事なことです。言葉がわかるからこそおたがいの思いが通じて、作業がはかどります。けれども神さまは塔を建てようとしていた人々の言葉を乱し、通じなくさせられました。それで、この計画は仕事の途中でくじけてしまったのです。

世界中がひとつの言葉だったと聞くと、わたしたちはうらやましいと思うかもしれません。世界中の人々が同じ言葉を話しているなら、世界中どこに行っても、その国で言葉が通じなくて苦勞するということはありませんね。

けれどもこのとき、神さまが人々の言葉を乱されたことは、とても大切なことであったのです。このようにされたことで、神さまは人々の命を救

われたのです。もしも天に届く塔が完成したとしたら、人々は神さまからきっぱりと離れてしまったことでしょう。自分を神のように偉大な者と錯覚して、果てしなくおごり高ぶって生きるようになったことでしょう。人間にとって、それほどみじめなことはありません。罪ある人間が自分たちを神とし始めたなら、きっと争い合い、そしておたがいの命を滅ぼし合うほかはなかったでしょう。人々の言葉を混乱させたこと、それは人の命を守り、保つ神さまの憐れみのみわざであったのです。

「子どもカテキズム」の問1を見てみます。

問 私たちは何のために生きるのですか。

答 私たちが生きるのは、私たちの神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわすためです。これが私たちの喜びです。

この問答を、心にしっかり刻みましょう。今も

世界には、さまざまな「バベル」が建っています。人間の能力や技術を誇るような高いビルが競い合うようにして建てられています。科学が進み、人々の生活は便利になり、むずかしい病気も治るようになりました。人々は自分たちの知恵や力を誇っています。できないことな何もないとさえ考えているようです。けれども、そこではいちばん大切なことが忘れられています。人間の目的は自分を誇ることでなく、神さまの栄光をあらわして生きることであるということです。

神さまから離れたところでの人間のわざは、それがどのようなものであっても祝福されることはありません。神さまを人生の土台に据えるとき、わたしたちは祝福されます。わたしたちの知恵も力も、神さまからのプレゼントです。神さまの栄光のためにこれを用いるなら、わたしたちの命と人生は豊かに祝福されるのです。（木下裕也）

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙 ー 10章31節

だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、
何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい。



〈ねらい〉

自分の力で生きられると思い、自分を神とするのではなく、神さまを礼拝し、神さまと共に生きることがわたしたちの幸せであると知る。

〈さんび〉

いのちのこぼれ『プレイズワールド』、93「ぼくのたからもの」

〈おはなし展開例〉

みんなのお家では、お父さんお母さんも分かる言葉でお話ししてくれるでしょ。だから、お母さんに「牛乳もってきて」と言われたら、「はい」と言ってもってこれるよね。もし、みんなの家族がバラバラな言葉をしゃべるようになったらどうか？お母さんはフランス語、お父さんは英語、ぼくは韓国語、妹は中国語だとしたら、お互いに何をしゃべってるか分からないで困ってしまうよね。

今日の聖書のお話は、それと同じようなことが起こったというお話しです。世界が始まったばかりの時は、みんな同じ言葉でお話ししていたんだって。でも、人々はどんどん気持ちが大きくなって、神さまなんて知らない。自分たちの力で生きていけると思うようになってしまったんだよ。そして、「天まで届く高い塔を建てて、有名になろう」って話し合っ、高い建物を造っていました。そうして神さまから離れていきました。

神さまはどんどん神様から離れていく人たちを見て、考えました。「みんな同じ言葉でお話ししているから、こうなったんだ。みんなバラバラな言葉をしゃべるようにして、分からなくさせよう」

この時から、人間は色んな言葉をしゃべるようになったんだって。

このお話しで、神さまはわたしたちに大切なことを教えてくださっています。わたしたちは、自分が一番になりたい。お友だちより上手にやって、みんなからすごいねって言われたいと思うことがあるでしょ。でもね、みんなが上手に絵が描けたり、かけっこで一番になったりする力は、神さまがみんなにくれたプレゼントなんです。だから、わたしたちがえらいんじゃないかって、神さまがすごいんだよ。わたしたちは、一番になることや、人からすごいねってほめられるために一生懸命になるのではなくて、上手に絵が描けるようにしてくださった神さまに感謝することが大切なんだよ。そして、わたしたちに与えられている一番のプレゼントは、わたしたちのことを命をかけて大事にしてくれる、イエスさまのことを知っているってことなんだよ。これは本当に大切なプレゼントです。だからいつもイエスさまといっしょに歩いていきましょう。そして、お友だちにもイエスさまのプレゼントが届くように、お祈りしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。わたしたちがほめられることや、一番になることよりも、神さまにありがとうございますって感謝することができることにもなれますように。これからもイエスさまといっしょに歩いていけますように。お友だちにもイエスさまのことが伝わるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

人間の自分勝手な思い、神様のようになりたいという思い、神様を頼らないで自分の力を信じてしまうおろかさ、わたしたちの中にも同じ思いがあるかもしれません。子どもたちにとって一番大切な生き方は「神様の栄光をあらわす」ことだということを、もう一度確認しましょう。

〈はじめに〉

この一ヶ月のクラスの歩みはいかがだったでしょう？ 創世記1章から始まり、神様がいかにかに人を愛し、大切に創造されたかを学び、神様の愛を知りました。そして、罪の悲惨さ、悲しさをアダムさんとエバさん、カインさんの出来事を通して知りました。それでも、なお人は神様の憐れみによって生かされていることを、ノアさんを通して知らされます。神様の変わらない、徹底した愛を知りました。子どもたちは、神様の愛を知っているでしょうか。クラスでの先生の笑顔や、温かさ、配慮を通して、お友だちの優しさを通して、神様の愛を伝えましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①人は、天まで届くあるものをつくろうと思いました。それは何ですか？
- ②なぜ、天まで届く塔をつくろうと思ったのですか？
- ③神様はそれを見て、喜ばれましたか？
- ④神様はこの塔をつくっている人たちに対して、あることをしました。何をされましたか？
- ⑤この町の名前は何と言いますか？

〈展開例〉

バベルの塔のお話です。神様がこの全地を造ら

れて、人が造られてから、ずいぶん時間がたちました。人もずいぶん増えました。たくさんの人たちが、ひとつの同じ言葉を使ってお話していました。ある日、人が集まって、天まで届く高い塔をつくろうということになりました。

それは、人の心の中にある「神様のようになりたい」「有名になりたい」「自分はすごいと人から言われたい」「注目を浴びたい」という思いがムクムクと起こってきたからです。これも罪です。神様との関係で生きるのではなく、神様に従って生きるのではなく、神様はいらない、自分の力で生きていくという生き方ですから、罪人の生き方です。そういう姿を神様はご覧になられて、残念に思いました。そして、神様は塔をつくるたくさんの人々の言葉をバラバラにしていきました。

どうなりますか？ 人は言葉が通じないと本当に困ります。相手が何を言っているかわからないと、悲しくなるし、どうしていいのかわからないし、自分が言っていることも相手がわかってくれないと困るし、悲しいものです。特にここでは、ひとつの塔を作るためにみんなで相談していたから、言葉がばらばらになると相談が出来なくなってしまう。そこに集まった人々はバラバラになってしまいました。

神様は大切なことをわたしたちに教えてくださいました。神様との交わりを大切にすより、自分が一番、神様なんかいないという自分勝手な生き方はいけませんよ、神様はわたしたちとの交わりをいつも喜んで、待っていてくださるお方なのです。毎週日曜学校に来て神様とわたしたちはお話をします。それが礼拝です。神様が一番喜んでくださる時間です。神様が喜んでくださること、神様が大事にしておられることを、わたしたちも共に喜び、大事にしていきましょう。

〈祈りましょう〉

神様、あなたのご栄光をあらわすことができますように。

〈改革派信仰の確認のために〉

前もってウ小教理問答第1問をよく読んで、神中心主義に基づく人間の謙遜についてお考えください。また第一戒の解説（ウ小教理45～48、ハイデルベルク94）を合わせて読み、私たち人間が自分自身の力に頼る高慢も、神ならぬものを神とする偶像礼拝の一つのかたちであることを確認してください。

〈関連聖句〉

※子どもたちと一緒に味わってください。

詩編10編3～7節

箴言14章16節、16章5節、21章4, 24節

ハバクク書2章4節

テモテへの手紙一6章17節

テモテへの手紙二3章1～5節

ヤコブの手紙4章5～10節

〈恵みを立体化するための視点の提示、例話〉

※子どもたちとの対話に用いてください。

自信をもつのはいいことです。子どもたちには自信満々に、胸を張って生きて欲しいと願います。それは神に愛されている自分を知ることによる、絶対的な自己肯定に基づく自信です。罪人であると幼少時から教えることは、自己の存在否定に通じるという懸念は、まったくの無理解によるものです。罪人としての限りない自分の卑小さをよく見つめた上で、なおその私が愛されているという驚きこそが、いかなる窮状にも屈しない真の自信を与えます。この恵みの神とともに生きる民とし

て選ばれた喜びに胸躍らせて、与えられた人生を躍動して、神の栄光を表してほしいと願います。

しかし私たちは、勘違いしやすいものです。ただ神の恵みによってのみ与えられるおのれの存在の輝きを、自分自身が発する輝きと錯覚して、塵に過ぎない自分を過信する「高慢」の罪に陥ります。そうして大いなる神の力を侮り、神を信頼することから離れ、自分を神と同じ位置まで高めようとします。バベルの塔の物語が示す、最も本質的な問題です。

特に、子どもたちの霊的状况には注意が必要です。子どもたちの周囲には、マンガその他によって、人間の無限の可能性をたたえるような物語世界があふれています。「自分を信じる」という言葉には魅力があふれていますが、よほど慎重に扱わないかぎり、罪の自覚なきヒューマニズムに陥って、人間本来の目的を見失った迷走に行き着きます。先述したような、聖書的世界観に基づく正しい意味での自信、自己肯定、自己愛へと、子どもたちを導いていただければと願います。

〈祈り〉

神様、小さな私たちが、大きなあなたの手の中で生かされ、愛され、守り導かれていることの恵みを感謝します。私たちは、そんなあなたのご存在を忘れて、自分に大きな力があるかのように思ってしまう、高慢な者たちです。赦してください。そして、本当の自信を与えてください。



〈ねらい〉

文明の背後にある罪を悲しみ、人から悪を遠ざけようとされる主の恵みに感謝する。

〈展開例〉

①ノアの洪水の後、人間たちはどうなったのだろうか？ 神様に従う新しい世界は訪れたのだろうか？ 残念ながら人の心は相変わらず悪を生み出す罪に捉われていた。聖書朗読（9章20～25節）。ノアでさえも例外ではない。ノアは酒に溺れて醜態をさらし、それを見た息子のハムは父の醜態を言い広め、そのことを知ったノアはこんなことを言う始末。「カナン（ハムの息子）は呪われよ 奴隷の奴隷となり兄に仕えよ」。愛し合うための世界は、人が人を支配する悲しい世界となっていく。聖書朗読（10章6～10節）。

②罪から生まれる悪の文明はとどまることを知らない。彼らは同じ場所に集まり同じ言葉で一つの町を築いた。聖書朗読（創世記11章1～4節）。

Q. 神様は彼らのしていることの中に悪を見た。彼らの何がそんなにいけなかったのか？ 彼らの文明とは、「自分たちの力で、神様の領域である天にまで押しかける文明」、「神様の力に自分たちが対抗できることを世の中にアピールしようとする文明」だった。つまり、「自分たちが神様になり替わろうとする文明」だった。人間は神様に歯向かおうとする「罪」に支配され、神様と愛し合う関係を歪め、人と愛し合う関係を歪め、世界を正しく管理するはずの文明を歪めた。

③神様はその様子を御覧になり、人々の言葉を混乱させた。そして、さらに人々を世界に散らされた。聖書朗読（5節以下）。彼らは、共に語り合う言葉を失い、同じ文化を持つ仲間関係を失った。「こんなのは神様の横暴だ！」 こんな反論があるかもしれない。だがどうだろう？

例）出張に行く父親が子どもと会話するために携帯を買ってあげたとする。だが、子どもは友だちと電話するだけで父親の電話にもしない。それどころか、電話で仲間と連絡を取り合い、家に集まって父親から家を奪い取る計画まで立てている。それを知った父親が携帯を取り上げ、仲間を家に帰すことは横暴なことか？ 人間は、神様と語り、神様のスバラシさを語るための言葉で、「俺たちに神なんか要らない！ 人生は俺たちの思い通りにやらせてもらう！」と語り合う。行き着く先は神様から捨てられる悲しい人生だ。破滅へと突き進んでいた人間への神様の対応は、非難どころか感謝するべきこと。

④現代を生きる皆にバベル物語は単なる昔話か？ 神様を知らない友だちは、神様抜きで「有名になろう。成功しよう」と考える。知らない間に君もそんな影響を受けていないか？ 神様抜きで盛り上がる会話の中で、「俺の人生は俺のものだ！」、こんな思い上がりに陥ってはいないか？ 自力で成功を掴もうとする人に憧れてはいないか？ 天のイエス様を無視した人生は果たして爽快なものか？ イエス様は、君がそんな価値観で生きるために命を捨てられたのだろうか？

⑤イエス様は罪に歪んだ人生を整えてくださる。神様を知る者の言葉を整えてくださる。神様と語り合うための言葉、神様のことを語る言葉、人を大切にする言葉、世界を大切にする言葉へと。うぬぼれの気持ち良さで天に昇るのではなく、神様を慕う心から天に昇る者とされたい。

〈祈り〉

罪の人生に突き進む私たちを聖書の言葉で導かれる神様。私とこの世界の悪を抑え、神様の子どもに相応しい言葉をください。アーメン。

2010年7～9月カリキュラム（第38号）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
7月4日	アブラハムの召命	創世記12:1-9	創世記12:4a
	神の選びと召しに従ったアブラハム。神に召されて歩む幸いを知ろう		
7月11日	アブラハムへの約束	創世記15:1-21	ヨハネ3:16
	神の約束に信頼して生きたアブラハム。約束に基づいて生きる生き方を知ろう		
7月18日	ソドムの滅亡	創世記19:1-29	ローマ3:23-24
	神の裁きを知り、主をおそれることへと招く。振り返ることなく神に従おう		
7月25日	イサクの誕生	創世記21:1-8	ローマ9:8
	神の約束と憐れみの中でイサク（笑い）が与えられた。神の祝福を知ろう		
8月1日	イサクを献げる	創世記22:1-19	ヘブライ12:5,6
	アブラハムの信仰の姿を学び、備えておられる神の恵みを知ろう		
8月8日	ヤコブとエサウ	創世記27:1-40	ヘブライ12:14
	人の企みを超えて神がみわざを成し遂げておられる。神をほめたたえよう		
8月15日 平和主日	平和の主	ローマ1:7	ローマ15:33
	平和の源である神。主イエス・キリストからの恵みと平和を祈り求めよう		
8月22日	売られたヨセフ	創世記37:1-36	コリント二1:20
	ヨセフ物語をとおして、神の歴史支配を確信する信仰、摂理の信仰に立とう		
8月29日	総理大臣になったヨセフ	創世記41:1-44	創世記39:2
	苦難の中でも主が共にいてくださる。主が共にいてくださる幸いを知ろう		
9月5日	摂理の主の勝利	創世記50:15-21	創世記50:20
	人の悪を善へと造りかえる主のみわざを学び、摂理の主を信じる信仰を養おう		
9月12日	モーセの誕生	出エジプト1:22-2:10	ローマ8:28
	主なる神の不思議な導きをとおして、歴史を支配しておられる主を仰ごう		
9月19日 (20敬老の日)	モーセの召命	出エジプト3:1-22	マラキ3:6a
	契約に真実である神が救いの土台である。わたしたちも真実に神に応えよう		
9月26日	十の災いと過ぎ越し	出エジプト7:8-24	出エジプト7:5
	十の災いのみわざをとおして、ご自身の民を贖い出す神をおそれ、あがめよう		

2010年度 年間カリキュラム

(2010年4月～2011年3月)

二年サイクル聖書物語の第一年

	月 日	教会暦・行事	主 題
2010年 第37号	4月4日	進級式・復活祭	復活のキリスト
	4月11日		創造主なる神
	4月18日		被造物の祝福、環境（土地・生物）
	4月25日		神の栄光の舞台、歴史の主
	5月2日		人間の創造、人生の目的と文化命令
	5月9日	母の日	人間の創造、男と女の創造
	5月16日		罪と墮落
	5月23日	聖霊降臨祭	聖霊降臨と教会
	5月30日		救いの約束（原福音）
	6月6日		カインとアベル
	6月13日	花の日	ノアの箱舟
	6月20日	父の日	ノアの契約
	6月27日		バベルの塔
第38号	7月4日		アブラハムの召命
	7月11日		アブラハムへの約束
	7月18日		ソドムの滅亡
	7月25日		イサクの誕生
	8月1日		イサクを献げる
	8月8日		ヤコブとエサウ
	8月15日	(平和)	平和の主
	8月22日		売られたヨセフ
	8月29日		総理大臣になったヨセフ
	9月5日		摂理の主の勝利
	9月12日		モーセの誕生
	9月19日	(20敬老の日)	モーセの召命
	9月26日		十の災いと過ぎ越し

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題
第39号	10月3日		葦の海を渡る
	10月10日		天からのパン
	10月17日		十戒を授かる
	10月24日		金の子牛の事件
	10月31日	宗教改革記念日	幕屋の建設
	11月7日		約束の地の偵察
	11月14日		ヨルダン川を渡る
	11月21日		約束の地カナン
	11月28日	アドベント	待降・アブラハムの子
	12月5日	アドベント	待降・ダビデの子
	12月12日	アドベント	待降・バビロン捕囚
	12月19日	クリスマス	降誕・主イエスの降誕
	12月26日	年末	東方の学者たち
2011年 第40号	1月2日	新年	洗礼者ヨハネと主イエスの受洗
	1月9日		荒れ野の主イエス
	1月16日		ガリラヤ伝道
	1月23日		八福の教え
	1月30日		地の塩・世の光
	2月6日	(11信教の自由)	律法の完成者キリスト
	2月13日		完全な人イエス
	2月20日		天に富を積む
	2月27日		神の国と神の義
	3月6日	(9- レント)	黄金律
	3月13日	レント	権威ある者の教え
	3月20日	レント	病人をいやし預言を成就するメシア
	3月27日	レント	嵐をしずめる権威を持つメシア

〈執筆よりひとこと〉

- 子どもたちの心に、イエスさまが触れてくださいますように。(家山華子)
- 新しいクラスの上に豊かな祝福が注がれますように。(芦田順子)
- 従来の展開例と違って使用しづらいというご意見があるかもしれません。より教師の皆さんに益する教案にしていきたいと、試行錯誤しているところです。ご理解ください。(坂井孝宏)
- 欠けの多い奉仕でしたが主が憐れんで用いてくださいますように。(山中恵一)
- 新年度に入り、教案誌も救済史のカリキュラムが始まります。救済史をとおして、神の歴史に命が与えられている祝福を伝えていきたいものです。(辻 幸宏)
- 子どもたちひとりひとりの心が、イエス・キリストにある喜びに満たされますよう。(木下裕也)

〈あとがき〉

- 「教会学校教案誌」をお届けできますことを、あらためて神と読者の皆さまに心から感謝申し上げます。届けられた封を破り、最新号を手にしてくださるその時、そこに至るまでの数々の奉仕者の労苦に思いをはせてくださるならば幸いです。まず、執筆者の犠牲的な奉仕なしに弊誌はあり得ません。とりわけ分級展開例は、読者であり、現場の奉仕者である教会学校教師による執筆であることが、弊誌の特徴の一つです。どうぞ、編集部までお声を掛けてください。また、こちらから声を掛けさせていただいたときは、どうぞ、祈りの内にお引き受け下さい……！
- 先日、「クリスチャン新聞」の教案誌特集に弊誌も取り上げられました。改革派教会外においても、教案誌として認知され、いつものように掲載されるようになってきて、感謝です。専任の奉仕者なしに、牧会伝道で多忙を極めている教師たちの手によって刊行を重ねているのは、ほとんど例外的だと思います。編集部の教師のためにお祈りください。

●私たち日本キリスト改革派教会は、小さな教会です。けれども、他中会の情報は、意識しなければ見逃されてしまい、分かち合うことがないかもしれません。弊誌は、現時点でなお中部中会の委員会の営みですが、すでに大会規模の働きになっています。教案誌の役割の一つとして、そのような他中会とその教会・伝道所の取り組みを分かち合い、互いに刺激し合うこと、そして、改革派信仰によりよく根ざし、かつその時代にふさわしい実践を追求する触媒となることが挙げられます。どうぞ、現場の奉仕者からのフィードバックをお願いいたします。また、小・中・高の教師方には、学校教育の現場からの情報をお願いいたします。児童、青少年に触れる働きに従事しておられる方からの声をお寄せください。

●様々なご意見、情報をお気軽に編集部までお寄せください。弊誌は、皆さまのものです。皆さまに奉仕することこそ、その使命、目標です。今後とも宜しくお願い致します。

●表紙のイラストは田口裕美姉が担当してくださいます。本文のイラストは岡野美佳姉です。ありがとうございます。

●Soli Deo Gloria!

〈購読の申し込み〉

- 『教会学校教案誌』をぜひご購読ください。また、別冊『子どもカテキズム』(300円)をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第32号までは一部500円で販売しています(品切れの号もあり)。
- 申し込みの受け付けと送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。副読本『主は羊飼い』のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	小野静雄 (多治見教会牧師)	説教展開例	二宮 創 (太田伝道所宣教教師)
巻頭説教	二宮 創 (太田伝道所宣教教師)	相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)	望月 信 (高蔵寺教会牧師)
教会学校・日曜学校訪問	弓矢健児 (千里山教会牧師)	辻 幸宏 (大垣伝道所協力牧師)	木下裕也 (名古屋教会牧師)
教師研修会講演	渡辺信夫 (日本キリスト教会東京告白教会牧師)	長谷川潤 (四日市教会牧師)	分級展開例
教師研修会応答	伊藤治郎 (四日市教会長老、日曜学校校長)	幼稚科	家山華子 (伊丹教会日曜学校教師)
基本方針・救済史カリキュラム・コラム	相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)	小学科下級	芦田順子 (新浦安伝道所日曜学校教師)
聖書研究	後藤公子 (元インドネシア派遣女性宣教教師)	小学科上級	坂井孝宏 (熊本伝道所宣教教師)
	弓矢健児 (千里山教会牧師)	中学科	山中恵一 (板宿教会協力伝道者)
	牧野信成 (神戸改革派神学校教授)	イラスト作画	表紙 田口裕美 (尾張旭教会)
	坂井孝宏 (熊本伝道所宣教教師)	本文 岡野美佳 (青葉台教会)	
	久保田証一 (盛岡伝道所宣教教師)		

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上伝道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
長谷川潤	四日市教会牧師
望月 信	高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』
2010年4・5・6月号 (季刊)
第37号
2010年2月28日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上伝道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円 (本体価格)
